

70
NO.8
¥100

安保フンサイへ人間の渦巻を!!

週刊アビメ

2・23

昭和45年2月23日(隔週月曜日発行)通巻第8号



GO

安保をつぶせ！ 沖縄を私たちの手に！ 日本を私たちの手に！

■ 郡山吉江さんの場合

このインタビューは、東京地方裁判所の地下にある食堂でおこなわれたもので、す。あと二、三日で六十二歳になるといふ郡山さんは、十・二一事件の裁判の休息の時間に約一時間近くも、静かに様々なことを話してくださいました。ここにその話しを全部のせることが出来ないのが大変残念です。

きつかけといふよ、うなものは、ことそれ
らないのです。

救援の活動を始めたのは、おととしの十・二・一からなのです。救援連絡センターガが出来る少し前ですね。あの時、私も新宿へ行きまして、たくさんの逮捕された中から、市民が二人起訴されました。もし自分があそこで逮捕されたら、自分も起訴されただろうと思いまして、そういうのが、救援の仕事を始めた、多分きっかけだと思います。

救援の活動を始めた、きっかけ
というようなものは、何でしょうか。

実際には、何からやつていいのか、わかりませんで、友人なんかと話し合つたのですが、実りませんで、結局、東大の闘争がありましたでしょ、あの時、今まで何かやろうと思った時、連帯とか組織とかによりかかっていたですね、でもそういうことじやいけないんだなと感じましたので、私の友人、六、七十名に自分の気持ちを書いたプリントを出したのです。そしたら反響がありまして、お金も少し集まりました。そのお金を、その時、出来たばかりの、救援センターと、

す。そうしたら反響がありまして、お金も少し集まりました。そのお金を、その時、出来たばかりの、救援センターと、「市民を守る市民の会」で分けたりしました。そんなのが、始まりなんんですけど。十・二一の時に逮捕された市民の方の裁判は、四月の二三日か、二四日でしたか、第一回の裁判があつて、その時からずっと傍聴しているわけです。それからその人たちに始めて会いに行つたのは、

この人と語る



市民を守る市民

次号の発売日は二月九日(月)です
つ て い る の だ そ う で す が。
去 年 の 十・二 一 で す。 府 中 に 入 つ て い
る の で す。 い つ 出 て 来 ま す か。 ち ょ つ と
わ かり ま せ ん ね。 長 い だ ろ う と 思 う の で
す が。 私 が 生 き て いる う ち に、 帰 つ て 来
て く れ ば い い と 思 い ま す け れ ど。

すが。私が生きているうちに、帰って来てくれればいいと思いますけれど。――普段のお仕事は、何をなさつていてるのですか。

日雇いです。失対ですね。ずっと。今は、夫はなくなりましたし、子供たちは、それぞれ家庭を持つて独立していますから私は一人でやっていかなくてはね。本当は私の職場に来てもらつた方がいいかもとも思ったのですが。

一年を取つた方が、体を実際に動かして活動していらっしゃるのを見ると、私たち若い人間は、安心するというか

勇気を得るということがあるのですが、いやなどころも、ありますよ。私たちの年代の人が、自分が経験した、という上に立つて押し出してくるガンコさみたいなもの、私自身にもあるんだと思うのですが、そういうのは、非常にいやですね。同じ年代の人と仕事をしていて。

それと同時に、うんと若い人たちの中にも、私たちの年代が持っているのと同じ質のガンコさがありますね。本当はその二つのガンコさが結びついたところから何か新しいものが出てくるのではないかもと思うのですが。

二月の二十日でした。それから今日まで
なにとはなしに面会をしたり、差し入れ
をしたり傍聴をしたりして、一年たって
しまいました。

——今のような、救援のお仕事を始める
前は、何かこういうような運動をなさ
つていたのですか。

そう聞かれると、ちょっとどこまるんで
すけどもね。戦前に少し。ですから、ず
い分と昔のことです。で、あとで除名に
なりました。そんなようなことが、あり
ましたけれども。

——息子さんが、逮捕されてまだ中に入

つて いるの だそ うで すが。

安保をつぶせ！ 沖縄を私たちの手に！ 日本を私たちの手に！

人間の渦巻で

安保の中身を空ツボにしよう

小田 実

だ私は、ただ、ベトナム戦争は、そ
んなふうに他人事のように語ることで
ませる問題ではなかつたのである。

「ベ平連」の運動はたんなる同情から始
まつた、とよく言われた。今でも言わ
れる。そのたびに私は、そうだ、と答
える。かつてもそうであつたし、今もそ
のたび、と卑下もてらいもなく答えてお
きたい。

一つのことだけを言っておこう。同情

二月という想い出しがある。も
ちろん、北爆のことだ。五年前、北ベト
ナムに対するアメリカ空軍の爆撃が始ま
り、そして、ベ平連の運動が始まつた。

その直後、ある総合雑誌がベトナム戦
争の特集号を出した。「ベトナム戦争は
どのようにすれば解決するか」——そ
うした題名のアンケートがなかにはあつ
て、三十人ほどの人が意見を述べてい
た。みんな、知識人という名で呼ばれて
いい人たちである。さまざまの考え方の
人がいて、さまざまの意見を述べていた。
私もその一人だった。私も自分の意見
を述べたのだが、私一人だけが他の人た
ちとちがつていた。他の人たちがみんな
左翼で、私一人だけがちがつていたとい
うのではない。あるいは、その逆でもな
かった。たいてい人がベトナム戦争に
反対していく、北爆を非難していく、私
もその一人だった。

1

ちがいは、——そう、次のようにも言
えばよいのか。ほかの人たちは、アメリ
カの情勢について書き、日本の情勢につ
いて書き、ベトナムの過去、現在、未來
について語り、ジョンソンはこうすべき
だ、日本はこうすべきだ、ベトナムはこ
うすべきだ、と述べていた。私はそんな

ことは何一つ言わなかつた。ただ、私
は、自分はベトナム戦争に反対だ、と書
いた。その反対の意志を表明するため、
あるいは、もう一つ言って、その意志を

実現するために、これから自分が何をす
るか、ということだけを述べていた。

2

私が何故、そんな意見を書いたか。自
分でもそのときにははつきりしていなか
つたことなのだが、たぶん、私は、自分
自身のことをさておいて、世界について
語ることにウンザリしていたのだろう。

アメリカの情勢について語り、ジョン
ソンはこうすべきだ、と説いたところ
で、世界はどのように変わるものではな
い。世界を変えるために、自分がどうす
るか——いや、そう言えば、大げさすぎ
る。革命家でも英雄でもなんでもない、
一人のふつうの人間である（ふつうの人
間にすぎない、と私は言つてゐるわけ
はない。ふつうの人間である、と卑下も
てらいもなく、私は事實を言つてゐるの
だ）私は、ただ、ベトナム戦争は、そ
んなふうに他人事のように語ることで
ませる問題ではなかつたのである。

ければならないと感じた。そして、私はベ平連の運動を始めた。

ベトナム人に戻って言えば、ベ平連での私の出発点は、私がベトナム人ならどうするのか、何をなし得るのか、ということであったように思う。それは、そのまま、私がアメリカ人ならどうするのか、何をなし得るのか、に通じるだろう。日本人としてどうするのか、何をなし得るか、いや、ひとりの人間としてどうするのか、何をなし得るのか私はそれを考え、「ベ平連」の運動を始めた。

この態度は、決して、自分を高みにおいて、世界を眺める態度ではない。自分がみんなと同じところに立っている、自分がほぼ同じであるという状態のなかにいることを自覚する態度だろう。自分が九天の高みを飛翔する鳥ではなくて、地上をはいまわる一匹の虫であることをはっきり認める態度だろう。私はそこから

——そこからしか出発し得ない自分を感じた。それが、「ベ平連」の原理だった。すくなくとも、私にとってはそうだった。

3

私は小説を書く人間なので、小説のことをときどき考えてみる。そのときふしきな事実に今さらのようにあらためて気がつくのだが、それは、小説の主人公がすべて人間であるということだ。

あたりまえのことを言うな、と笑わないでいただきたい。私が、たとえば、國家権力について小説を書くとする。論文

——小説家はそうするよりほかに方法をもたない。

ここで困ったことがおこる。彼が人間である以上、そして、私も人間である以上、私と彼はどこかで強く結びつく、ずるするところがちがいはない。たとえ、私が彼と正反対のところに立とうと、私と彼はまぎれもなくつながった存在であるにちがいない。たとえ、私が彼と正反対のところに立とうと、私と彼はまぎれもなくつながった存在であるにちがい

——ということは、今もしここに、同じ事実認識をもちながら、同じ決意を強力な行為のかたちであらわす人間がいるな

を食べたりしないだろう。八時十分前に駅に駆けつけて満員電車に乗り込んだりしないだろう。つまり、国家権力を小説に書くなら、国家権力そのものではなく（しかし、考えてみると、「国家権力」そのものというようなものがほんとうに存在するのか）、「国家権力」の手先である機動隊員を書きあらわすよりはかに術はないのだ。具体的に言えば、一機動隊員の生活のこまかなるヒダ、思想、感情、欲望、心理、その他のものもろもろのなかにたたみ込まれたさまざまなものを描き出す

がっている。

しかし、それでいて、彼が家庭でどのように善良なパパであろうと、同時に学生たちを理不尽に殴りつける機動隊員であります。ソソミの大虐殺を行なった人たちがおどろくほど「正常な」人間たちであったという事実と、それはきわめて密接につながっている。いや、つながっていると言えば、私もまた、彼と、彼らと、その事実をふくめてどこかでつながっているのではないか。それがそうだとすれば、私はいつ、どこで、どう

のようにして、そのずるずるべったりのつながりを切ることができのか——私が「ベ平連」の運動を始めた動機には、まぎれもなく、その事実認識があり、一通りの決意があった。

——ということは、今もしここに、同じ事実認識をもちながら、同じ決意を強力な行為のかたちであらわす人間がいるな

開闢うべトナム人留学生支援をする

講演と映画の夕べ

3月9日(月) 19時

全電通会館

主催

ベ平連
ジャテック
大泉市民の会
ベトナム反戦ちょうちんでものの会

ら、私と彼とは、おそらく人間存在のもつとも根本的なところで切り離しがたくつながっているにちがいない。自衛隊の隊内で「アンチ安保」のピラをまいた小西誠氏は、そうした人間の一人だった。私と直接につながる人間だと言つてよい。

4

そうした人間の数をふやすことはできないものか。いや、そんなふうに他人事のように言うのはよそう。私自身が、そのため、何を、どうすればよいのか。小西氏の出現は、私にその問題を突きつけて来たのにちがいない。そのためには、たとえば、自衛隊、たとえば、機動隊、たとえば国家権力という名で呼ばれるさまざまな制度機構のなかの人間ひとりひとりに眼を向けて行く必要があると、私は自分にむかって言う。彼らのなかに私と同じ人間を認め、彼らが人間であるゆえに、まさにそのことのゆえに、彼らの非人間的行為を徹底的に糾弾し、同時に、彼らのなかに人間としての可能性を見出す。

そうした人間の数がふえることは、たとえば、自衛隊がたとえ存在しつづけようとも、有名無実なものとなることを意味しているにちがいない。同じことは他のさまざまな国家権力の制度、機構についても言え、企業についても言えるだろ。いや、安保体制そのものについても

言えるにちがいない。たとえ、安保条約という名前のものが存在しつづけようとも、その中身は空ッポのものになつていい——私たちは、「人間の渦巻」を権力の内部にまでひろげて行くことによつて、それをすることができる。いや、今こそしなければならないのだろう。

5

「安保をつぶす」運動は、決して、終つては、私にそのような事実認識を強い。次のように言えよいか。長いあいだかかって、私たちはようやく小西氏をもつことができるところにまで来た。そして、ほんとうのたたかいまさに今始まつたのだ、と。

私は小西氏に「同情」する。それゆえに、いっしょに行動して行きたいと思ふ。人間の渦巻をひろげ、安保の中身を空ッポにして行きたいと思う。小西氏は「自衛隊粉砕」、あるいは、「解体」を大所高所に立って叫ぶ代りに、論じる代りに、自らの行動でその第一歩に乗り出しを行つた。

さて、私たちは、いや、私はどうするのか。それが「同情」のほんとうの意味だ。

緊急アピール

小西君の問題について、新しい運動を起したいと思います。運動は三つの部分をもちます。一つは、小西君の裁判についてのたたかい。二番目には、第二、第三、第二千、第三千の小西君を自衛隊のなかにつくり出して行く運動です。三番目には、市民のあいだに、この運動をひろげて行くこと——三つはバラバラに存

在するものではありません。三つがつながり、大きく全国にひろがることで、はじめて、一つ一つが大きな力をもつ。裁判そのものについても同じです。裁判所で、自衛隊違憲の判決をかちとることはきわめて重大です。私たちは今すぐにでも、そのため全力をつくさなければならぬ。しかし、それだけでは十分ではないのです。同時に、第二、第三の小西君の出現によつて自衛隊の中身を空ッポにして行くことはもと必要でしょう。

特別弁護人選任届
右の者に係る自衛隊法違反被告事件について
小西君を特別弁護人に選任いたしました
昭和四十五年月日
原告
被告
新潟地方裁判所御中
キリトリ線

弁護人

新潟地方裁判所御中
キリトリ線

〔註1〕記入は弁護人の氏名・住所・年月日・弁護理由のみ。氏名の下に印籠を。

〔註2〕弁護理由は、「一、行で、自分が小西君を弁護する理由を書いてください。もちろんあなたの個人の考え方の行動主義を支持する人間たちの手で、今、「みんなで「民衆の弁護人」になろう」という運動を起しつつあります。

市民運動

自省と噴出のはざまで

特集

アンポのンの字はおしまい
のン、アンポのボの字はボ
シャるのボ。つづけてみり
やあ、運動はみんなボシャ
つておしまい。これで世の
中、安泰だあ。浮かれて、
そんじや、万博へ！

安保ということばが、一九
七〇年のはじめから電波や
紙上から消え去つていい。
消え去つた安保を、いま、
市民運動は確実に堀りおこ
しつつある。

アンポのアの字は安泰のア、
ですか？ 佐藤さん。

変革を求める 市民運動の方向

平連全国懇談会には北海道から鹿児島まで、二百五十名の人々が一年間のさまざまな運動と経験をもちよつて語りあつた。そこにはべ平連運動のものつ不思議な活力がみなぎつていた。

なが市民の間にひろがらない』へ平連運動が何を求めているのかわからない』(大田ベ平連)といった問題は数多く出され、たし「女子高校生がベ平連運動はふつうの政治運動ではないのだから参加させて欲しいと投書をしたところ、学校が筆跡鑑定までして探し出し、始末書をとった』(鹿児島ベ平連)というムチャな弾圧を加えられているところもある。しかし、参加者の気分は一様に明るかったし、今後の方向をそれぞれにつかみ出して発言していたといえる。ここでは、まづ平連運動全般にわたる方向についていくつかの問題を考え、ついで、今後の課題として提案された問題をまとめていきたいと思う。

私自身 咨年九月の一へ平連ニユリ
ス」に運動を多元化する必要を強調し、
この会議にむけても「一人一人が追究す

を作るよう働きかけていくというのである。「ソノミ虐殺」「フォーク」「沖縄」といったグループ、そして、すでにはじまつ

連運動を作り出した最大の財産だ。しかし、それがいちず「佐藤訪米阻止」「安保粉碎」の街頭行動へと向けられたとき、厚い国家権力の壁にぶつかり、どこから

古山洋三

特集1

1

突き破つてよいわからぬといふトマトイと、無力感・むなし感が小さな自分を圧倒するということになりかねない。更なる実力を結集して体当りすることの必要性を否定するわけではないが同時に、情況の網の目を一つでも二つでも曠い破つていくこと、そこで小さな「人間の渦巻」を無数につくりだしていくことが私たち一人一人にもとめられていると思う。人間の「渦巻」は大きな一つの台風の眼のまわりに作られるのではなく、無数の「渦巻」の集まりとしてはじめてできるのだろう。といって、いうまでもないことだが、六・一五や十・十のようないくこと、全国的な統一行動の必要性がないということにはならない。こうした行動は、それ 자체大きな政治的意味をもつものだし、そこで新しくエネルギーが引き出され、そこでもたしかなことである。要は、

このエネルギーが一日だけのものに終わらないことであり、そのためには、一人人が日常的に「渦巻」を作り出す中心となつていかなければならない。いいかえれば「一人でも何かをはじめる自立した運動者」となることが必要なのだ。ペ平連とは何かと問われたなら、私はたまらうことなく「一人でも何かをはじめる自立した運動の連合」とこたえるだろう。一人人がこのような運動者になることは決してたやすいことではない。しかし一日のデモをいわば免罪符とするという運動ではペ平連は一日もつづかなければいけないということはもはやたしかなことだろう。それではこうした自立した運動者になるということは、どのようにして可能となるのだろうか。ペ平連運動の最大の長所が一つのイデオロギーにもとづく運動でないということは自明だから、とい

うよりは、多種多様なイデオロギーを含む集団であることにべ平連の活力の秘密の一つはあるのだから、自立した運動者としての支えをイデオロギーに求めることは賢明ではない。となると自分がにぎってはなさない個別的な課題を持つといふことがさしあたり可能な唯一の方法だろう。と同時に、その課題の意義づけはしつかりしなければならない。各地で学習会や合宿が行なわれている報告があつたが「運動」に追われてその行動の意義をたしかめていく努力が今までのべ平連運動にやや不足していたことはたしかなことだ。この点はおぎなつていかなければならない。ただ関西べ平連のいうようにならぬ。それが「研究+行動提起」というかたちのもので常にありたいと思う。

おける集会・デモ、ステッカーはり、力
ンバ活動等があげられる」

京都北地区反戦市民の会の活動はもう
一つ先をいっている。「ビラ撒きはしな
い。一軒一軒に必ず入れていく。それも
誰にでもわかる言葉で。たとえば、佐藤
をアメリカにやらしまへんと」というよ
うに」

福岡ベ平連の報告では、昨年八月以降
十一月までの特徴を「この時期の重要な
点に、地域ベ平連の結成がある。各大学
をはじめ自衛隊のホークミサイルの設置
が予定されている飯塚に、またCO患者
問題をかかえた三池に、そして久留米に
と新しいベ平連ができる。これは求心的
(急進的ではない!) ないし閉鎖的に陥
りがちであったこれまでの運動に、遠心
的な作用を与えるとともに行動と実際的
な問題意識の多様化を与えるという意味
で必要なことである」とまとめている。



存在にも気づかず、東べとともに行動しようという人はでてこない……全くの悪循環である……以上のことを踏まえた上で、一つの大きな柱が出てくる。すなわち地区における運動の展開である。その具体的な計画としてのフォーラー集会を通して市民の反戦感情を高めること、柏に

多元化・個別化ということを考えると、必ず出てくるのは地域での運動の問題である。たとえば東葛ペ平連は次のようにいっている。「人數が少ないから地区においてあまり運動をやらず、いつも東京、あるいは三里塚に出かけている。そうすると柏市民に対するアピールがおろそかになる。すると東葛ペ平連の

よりは、多種多様なイデオロギーを含む集団であることにべ平連の活力の秘密の一つはあるのだから、自立した運動者としての支えをイデオロギーに求めることは賢明ではない。となると自分がにぎってはなさない個別的な課題を持つといつことがさしあたり可能な唯一の方法だろう。と同時に、その課題の意義づけはしつかりしなければならない。各地で学習会や合宿が行なわれて いる報告があつたが「運動」に追われてその行動の意義をたしかめていく努力が今までのべ平連運動にやや不足していたことはたしかなことだ。この点はおぎなっていかなければならぬ。ただ関西べ平連のいうようにそれが「研究+行動提起」というかたのもので常にありたいと思う。

「地域」での活動の重要性はいまさらいうまでもない。ペ平連運動はいまみて来たようにこの方面でも着実な歩みをすすめている。しかし杉並革新連盟の人々が懇談会の席で再三のべた「日常闘争」「地域闘争」という考え方には無条件で賛成はできない。運動が日常的に追究されなければならないということには異論はないが、日常的につづけるということは必ずしも「地域」の問題とむすびつくからである。私と

（べ平連ニユース五三号）
をはじめ自衛隊のボランティアの手で予定されている飯塚に、またC.O.患者問題をかかえた三池に、そして久留米にと新しいべ平連ができる。これは求心的（急進的ではない!!）ないし閉鎖的に陥りがちであったこれまでの運動に、遠心的な問題意識の多様化を与えるという意味で必要なことである」とまとめている。



しては「地域化」の必要性を強調した上で、それをさしあたり、多元化・個別化の方向としてとらえたいと考えている。「地域」とならんで「職場」の問題があるのだが、この点では残念ながら私たちの経験はとぼしい。都職労ベ平連から「組合にはあきたらないが反戦には加われない」という人たちで「組合の中にベ平連を作つてもおかしくない」とベ平連を結成した報告があり、佐藤訪米数日前に羽田空港の従業員の手で「ベ平連」がつくられてもいる。自立した運動者がグループを作るとき、その単位は実生活上の便宜によって主として集まるのだ。したとえば「大泉市民の会」と名のついていてもそれが大泉の住民だけで作られねばならないという理由はなく、現に他の地域の人も加わっている。市民集会池袋西口などという集団は、駅を通過するすべての人にひらくかれているわけだ。私たちは、こうした考え方の上に立って、とくに「職場ベ平連」の問題について経験を重ねていく必要があると思う。それは単に集る便宜という以上に職場での課題を持つことになると思う。

ここでは十分にとりあげることはできないが、同時に出現されている「反戦」は「かわめて重要で加わらない」という問題はきわめて重要な問題であると思う。それは大学ベ平連にも共通していえることであり、セクト、ある学生のなかでベ平連運動に加わっている学生の数は非常に多いと思われる。(たとえば宇大ベ平連)「大学ベ平連とは何か」という点について、懇談会でも十分な論議はなされなかつたが、問題だけはハッキリと出されていた。「全共闘のかくれみのではないか」(神奈川大)「セクトからはみ出た学生のかくれみのではないか」(声なき声の会)「セクトの引きぬきがはげしい」(神戸行動委員会などなど)。反対に「ノンセクト」というセクト」といった表現もさかれるのだが、私たちがセクトを責めてもはじまらないし、私自身、セクトに対し不愉快な思いをすることもないわけではないが、「やることをキチ」とやっていければいい」(在原ベ平連)ということをしああたりは進んでいく以外にないだろう。ベ平連運動も含め、全世界的にみて「変革」を求める運動と理論は現在「過渡的」なものであり、そう簡単には解決しないと、私は考えている。不幸といえはこれほど不幸なことはないが、これが現在私たちのおかれている状況、大げさにいえば「世界史的不幸」なので、短期(短気?)に解決を目指せば、それだけ「労

多くして功少ない」こととなる以外はない。ただ東京でも福岡でもそうなったが、超党派行動の「呼びかけ人」として「新左翼集団」のまとめ役をすることに今後はあまりエネルギーを使いたくないと思う。六月行動の原則、目的の一致と手段についての相互確認、相互の説教はしない。ということで、今後ともすすんでいきたいものだ。

しかし、「大学ベ平連」の場合は学園闘争との関連もあるし、「各大学ベ平連の大勢が一人や二人の個性ある活動家のみによって持ちこたえていたり、何度も消滅したりまたできたりしている状態にある」(中大ベ平連)という指摘もあるのだから、今までの学生運動になかった、かわった新しい運動を作り出すとともに、このへんでしつかりとした運動論をもつことが必要だと思うので、この点の努力を学生諸君に期待したいと思う。

最後に「運動」ということについて前田俊彦さんの発言を紹介して、ベ平連運動全体にわたる問題点については不十分ながら終りとしたい。

「闘争」というのは勝つのが目的だが、人々の共鳴をもとめ、連帯の行動をもとめるのが運動だ。闘争は原理・イデオロギーが中心になるが、イデオロギーなしに運動はありうる。闘争は運動なしにはほろびる」前田さん自身、時間の制約もあって、「誤解をまねくかもしれない」という発言であつたので、いざれこの点を

詳しく述べ、「週刊アンボ」誌上で展開してほしいと願っている。

さて具体的な行動の提案に入るのだけにはいかない。それについて可能な範囲で意義づけをしていきたいと思う。

■非暴力直接行動について

「週刊アンボ」六号に、「一・二・非暴力直接行動の報告を寄せている吉崎秀一さん、ハノイ爆撃に抗議する大使館前坐りこみ（六六年六月）以来非暴力反戦行動をつづけている金井佳子さんから、それぞ一〇人委員会を作ろうというよびかけがあった。一〇人単位の小グループを無数に作り、このグループの連合によって四月～五月には千人規模、六月には数万の規模での「反安保」の坐り込みを行なおうというのである。へ平連運動が国家権力が恣意的に定めた「合法性」の枠のなかにとどまることのできないことは明らかだが、同時に「合法性」の枠を最大限に押しひろげる努力を怠り、権力の違法な行使を徹底的に追及することなしに「実力闘争」にとびこむこともまちがいだろう。非暴力直接行動は原理的に「合法」対「非合法」、「非暴力」対「暴力」というむずかしい問題を含んでいるが、十・十一月闘争が全体としてたしかに「ゲバ棒」「火炎瓶」による実力闘争では打ち破れない壁に突きあたったということ

を考えるとき、へ平連運動の方向の一つとして今後重要な意味をもつであろう。

■自衛隊闘争について

ともにこの会議で多くの人によってとりあげられた。「日米帝国主義軍隊を解体に導き、安保条約の根元を掘りくずす」（イントレピッド四人の会）という点の強調もあったが、この運動をすすめていくには「自衛隊員も人間であるという視点をもち」「どこにでも居り、事務所はどこにでもある」（少なくとも各県には連絡事務所がある）したがって「どこでもできる、誰でもできる運動だ」（小田実）ということが大切だ。小西三曹の問題を契機として「第二・第三の小西を行動委員会」が各地に生まれ、新潟ではとくに自衛隊員に対するビラ入れが活発におこなわれ、六人が道交法違反で逮捕されるという弾圧も起つており、（その夜釈放された）自衛隊員に対する働きかけは米軍兵士とはちがつて、自衛隊法にヒッかけられる危険もあるが、ある場合には逮捕をおそれず裁判で争うことも必要だろう（吉川勇一）二月中には自衛隊員の手によって「週刊アンボ」六号にも詳しく述べられる「新潟」が出て予定、「そのためにも自衛隊員と仲良くなつて隊内の不満が出てはほしい」（大泉市民の会（東京都練馬区大泉学園町二八三）に連絡し、「とくに関西以遠の米軍基地に対して行動をひろげてほしい」（三月二十一・二十二の兩日、横須賀で米軍基地関係の全国連絡会議を開く）「四月に、米軍解体」とい

い」「二月十一日に自衛隊基地に対する一斉行動を起そう」等数多くの具体的提案がなされた。七〇年代におけるへ平連運動の大きな柱としてこの運動にとりくみた。

■米軍反戦兵士支援運動

「脱走兵通信」に毎号報道されているよう、脱走してJATECとともに

たたかう米兵、JATECと連絡を保つつ反戦活動をつづける米軍兵士の数は増大する一方である。場所・人・資金あらゆる面でJATEC活動に援助してほしい。JATECの活動は、脱走兵の援助を含めて、反戦米軍兵士の方向に大きく活動目標をかえている（「WE・GO

FOR・PEACE」をどんどん米兵にもちこんで欲しい）大泉・岸根で行なわれている反戦放送を全国の米軍基地にひろげてほしい」（大泉市民の会（東京都練馬区大泉学園町二八三）に連絡し、「とくに関西以遠の米軍基地に対して行動をひろげてほしい」（三月二十一・二十二の兩日、横須賀で米軍基地関係の全国連絡会議を開く）

昨年、廃案になつた出入国管理法がふたたび国会に上程される見込みが大きい。入管体制打破のたたかいとあわせて法案の成立を阻止する運動をすすめなければならぬ。この点では「外国人の救援」について考える必要があることが華僑青年闘争委員会からも強調された。

■入管闘争

「週刊アンボ」六号にも詳しく述べられており、「新潟」が出て予定など報道も具体的に示されているが、強制測量をひかえて、支援カンパ・救援物資とあわせて、もう一度、なぜ空港に反対するのかという点で真相をひろめてほしい。土地収容委員に対する抗議をしてほしい。（千葉・平連）

■ベトナム留学生の問題

四月には「強制退去」をせまられる三人の留学生を守る運動を全国におこそう。すでに北海道では留学生をまねいて運動をひろげているが、あらゆる機会、あらゆるつながり（とくに三君はそれぞれ工学関係の専攻である）を考えて話し合う会を開こう。つぎにのべる入管闘争との関連で、政治「命権を確立する運動をおこそう。この点で「破鎖を求める人々」（一〇〇円）を利用しよう。

■沖縄問題

この点では、全軍労支援の運動を進めることができることが強調された。

■三里塚空港建設反対闘争

「週刊アンボ」六号にも詳しく述べられており、「新潟」が出て予定など報道も具体的に示されているが、強制測量をひかえて、支援カンパ・救援物資とあわせて、もう一度、なぜ空港に反対するのかという点で真相をひろめてほしい。土地収容委員に対する抗議をしてほしい。（千葉・平連）

虫・虫・虫

特集 1

2

つは悪いヤツだというところを訴えてゆきたい。卒業してもやるんだという人を組織化してゆきたい。

虫、虫、虫われら虫
は語る

1月31日、2月1日新宿

区体育馆で行なわれたべ
平連全国懇談会には、一
年間の運動の経験と今後
の展望について無数の声
がきかれた。二日間の討
議を三行でまとめる

たが、無関心な市民が多くて思
うままにゆかない。

☆盛岡べ平連

どうやって市民の中から参加
者を得てゆくかが、最大の課題
である。

☆八戸べ平連

70年1月結成。

☆いわきべ平連

最近発足したばかりだが、二
名のデモを毎回続いている。

☆群馬べ平連

「橋の下大学」にならって
「駿前大学」を組織中。半分ぐ
らいが会社員なのでなかなかデ
モができない。新聞にビラを入
れようとしている。

☆札幌べ平連

高校生が秋期決戦より増え、
自称アナリストという人も、
増えている。ペトナム人留学生
との懇談会を持つ予定。

☆旭川べ平連

北海道は自衛隊が多いので、
それに対する闘争を多くした
い。中学生、高校生、予備校生
など学生が多くなっている。

☆十和田、青森べ平連

船田中の選挙地盤なので、あい
10・26に三沢基地闘争があつ

たが、無関心な市民が多くて思
うままにゆかない。

訴えてゆきたい。卒業してもや
るんだという人を組織化してゆ
きたい。

☆東葛べ平連

行動の主体的な位置づけをし
たい。「東京から地方へ」では
なく地方から東京へ攻めのぼる
う。人数が少ないからといっ
て、ためらわず、市民へ積極的
にアピールしてゆきたい。

☆神奈川大学べ平連

岸根米軍基地へ定例デモをか
けたい。裁判所べ平連を三人で
結成した。裁判官と話をして、
「人民裁判所」を夢みている。

☆横須賀、逗子べ平連

参加者圧倒的に多い。中学生
も多い。九月にはブラックパン
サーを招いて集会をした。若い
人が多い。デモ中心。

☆全国闘う中学生連帯

東京と埼玉の定例デモに参
加、ビラまき活動、全国の中学
生との交流活動。「全中共闘」
全国中学生共闘会議」と共闘し
ようとしている。

☆新潟べ平連、新大べ平連

大体は「第二・第三の小西を！」
「新潟行動委と共に活動して
いる。

☆横浜商大べ平連

柄木は反動的な地域である。
行動も必要である。

☆金沢べ平連

10月には高校生だけのデモが
行なわれた。沖縄全軍労ストの
支援活動をする。学生よりも市
民の方が多い。11月決戦には、
平連が最前線に出ざるをえな
くなった。

☆高崎経大べ平連

平連の名前をもう一度甦ら
せる。

☆埼玉べ平連

参加者圧倒的に多い。中学生
も多い。九月にはブラックパン
サーを招いて集会をした。若い
人が多い。デモ中心。

☆中野べ平連

平均年齢が若い。もっといろ
いろな活動の型で枠を破りた
い。「中野反戦行動」と改名す
るかもしれない。

☆新宿べ平連

フォーラー集会、出入国管理令
反対ハンスト闘争、佐藤訪米に
ついてのアピールに重点。沖縄
全軍労スト支援活動。毎週土曜
に学習会。デモ前日徹底的なビ
ラまき、アピール。

☆フオーラ・ゲリラ

機動隊に慣れ切ってはならない
い。基本的権利が抑圧されてい
る時には、ひとつひとつ抗議し
てゆかねばならない。われわれ
を得ないという確信が裁判闘争

九百人在学中にたつた4人の
仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

☆川崎べ平連

米軍基地へ反戦放送を。高校
内に部落問題研を組織。多元的
方向性の中で行動の連帯を。

☆茅ヶ崎べ平連

市民との断層がある。学生、
教師が多い。公共施設を使わせ
てもらえない。

☆高崎経大べ平連

10月には高校生だけのデモが
行なわれた。沖縄全軍労ストの
支援活動をする。学生よりも市
民の方が多い。11月決戦には、
平連が最前線に出ざるをえな
くなった。

☆金沢べ平連

10月には高校生だけのデモが
行なわれた。沖縄全軍労ストの
支援活動をする。学生よりも市
民の方が多い。11月決戦には、
平連が最前線に出ざるをえな
くなった。

☆中野べ平連

平均年齢が若い。もっといろ
いろな活動の型で枠を破りた
い。「中野反戦行動」と改名す
るかもしれない。

☆新宿べ平連

フォーラー集会、出入国管理令
反対ハンスト闘争、佐藤訪米に
ついてのアピールに重点。沖縄
全軍労スト支援活動。毎週土曜
に学習会。デモ前日徹底的なビ
ラまき、アピール。

☆フオーラ・ゲリラ

機動隊に慣れ切ってはならない
い。基本的権利が抑圧されてい
る時には、ひとつひとつ抗議し
てゆかねばならない。われわれ
を得ないという確信が裁判闘争

の闘争は、自衛隊を解体させる
ことが目的であり、裁判闘争で
違憲判決をかちとることだけが
目的ではない。全国どこでもが
現地だ。だれでもがオルグにな
れる。直接行動とともに、間接
行動も必要である。

☆横浜商大べ平連

仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

☆金沢べ平連

仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

☆高崎経大べ平連

仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

☆中野べ平連

仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

☆新宿べ平連

仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

☆フオーラ・ゲリラ

仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

☆横浜商大べ平連

仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

☆金沢べ平連

仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

☆高崎経大べ平連

仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

☆中野べ平連

仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

☆新宿べ平連

仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

☆横浜商大べ平連

仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

☆高崎経大べ平連

仲間で、かつ学内に反戦平和運
動の雰囲気がない。

自立した市民の運動はつづく

「インタビュー」

1 金べが種まきや私服が

金沢 ■ 新村 育夫 (21) 学生

——ベ平連運動を始めた動機は?

N 戦争に反対だから。今でもそれに徹しています。

——ソンミ村の写真見た?

N ええ。ボール爆弾やジェノサイドの写真見てたから、とくにショックは受けなかっただけ。

——私はやっぱりショックだったな。

N ぼくは虐殺をやったG.I.がすごく悔しているのを見ると、同情しちゃう。

むしろ、知ったかぶりをして、戦争だから、これくらい当たり前だという奴に腹が立ちます。

——お父さんは戦争に行つたの?

N 親父は、戦争の話をガキの頃ケン玉して遊んだなんていうのと同じ『昔話』

としてよく聞かせてくれました。堀をのぼって逃げていく中国兵を後から射つとまるで射的を射つてみたにバラバラ落ちてきたなんて、タタミの上でマネしてくれたり。

——何年生まれ?

N 昭和二十三年。

——戦争を知らない世代の反戦意識はあってならない、という人もいるけど。

N ジャ、ぼくに戦争に行って、人殺しをしてこいというんですか?

——万一、あなたが徴兵されたら、どうする?

N 徹底的に拒否します。脱走してでも亡命してでも。

前後、大学生と同じ年代の人が多いにもかかわらず(?)学生は5~6人しかいない。ベ平連運動の中では学生も勤め人も関係なくやっている。学生が少ないといふ事の弊害もないではない。内部批判をもつとやろうということでウチワの問題をのりこえて行きたい。また、ベ平連のムードで一般に公表していない。外からの連絡はもっぱら私書箱を使っている。バス・トイレ付2DK。常時誰かが住みついていて24時間営業もたまにはしている。毎週グループの会議などが行われ、週に一回は総勢で非常に生産的(?)なディスカッションを行ない運動方針を決めていく。

金べにあるグループでなんといつてもしつつあるということだが、ベ平連だけで常に三桁の人間をあつめてデモをしたいなあという欲望もしきり。東京で一万人の人が集まるのなら金沢では三百人のデモができるば同じ率、それが第一段階の目標もある。

事務所は昨年12月にできたが、アジト的ムードで一般に公表していない。外からの連絡はもっぱら私書箱を使っている。バス・トイレ付2DK。常時誰かが住みついていて24時間営業もたまにはしている。毎週グループの会議などが行われ、週に一回は総勢で非常に生産的(?)なディスカッションを行ない運動方針を決めていく。

金べにあるグループでなんといつてもしつつあるということだが、ベ平連だけで常に三桁の人間をあつめてデモをしたいなあという欲望もしきり。東京で一万人の人が集まるのなら金沢では三百人のデモができるば同じ率、それが第一段階の目標もある。

特集1

3



旅がラス型（金場スナック）
雪の降らない間中央公園（金沢のまん中にあってデモはここから出発する）でや
フォートクもある。フォートク・モグテは

グループB・Pというのもある。これはBlack Pantherの略ではなくて、By Photographyの略。要するに写真屋、私服の写真も撮るが、やたら芸術家ぶつているという噂もチラホラ。先日ゴーダールの「中国女」を自主上映してガッポリかせいだ。

また、反戦マッチキヤンペーンを主体的に担い手製のマッチで市民にアピールしている。（このマッチ売りの少女（？））作戦は今後も期待できる。箱の中にピラでも入れよう。このグルーピーの旗はカッコイイやつで、紫と黄色の布を一枚重ねて、白ユリのアップリケなんかしてあって、おまけに三角旗なのだ。しかもピラピラなんかがついている。

噂は全くないが、女性解放と人間解放のため闘っている。毎週読書会などをやっているが、最近は男性の非暴力直接介入をうけている。フレーセックスや性教育のことをはじめに討論することもある。

つていたが、冬場はもっぱら事務所で歌っているので、いつも事務所はギターの音でいっぱいである。街頭カンパの時はカンパしている横で鳴らしている。昨年歌集を作ったが、その名前が「フォーケ・モグラ大全」40ページで60曲以上のつている。ファンレターも来るし、テープの注文もある。彼らの印刷工としての技術は金内でも高く評価されている。

ホッとした。これでいい。」しかし、これでいいのか諸君! と言いたくなる。金沢べ平連もこれからやらないちゃやの弾圧(?)もひとりひとりの問題として、無見でできない事となっているし……

70年1月から定期例デモをやっている。
每月第2日曜。北陸の反戦市民よ結集せよ！（午後3時中央公園）第3日曜は週刊アンポ学習会。すべての連絡先は金沢南局私書箱25号。反戦自衛隊員連絡せよ。

2 ひとりでやろうべ平連／

関(岐阜県) 高倉健一(21) 自由労働者

しもうた。

——どんな仕事をしているの？

T 高校でから五つめの仕事や。自由労働者いうけど、日雇いやで。市役所のゴミ寄せ人夫やったこともありますけん。親戚のもんがあんまり恥かしがりよるんでやめました。

T 農家ですけん。ぼくが本ばかり読ん
どって、ちょっとおかしなことばかりい
うとるんもんで、親父といいあいになつ
て、出してしまったんやけど。

—ひとりで、どんな活動やつてるの?
T 星の出とらん夜に、三百枚ビラ貼つ
て歩いたりしとるけん。

週刊アンポのすべての読者の皆さまに
関べ平連より堅い連帯の挨拶をしたいと



モニ加わらない。そんな人がデモに加わらないから人間の渦巻ができない。中央での何万何千というデモを聞く時、アセリと消耗感(ピラまき)をしても反応がないのが先立ち、ややもすればもうやめたいという空気が流れる。高校生も卒業し中央へ出て、残る大学生は益々孤立感を増す。一人になつてもやるぞ。中央では人が集まり地方では沈滞する。これでは人間の渦はできない。各市町村にべ平連をつく農村地帯という地域性を生かし、戸村一作氏の「三里塚にベトナムを!」といふ農村、零細農民切りすての農業政策が何を目指し、何によって引き起されたのかという問題を農民と話し合おう。

自衛隊、米軍へ対する反戦活動も大切だ。しかし身近にそういう目標がない地域の諸君! 自衛隊より人数の多い農村へ「全農村にベトナムを!」
全国懇談会に一言文句(提言)。会場時間制限の関係で時間が短かすぎた。話し足りなかつた。各地の報告に時間がかかる

かりすぎて、実質的な話し合いの時間がなくなってしまう。皆は討論を望んで、はるばる一日も汽車にゆられて集まつてくるというのに。ただ何日のデモに何人集まつたということより、今こんな問題をかかえているとか、そんな問題をこういう風に解決したという実際的な話がしたい。たとえば、学生主体のべ平連はどんなにして労働者、市民を連帯していくのか。ピラまき事務所、資金の問題など基本的なことが地方では問題である。それを担う人は少なく、活動も限られてしまうというこの現実をわかつてほしい。

全国懇談会の運営について提案をした。まず各地のべ平連活動報告はまとめたレジメにして一括して会の前に提出しておく。それを議長団がまとめればいいだろう。僕は一日目の会の後、地方のべ平連で行きづまつてある所へ呼びかけて喫茶店でオールナイトで話し合う機会をもつた。これが鹿児島べ平連に、そしてぼくにとって一番有意義だったと思つてゐる。山谷べ平連のオッサン(失礼!)の体験談を通してのアドバイスは実に参考になつた。来年は一日目の夜は課題別に分会を開きオールナイトで話し合おう。僕らの唯一の武器は「若さ」なのだが

そうすれば二日目の会はもっと深く具体的になるのでは。もう一つ提案、べ平連に対する弾圧がひどくなる現状(基本的権利行使も弾圧される)を見るに、

かりすぎて、実質的な話し合いの時間がなくなってしまう。

皆は討論を望んで、はるばる一日も汽

車にゆられて集まつてくるというのに。

ただ何日のデモに何人集まつたとい

うことより、今こんな問題をかかえていると

か、そんな問題をこういう風に解決した

という実際的な話がしたい。たとえば、

学生主体のべ平連はどんなにして労働者、市民を連帯していくのか。ピラまき事務所、資金の問題など基本的なことが地方では問題である。それを担う人は少なく、活動も限られてしまうというこの現実をわかつてほしい。

全国懇談会の運営について提案をした

。まず各地のべ平連活動報告はまとめたレジメにして一括して会の前に提出しておく。それを議長団がまとめればいいだろう。僕は一日目の会の後、地方のべ

平連で行きづまつてある所へ呼びかけて

喫茶店でオールナイトで話し合う機会をもつた。これが鹿児島べ平連に、そしてぼくにとって一番有意義だったと思つてゐる。山谷べ平連のオッサン(失礼!)の体験談を通してのアドバイスは実に参考になつた。来年は一日目の夜は課題別に分会を開きオールナイトで話し合おう。僕らの唯一の武器は「若さ」なのだが

そうすれば二日目の会はもっと深く具体的になるのでは。もう一つ提案、べ平連に対する弾圧がひどくなる現状(基

々の法的態度も大切になる。すなわち救

対である。各べ平連が各自作ればいいが、地方ではなかなかそうはいかない。

それで九州なら九州とブロックごとにで

も救対を作り、法的知識も勉強していか

ねばならないだろう。思いつままで

6 梅田の行動はいけ図々し

大阪・植野芳雄(22)会社員

——どんな動機でべ平連を作ったの?

U 北爆が始まったころ、新聞記事を見

てたら、素朴にベトナムのひとびとがか

わいそうだなあ、何か自分たちにできる

ことはないだろうか、思つて、友だちと

四、五人でデモをしました。それがまあ

べ平連になつたわけです。

——大学では何を専攻したの?

U 美学です。猿楽、田楽なんか好きにな

んで。今の大衆芸能と対比したいと思つて。

——大阪生まれの大坂育ち?

U ええ。

——大阪と東京と、べ平連気質はどう違う?

U 大阪の方が楽観的なんと違うかな。

——「私たち定例行動を持ちません。常に状勢に敏感に行動していくのです。言つてみれば毎日が・行動日、……」

関西べ平連の運動を報告する時は、い

つも以上のような、不遜な言葉で始め

るのがシキタリで、その通り、ほぼ毎日

私たち、梅田地下街を中心にギョウザで培われたバイタリティーと、高麗酒を

景気のいいことばかり書いて來たが、鹿

児島べ平連の現状は救対が必要になるほ

どの現状ではない。これが喜こばしいことなのか、なげかわしいことなのか?

複雑な気持をもつ小さな鹿児島べ平連で

ある。

疎外の構造

羽仁五郎

討論

'70年安保を前にして鋭く自らを問う前衛たちの告発!!

登場人物

小田 実／吉川勇一／小長井良浩
 山根一郎／松本健男／瀬戸内晴美
 竹中 労／正木ひろし／和田英夫



【録音内容】

- LPソノシート両面盤8枚
- ◎新しい市民運動像
- ◎戦後民主主義の亀裂
- ◎日本の裁判
- ◎状況からの脱皮
- 【本文記事】本文24ページ
- ◎激動の中の知性-羽仁五郎
針生一郎著
- ◎用語解説

好評発売中！ 価850円

株式会社 朝日ソノラマ
 104 東京都中央区銀座4-2-6
 (563)6021-9 振替東京40311

「ゲイツと飲みほし、「意味を問え」とアジってニヒルに空を仰ぐ輩を笑いとばす「大阪的いけ団々しさ」を武器に、対話集会、街頭芝居、フォーク、宴会流れ型ゼッケンブランデモ、座わりこみ、「関西ベ平連夕刊」発行、そして行動としての集会「梅田大学」等々を、11月以降も「消耗しないのは人間的に欠陥があるのでは……」と首かしげつつも、とにかく続けています。

68年3月のジョンソン声明発表の頃、私たちの「地下街対話集会」は軌道に乗りました。「もうベトナム戦争は終わるやないか」という町の声を相手にそれこそ必死になつて「そうじゃない」ということを言い続けてきました。ゼッケンをつけた私たちのまわりには黒山の人ばかりがで、その中で孤軍奮闘し、時には仲間を見つけ、時にはコテンパンに私たちの「反戦論理」を粉碎され、それでも、やっと梅田地下街の行動が定着した頃からそ

こは一種の「委任するのではなく、政治に直接参加する場として、また、行動を確認し合う場」としての機能を持ち始めました。あちこちに、思い思いの趣向を凝らした壁新聞や、「これがソニミの実態だ」と銘打った写真パネルなどが所狭いと設置され、あそこは「梅田大学ベトナム学部」などと勝手に決めこんだり、榮ちゃんの「ベ平連は交通戦争の方に力を入れろ」という言葉を忠実に守つて、地下街の人の流れを、いわば交通整理することまで引き受けています。ちなみに地下街の人の流れを、いわば交通整理することまで引き受けています。ちなみに今だからこそ地下街の交通事故死はゼロであることを報告。……

また、最近では、私たちの梅田大学キャンバスに機動隊が土足で侵入してくるのも度々のこと、座わりこんでいる私たちをごぼう抜きし、蹴つとばし、意地悪くもゼッケンを破り棄て、メガネを略奪し、といったハレンチぶりを發揮しています。「ハエのような私たち」は、追

われれば、一糸乱れぬ、ではなくて、てんでんバラバラにバラバラ歩き出し、スカあらば、また坐り、追われれば、また歩き、全員検挙も承知の上で決して逃げました。あちこちに、思い思いの趣向を凝らした壁新聞や、「これがソニミの実態だ」と銘打った写真パネルなどが所狭い、商店の中に逃げこまない、とにかく一発のハプニングによって地下街の行動を敗北に導かぬよう、「禁欲」して、執ように非暴力抵抗をくり返し、敵の弱い点を見つけたら、そこに敏しうなノミの如くとびつく、そういういたものを、別段、鉄の規律があるわけじゃないし、時には千人を越す人が集まるのに、みんなが「身につけてしまっている」のです。

「ハエとノミ」に徹することができるのには、常に「何を獲得するのか」という明確な戦闘課題を全員で共有することによって、行動への共同作業による参加と集団性を、日常的、地道に行動する中で追求してきたからだと考えています。

しかし、いざにせよ、この地下街の対話を中心とする行動は、私たち、「反戦・反安保」のムードの中に安住しがちで、「ありのままの現実」から一步離れた所で、一種のエリート意識と共に「現実を語りたがる」私たちに、それこそ新しいシヨックを与えてくれます。ただ単に「反戦・反安保」を声高に論じるのではなく、その具体的な事実としての中味を提示しないかぎり、「通りがかりの人」は耳を傾けてもらえないのです。「敵についての客観的把握もばかし」ていたのでは、それこそ「百戦」どころか「戦」たりとも「危うくて」と思うのです。このような私たちの弱さを克服するためには、具体的な私たちで、アンボ大学、反戦ゼミ、等が行なわれています。

言つてみれば、地下街は、私たちに対して、常に覚醒を迫り、足許を確かめつつ次の行動へと導いていく、「関西ベ平連の水先案内人」みたいなものもあるのではないか、と考えたりします。

70年

停滞の季節 をぬけ出る ために

特集2

社会党内部の混乱と労働組合の右傾化など、70年安保自動延長をまえにして戦線は大きく揺れ、ひとり沖縄全軍労のみ孤立した闘いを進めているいま、われわれは何をなすべきか

特集2 1

最初に、沖縄の現状について。

仲吉 ■ それはつまり、佐藤・ニクソン会談以後の沖縄ということですね。われわれは、ずっと沖縄返還を要求して闘つてきたわけだが、佐藤・ニクソンによつてまったくわれわれが要求していなかつた方向の返還が実現されようとしている。

それが核安保であり、アジア安保である

ということを指摘して、われわれは十一

月十三日に、ストライキを打つたわけで

す。佐藤・ニクソン会談で、われわれの

指摘した通りの日米共同声明が出され、

それが、具体的には全軍労の首切りにな

つて現われてきた。全軍労の首切りは決

して全軍労だけの問題ではなく、沖縄の

個々の問題が全軍労の首切りと同じよう

な形で処理されていくだろう。ですから全軍労の闘いは、確かに経済的な要素を

たくさん持つた、そこに根っこをおろした闘いなんですが、普通の賃上げ闘争と違つて非常に政治的な、反安保の側面を持つた闘いだと考へているわけです。

それから、基地撤去あるいは基地反対を叫びながら首切りに反対するのはおか

しいではないか、とよく言われますが、

われわれは、そうは思っていません。労

働力はもちろんのこと、土地、水、電気、

燃料、金融という、いわゆる産業に関係

するすべてのものが、米軍に握られてい

る。たとえば、自分たちの島の水を、軍

から買って飲んでいるわけです。それを

われわれの手に返せという要求、つまり

闘いである、と言えるわけです。

われわれの生活と、反戦平和の闘いが結びついて基地撤去の闘いが発展した。ところが、今、労働力だけを首切りという形で放り出してきた。基地機能は前のままで、つまり土地、電気、水その他は軍が握ったままで放り出されたら、われわれは、いったいどうやって生きていけば良いのか、という一つの問題がある。

もう一つの問題は、今、米軍のやろうとしていることが、基地機能を低下させ、

すに合理化、つまり安上がりの基地にす

ることであること。これを、われわれが

認めるとは、基地の存在を許すことにはなる。この点からもう全軍労の闘いが生

活を守る闘いであると同時に、反安保の

全軍労闘争をつつんで 全県規模のゼネストへ インタビュー●沖縄県労協議長仲吉良新氏に

——実際には全軍労のストの効果は、どの程度なのか。

仲吉■第一波では準備不足もあって百パーセントとは言えなかつたが、第二波ではほとんどの基地がマヒした。特に第二兵站部隊はもの一つ動かせなかつた。それから、コンピューターが全部マヒした。

そこまで追い込まれたために、四百人の首切り撤回が出てきたものと思う。第一波、第二波では全軍労中心だったが、第三波では県労協全体がストでも打てるような体制を作りたい。同時に、労働者がストさえ打てばいい、というのではなく、県民がストを支持しそれを行動にかえていく闘いとして、考えてきた。これが成功すれば、第三波はかつてない基地に対する直接行動ができるだろう。それを打ち抜けば、県民全体と米軍との総対決にまで高めることができる。

——二・四ゼネストが挫折してから、一年後の今、そのような闘いが組めるのかという懸念がありますが。

仲吉■まず、今度の十一月闘争を闘う中で、ほとんどの部分が挫折から立ち直つたと思う。そして残された部分も、全軍労と共に闘っていく中で、やはり闘えるあるいは闘わなければいけない、という気持が新しくよみがえってきた。それから、全軍労の闘いは二・四、十一月闘争と違つて団体交渉という具体的な目標がある。もちろん、本質的には同じ闘争だが、それを基礎にして、さらに鋭い政治

——戦後史で言えば昭和二十二年の二・一ゼネスト失敗以後、労働運動は後退しが、二・四がそのミニチュアとなるようことはないか。

仲吉■それはありません。たとえば、第二波の四日目に、全軍労の上原委員長は中央闘争委員会に問題提起をした。それ

は、後の米軍との交渉をやりやすくするためには、四日で打ち切った方が良いかかもしれない、ということだった。このように組合の幹部に、心配なことがあるにしても中央闘争委員会なりで議論をした末に方針を決める、という姿勢がある。さらに下に降ろして、大衆討議をやって方針を確認するなり、変更するなりする。

この姿勢が維持されている限り、沖縄の労働運動は腐敗しない。第一、よどんでもいる暇がないでしょう、次から次に――

B52、原潜、毒ガスなど――敵からの攻勢があつて、それを一つ一つはね返しながら、闘いを続けているわけですから。

五日間、雨や風の中でピケをはり続けた組合の力を信じます。むしろ、われわれが幹部の地位に安住しようと思っても、沖縄の労働者は絶対にそれを許しません。

——今度、上原委員長と共に東京へ来られたわけだが、労働組合との連帯にしても、具体的にどう考えていたか、また、1日には総評幹部やいわゆる文化人と数寄屋橋でカントンに立たれたわけだが

的な闘いがある。

仲吉■四・二八の海上集会にしてもはたして有効な闘いかどうか、去年あたりからいぶん論議をしています。しかし、われわれの立場としては、まず労働組合に強くなつて欲しい。もちろん組合を強くするには、個々の闘っている労働者です。その闘っている部分が組合のワクを乗り越えて結集することも、非常に結構だと思う。だが、まず属している組合をせめてストライキの打てる組合にして欲しい。それが沖縄との連帯だと思う。

全駐労が全軍労とともにストライキを打たなかつた、私はそれをけしからんとは思いません。全駐労は少なくとも全軍労以前に、解雇問題その他に関してずい分ストライキを打つていて。つまり、單に全軍労といっしょにストライキを打つよりも、労働条件を高めるためのストライキを打つてほしい。たとえば解雇に三ヶ月間の予告期間を設けることは、全駐労がすでにかちとつていて。それが全軍労の力となつていて。逆に沖縄の方が進んでいる部分もある。その部分は本土の労働者がそれをテコにして高めていく、それぞれの立場で闘いを強化する以外に前進はないと思います。

——第一波、第二波を通じて総評は力にならなかつたのではないか。

仲吉■それはそうだが、県労協だって第一波では力を出せなかつた。第二波でもストライキを打てたのはマスコミだけだ



つた。事態に対応しきれなかつた。別に総評を擁護するわけではないが、ましてや本土で全軍労の闘いを自分たちと結びつけて、大衆的に取り組むだけの余裕はなかつたと思う。だからと言って、総評がいらないというわけではない。総評だけではない、第二波のピケ支援では同盟の下部組織の労働者も、いっしょになつて闘つてくれた。非常にうれしかつたの

です。労働組合の下部でほんとにすべてをかけて闘つている青年労働者の力を、か、そのためには労働組合とは、どうあるべきか、といったことを追究していくべきではないかと思う。

——コザなど、Aサイン業者をはじめとする人たちとの衝突が伝えられたが、実際はどうなつか。

仲吉 ■ 第二波のときは事実上、対立してしまつた。そうなつてはいけないと思うが、われわれ自身が全軍労の問題などについて、その人たちと話し合う機会がなかつた。また、誤解もあつたし、われわれの努力も足らなかつた。だけど、今は、全軍労が闘つているのは、米軍に依存して生活している業者のみなさんの、将来にバーやキャバレーをつくつていて。それを見通して、全軍労とともに闘う以外、基地業者の人たちの将来も考えられないのではないか、と思う。だから、十分に話し合えば、暴力でピケを破るといつたことはなくなるでしよう。

——もう一つ、石油のコンビナートのことで問題が起こっていますが。

仲吉 ■ まだ県労協の結論は出していないけれども、まず、石油に限らずあらゆる企業誘致に反対するということは、あり得ない。労働者には働く場が必要であるし、そこで収奪されるのならば労働組合を許さない闘いを築きあげるしかない。だから、単に独占企業だから反対する、というわけにはいかない。しかし、公害問題については徹底的に追及しなければいけない。東洋石油の問題を考えてみると、一つは公害、一つは石油独占ということが問題になつていて。石油独占については、さらに石油だからダメなのか、

仲吉 ■ 第二波のときは事実上、対立してしまつた。そうなつてはいけないと思うが、われわれ自身が全軍労の問題などについて、その人たちと話し合う機会がなかつた。また、誤解もあつたし、われわれの努力も足らなかつた。だけど、今は、全軍労が闘つているのは、米軍に依存して生活している業者のみなさんの、将来にバーやキャバレーをつくつていて。それを見通して、全軍労とともに闘う以外、基地業者の人たちの将来も考えられないのではないか、と思う。だから、十分に話し合えば、暴力でピケを破るといつたことはなくなるでしよう。

——もう一つ、石油のコンビナートのことで問題が起こっていますが。

仲吉 ■ まだ県労協の結論は出していないけれども、まず、石油に限らずあらゆる企業誘致に反対するということは、あり得ない。労働者には働く場が必要であるし、そこで収奪されるのならば労働組合を許さない闘いを築きあげるしかない。だから、単に独占企業だから反対する、というわけにはいかない。しかし、公害問題については徹底的に追及しなければいけない。東洋石油の問題を考えてみると、一つは公害、一つは石油独占ということが問題になつていて。石油独占については、さらに石油だからダメなのか、

——最後に、学生や反戦派労働者についてお聞きしたい。

仲吉 ■ 十一月闘争のときは、学生の行動がきっかけで機動隊が組合員にもおそいかかり、相当のケガ人を出したこともあり問題が残つたが——編集部注「週刊アソボ」第三号参照——全軍労のピケ支援では、いっしょによく闘つたと思う。もちろん、学生や青年労働者は、先頭に立つて闘つてほしい。しかし、いっしょに闘つている労働者が躊躇する、あるいはもう命がけだ、もうやめとこう、という人がたくさんでてくるようでは困ると思う。時期はまだ言えないが、全軍労第三次ストライキには、沖縄全県規模のゼネストを組んでゆくつもりです。本土からの支援態勢をより強くより広くしていってほしいのです。

■ 全軍労の闘争にカンパを！ 沖縄は

依然としてドル経済なので、個人でカンパを送るのに戸惑つておられる方は左記にお送りください。一括して全軍労と、沖縄県労協に送ります。すでに二月初旬三万四九八四円を送りました。

連絡先

東京都新宿区西大久保二一
二〇六 古屋能子 究

社会党再生の道への前提

三田岳

特集 2

2

総選挙の敗北を契機にして崩壊の危機に直面している社会党。政界再編成が

叫ばれ、右傾化がささやかれている
き、真に鬨いの中心となるためには
いまなにをなすべきか。

“不思議”な“戦闘性”

中国的毛沢東主席が、日本社会党は不思議な党だと言ったというのだが、党内の活動家たちの誇りとされてきた。毛沢東主席が“不思議な社会党”と云つた意味は、恐らく六〇年安保闘争のころの社会の動きを高く評価したことだろうと思われる。たしかに、六〇年安保闘争では、社会党は、総評の下部の労働者大衆と全学連の“戦闘性”的ななかで、そのもてる力をふりしぼって闘っているのである。この党的議会主義的体質を最も強く保持していた最右翼の部分は、安保闘争での大衆の直接的行動を否定し、大衆行動優先の主流派と対決することになった。

本共産党と全く対照的であった。社会党の“不思議な党”たらしめ“戦闘性”は、六〇年の安保闘争をクに、五〇年代はその上昇過程と一樣に、六〇年代はその下降過程とができる。五一年、日米安全保障条約を講和、安保条約をめぐって左右に分裂した。五五年の左右統一を経過しつつ、社会党は総評に支えられた左派の主張によって、五一年の第七回党大会でされた平和四原則（再軍備反対、全和、軍事基地反対、中立堅持）のス

六〇年六月一五日、樺美智子さんが虐殺されたとき、狂犬のように襲いかかる機動隊に直接抗議し、放水車の水にびしぬれになって国会南通用門近くの構内に倒れた学生の救出に当ったのは、江田三郎現書記長をはじめとする約百名の社

カンを掛け、鎌木茂三郎委員長の一青年によふたたび銃をとるな、婦人よ夫を戦場に送るな」というアッピールを押し出しで、総評とともに大衆闘争をひた押しに押しすすめた。五一年の講和、安保条約反対闘争をはじめ、妙義、内灘、砂川などの軍事基地反対闘争、警職法改悪反対闘争、教職員の勤務評定に反対する闘争など、日米支配者の労働者人民に対する攻撃に対し、平和と民主主義、を守るたたかいのなかで、社会党は、その、戦闘性の骨組みをつくっていった。

：は、国会へデモをかけても、国会内の論争に影響を与えることが少なくなつていいった。特徴的なのは、六五年秋の日韓条約批准阻止闘争である。この闘争では六〇年安保と同じく全国から労組活動家、学生が国会へ押しかけたが、自民党の一方的な採決に影響を与えることができない。社会党的国会議員は日韓条約の内容を暴露する時間を与えられず、物理的抵抗でせいいっぱいの抗議の意志を表明するにとどまるのである。そして国会にお

六〇年代の後退

闘争の高揚をもたらさなかつた。ノズ協定の暴露も、かつてのような大衆採決は日常化する。三矢作戦、松前ハ

の過程は、社会党にとっては、大衆闘争と議会闘争との肉離れが強まる過程である。六〇年安保闘争までは国会論議と大衆行動は、打てば響くような密接な関係にあった。ところが、六〇年代の炭鉱労働者に対する「政策転換闘争」、政暴辻

闘争の高揚をもたらさなかった。六九年の沖縄返還、安保自動延長、をとりきめ、日本の七〇年代帝國主義路線の基盤を固めた、佐藤／ニクソン会談に対しては、国会における暴露の闘争はほとんど放棄されてしまい、佐藤自民党政府がつくりあげた総選挙の網にからめ

反対闘争は、國會へデモをかけても、國會内の論



とられて大敗北を喫してしまった。

十一月十七日朝の佐藤訪米阻止闘争は、前々日の社会党員を中心とした九段会館での集会で、現地闘争をやりぬくと確認しておきながら、総評指導部の現地闘争中止の申し入れに膝を屈して、わずか二四時間足らずのあいだに、社会党指導部は、その行動の取り止めを決定したのである。

十一月十七日は、社会党指導部と総評指導部の反対にもかかわらず、冷雨が下

下部活動家、社青同、自治労をはじめとする青年労働者、ペ平連、婦人活動家など約二五〇〇名が無届け集会とデモを敢行し

た。社会党国民運動局長、伊藤茂の名で集会デモが認められたのを、前夜、伊藤茂局長が取り下されたので、この行動は非法となつた。その結果、一七〇名を超える人々が機動隊に逮捕され、また多くは冷雨のそぼる中を押し倒され、足蹴にされ追い散らされたのであった。

このような社会党に対して、労働者大衆は、前回よりも五〇議席減、得票率で六四%減の二・五%、票数で二七五万票減の一〇〇七万票という、敗北と後退の結果を与えたのである。

もし社会党が、労働者大衆の与えた強烈な批判の意味を、その根源にふれてとらえることに怠情であったなら

敗北の過程を、その死まで歩みつづけることになるだろう。

さる二月五日、六日、社会党の拡大中央委員会がひらかれた。大会準備委員長の江田書記長が執行部を代表して提案した中間報告は、上京してきた中央委員の集中的な批判によって採択されることとならず、討論を集約して第二次案をつくることになった。この討論によって、執行部と地方県本部を指導する中央委員は、党再建の討論は行なつたが、その展望をつかむことには失敗しているというのが、いつわらざる評価であろう。

中間報告のなかの「長期低落傾向の歴史的総括」というテーマで「……社会党はどういう党であるか、どういう党であったか、その科学的歴史的総括を行い、実りある党再生論議の基礎資料としてみたい」としてつぎのように「科学的な歴史的総括」を行つのである。「では社会党はどんな党なのか。日本社会党の基本的な性格、構造が形成されたのは一九五〇年代初期だ」という点では今日ほんど異論がないと思う。この党の性格、構造を規定したのは戦後前期の日本社会の特殊な状況であり、敗戦で経済が崩壊し、くえぐり出し得れば、その大胆な勇気をもつて当れば、五〇年代の「戦闘性」を継承し、保存し、新たなる七〇年代闘争

着まで滲み透る早朝、社会党の下部活動家、社青同、自治労をはじめとする青年労働者、ペ平連、婦人活動家など約二五〇〇名が無届け集会とデモを敢行し

に對応して発展させることは、あながち不可能なことではないと思ふ。

■再建案に怒り

主義も支配層の手でふみにじられようとしていた。そうした状況から広汎な国民大衆の間に平和、人権と民主主義、あるいは労働者の生活や労働条件の擁護に対するし烈な要求が生まれ、この自然発生的な要求を実現するためのたたかいが実は客観的にはきわめて反体制的な意義をもち得た。つまり、本来からいえば民主主義的な要求が国民をふるいたたせる新鮮な意味をもち、反体制的な抗戦の闘争になり得た。言いかえるならば、戦後の日本社会では社会主義と護憲(平和、民主主義、労働者の権利と生活擁護)とがきわめて自然に結合し、そこでは護憲—革新—社会主義が事実上、同義語であり、同じイメージをもち得た。だから当時では社会主義理論も具体的なプロセスや政策の媒介を今日ほど必要としないでも済んだ。そういう時期に社会党の原型が作られた。」とし、戦後後期の今日では、このような状況が消滅し、「それは根本的には戦後前期を特徴づけた国民大衆の自然発生的な要求や運動に受動的に依拠し組織的には総評に依存した段階から、逆に意識的な反体制と眞の意味の社会主義の党としての指導性を發揮し自前の組織と運動をつくりだすべき段階につき進むことが必要になつた」とある」と指摘している。

私は、この一連の文字を読み進むうちを裏切つて、日本の再軍備と基地化が強制され、戦後始めて味わつた人権や民主思想のない思いにかりたてられた。「よくも、

このような評論家的な文書を執行部の責任で出せたものだ」という思いである。

この憤懣は、地方から上京して二日間の討論に参加した中央委員と同じであった。しかし、私は、この中間報告書に貫かれている根本的欠陥が、二点あることに気づいた。

■没主体、非科学性

その二点とは、第一に闘った主体としての総括も、闘う主体としての方向もない、いわば労働者大衆の痛みを自己の苦痛として感することのできない者の文書であるということである。このようないくつかには三井三池の労働者、沖縄全軍労の労働者、二重処分をうけた東交労働者など、そしてペトナム人民の抑圧された人々の血の出るような叫びが、他人事としてしか聞こえないであろう。

第二点は、科学的な歴史的総括を行なう」とあるが、断じて、科学的でも歴史的でもない、ということである。

五〇年代の一〇年間の連続的な労働者大衆のたたかいのなかで、不斷に噴出し高揚しつつ、指導部を吹きあげていったエネルギーは、まぎれもなく労働者階級の普遍的質をもつた戦闘性であった。あの連續的なたたかいの過程で流された血と涙、そして喜びと悲しみは、まぎれもなく労働者階級のそれであり、この人間

解放への巨大な推力であり、今日社会党が失った宝を見ることができない者は、ブルジョア思想のひからびた感性の持主だといわねばならない。

労働者大衆は、この大工業資本主義に突入していく、最も鋭い矛盾を、その巨人の体験のうちにもっている社会的、歴史的存在である。その矛盾を単純化していえば、一方では日々生きるために自己の労働力商品を売るということで、ブルジョア制秩序の中での私的 商品所有者

II生活者として現われ、その限りで労働組合をつくって自己の商品を高く売りつけるのである。他方では、商品所有者である限りは、ますます機械と金にしばられた奴隸として生きられないから、それからの解放をめざし団結してたたかう。つまり、労働者大衆は人間を一面的に切りちぎられ疎外された生活者としての自己の側面と、その自己を否定する

人間解放の主体としての普遍性、全体性

を押し出さざるをえない自己との絶え間

ない相克によって、人間的苦悩を強いら

れているのである。五〇年代の労働大衆

と、その大衆とともに歩んだ社会党の活

動家たちの苦悩も喜びも、このようない

ういう歴史的限界（これはあとでふれ

る）をも突破するエネルギーをしばしば

見せたのも、労働者階級の自己の一面性

を否定する普遍性としての質の噴出であ

ったのである。

佐藤訪米阻止闘争で、現地羽田闘争を

な理念的表現なのである。それはブルジョア秩序の枠組の中で、経済の安定成長を背景にして、労働者大衆の生活者としての共同利害を社会党が議会で代行し、

ブルジョアジーは議会を通じて国民諸階

層の利害を操作したあり方であったので

ある。組合は、合理化過程で職場の資本

支配の強化と引きかえに、生産性のおこ

ぼれをもらう取引きの道具であった。こ

のような議会政治、組合主義を可能にし

た背景には、戦時革命の嵐が世界的にア

メリカ帝国主義の強大な力によって押し

止められ、かつ二〇年にわたって世界的

な経済の安定成長があつたことである。

しかし、ペトナム革命はアメリカ帝国

主義の内部矛盾を激化させ、国際通貨の

基軸として戦後君臨してきたドルは、六

八年三月のロンドンの自由金市場の取引

を停止し、他のポンドをはじめとする通貨の動搖をもたらし、総じて世界資

本主義の危機への突入を告げ知らせた。

このような七〇年代世界資本主義の危機

の入口に立った日本帝国主義は、高成長

の行手に黒い影を落しておらず、その内部

に公害、交通災害、物価高など社会的矛

盾を蓄積している。そして、政治的に

は、議会制民主主義の危機から、ブルジ

ア反革命か、プロレタリア革命かとい

う熾烈な階級闘争の時代へ突入しはじめ

ている。このような時代に対応できる党

をつくりあげることが、労働者大衆に應

え、社会党を再生させる大道であろう。

■どの旗を掲げるべきか

いま、社会党の行くべき道について明確なモデルがあれこれ言われている。それがせい急に求める傾向がつよい。今度の選挙で表現された労働者大衆の社会党支持傾向の急速な分解で、議員の足もとが音をたてて崩れはじめたからである。

とくに、今日の労働運動の動きは、せきを切ったように左右に分解しはじめている。その流れの一つの、I.M.F.-J.C.（国際金属労連日本協議会）へは鉄鋼をはじめ自動車、電機、造船など日本の基幹民間産業部門が結集している。これに中立労連傘下の労組、民社を支持する同盟系の労組が結合して総評に対抗する大ナショナル・センターの動きが強まってきた。この動きに結合しようとしているのが、全通の宝樹委員長、全鉱の原口委員長などである。この大ナショナル・センターを目指す運動の眼目は、総評の中途半端な政治闘争、経済闘争に対し、明確に資本の生産性向上に協力し、その利潤の分け前を多く獲得する方向である。この巨大な流れに対し、総評の民間左派主流は反撥しているものの、これに決定的に対決する方向を見出しえないでいる。地域的にも大阪をはじめ主要な工業都市において、民労想など生産性向上運動に協力する民間労組は急速に組織化され、新しいナショナルセンターの口

一カルセンタとしての動きが強まつている。総評と社会党の指導部は中央、地方でこの流れに圧倒されつつある。この流れに乗って政治的立場を守り強めようとする傾向は、日本労働党（宝樹全通委員長提起）結成への動きとなつて現われてきつた。この党的方向は、イギリス労働党、西ドイツ社会民主党など、徹底した議会主義党である。

右の流れが第一の潮流とすれば、第二の流れは、伝統的民同左派の潮流である。この潮流は総評の主流太田、岩井氏に人格的に表現され、主要な労働組合は官公労を中心とする。しかし、この民同左派の流れは自己の基盤が崩れつあるため、その流れを食い止める方向として、政治的には日共との統一戦線へ引き寄せられざるをえないであろう。この流れは社会党の中に、党の基本路線の保守と堅持を主張しつつ、結局は社共統一戦線へと進む傾向をもつであろう。

社会党の議員を中心とする指導部の傾向は大きくはこの二つの傾向を表面化させつつある。しかし、決定的に表面化するのは、労働戦線の結果を待つてのことである。この巨大な流れに対し、総評の民間左派主流は反撃しているものの、これに決定的に対決する方向を見出しえないでいる。地域的にも大阪をはじめ主要な工業都市において、民労想など生産性向上運動に協力する民間労組は急速に組織化され、新しいナショナルセンターの口

しかし、この二つの潮流は、さきに述べた労働者大衆の普遍性を担った道ではありえない。この二つの潮流に入ることは、日本帝国主義者によって許容されたブルジョア秩序の擁護者となることであり、帝国主義的労働運動、帝国主義的社會民主主義者の道に立つことになるということを隠すことはできない。

そして、この道に入るのは、ベルンシャタインが先導し、それに原則的に反対していたかにみえたカウツキーが、ついにドイツ帝国主義者の擁護者に転落していったように、先に進むか、後からハムレットのような悩みをぐぢりながら入るかの違いでしかなく、帝国主義社民であることに変わることろがないのだ。

このような状況はさきにのべたようにベトナム革命によって切り開かれた世界資本主義の危機、戦後革命の新たな時代への突入を背景としているのである。

すでに、一昨年五月のフランス一〇〇〇万労働者の職場占拠と反乱の開始、西ドイツ、イギリス労働者の山猫ストの日常化、イタリーの三労組統一の動きとゼネストの連続、さらに学園における反乱はわが国も含めて、世界的激動の始まりを告げているのである。わが国における年参議院選挙後に一挙に噴き出る可能性を孕んでいる。このような大きな方向での流れは、党内外での常識とさなつてはいる。ただ時期は微妙に諸要素がからりし、さらに反戦青年委員会に結集する

青年労働者へ波及し、今や中堅の労働者大衆、古い労働運動の闘士の革命性を引き出そうとしている。まだ、これらの流れは小ブルの急進性をともなつてはいるが、新しい七〇年代階級闘争の担い手として登場しはじめしており、その突きつけられた旧秩序への根柢的な告発から、何人も逃れることはできない。この流れは、労働者大衆への奥深い波及力をもつて進みつつあり、三里塚をはじめ、ブルジョアジーの権力によって解体を迫られている農民、市民、婦人、インテリゲンチヤとの戦闘的連帶をつくりあげつてある。

私は、この潮流がまだ流動的であり、階級的に未成熟であるとしても、この流れに現実に依拠せずして、七〇年代階級闘争としてのブルジョア反革命とプロレタリア革命の激闘に勝ち抜き、進撃することはできないと信じている。この道は苦難の七〇年代を通して、その基盤をつくりあげることができるほどであろうけれども、この道のはかに展望はない。

この道は、J.C.と民同の労働運動に対して、明確に日本帝国主義に対決する反帝労働運動であり、右翼社民の国民戦線を左から解体しつくすところの反帝ブルタリア統一戦線の旗を押してたて進まなければならぬ。われわれは、この道に立つて、社会党内外の同志、労働者大衆との団結をつくりあげつて前進する。

一カルセンタとしての動きが強まつている。総評と社会党の指導部は中央、地方でこの流れに圧倒されつつある。この流れに乗って政治的立場を守り強めようとする傾向は、日本労働党（宝樹全通委員長提起）結成への動きとなつて現われてきつた。この党的方向は、イギリス労働党、西ドイツ社会民主党など、徹底した議会主義党である。

右の流れが第一の潮流とすれば、第二の流れは、伝統的民同左派の潮流である。この潮流は総評の主流太田、岩井氏に人格的に表現され、主要な労働組合は官公労を中心とする。しかし、この民同左派の流れは自己の基盤が崩れつあるため、その流れを食い止める方向として、政治的には日共との統一戦線へ引き寄せられざるをえないであろう。この流れは社会党の中に、党の基本路線の保守と堅持を主張しつつ、結局は社共統一戦線へと進む傾向をもつであろう。

社会党の議員を中心とする指導部の傾向は大きくはこの二つの傾向を表面化させつつある。しかし、決定的に表面化するのは、労働戦線の結果を待つてのことである。この巨大な流れに対し、総評の民間左派主流は反撃しているものの、これに決定的に対決する方向を見出しえないでいる。地域的にも大阪をはじめ主要な工業都市において、民労想など生産性向上運動に協力する民間労組は急速に組織化され、新しいナショナルセンターの口

しかし、この二つの潮流は、さきに述べた労働者大衆の普遍性を担った道ではありえない。この二つの潮流に入ることは、日本帝国主義者によって許容されたブルジョア秩序の擁護者となることであり、帝国主義的労働運動、帝国主義的社會民主主義者の道に立つことになるということを隠すことはできない。

そして、この道に入るのは、ベルンシャタインが先導し、それに原則的に反対していたかにみえたカウツキーが、ついにドイツ帝国主義者の擁護者に転落していったように、先に進むか、後からハムレットのような悩みをぐぢりながら入るかの違いでしかなく、帝国主義社民であることに変わることろがないのだ。

このような状況はさきにのべたようにベトナム革命によって切り開かれた世界資本主義の危機、戦後革命の新たな時代への突入を背景としているのである。

すでに、一昨年五月のフランス一〇〇〇万労働者の職場占拠と反乱の開始、西ドイツ、イギリス労働者の山猫ストの日常化、イタリーの三労組統一の動きとゼネストの連続、さらに学園における反乱はわが国も含めて、世界的激動の始まりを告げているのである。わが国における年参議院選挙後に一挙に噴き出る可能性を孕んでいる。このような大きな方向での流れは、党内外での常識とさなつてはいる。ただ時期は微妙に諸要素がからりし、さらに反戦青年委員会に結集する

ミニコミが語る70年

ビラは紙の弾丸なのだ



特集2

3

みにこみさんか
味煮込讃歌

我憂不可判真偽
大鱈込増増横暴
推進文化大革命
画入鰐平小新聞
制作頒布全日本

ここにたくさんのビラやパンフレット
やミニ新聞がある。全国各地で運動をし
ているグループから、「週刊アンボ」の
編集部へ送られてきたものだ。とてもお
もししい。商業誌にない新鮮な驚きと感
動を受けるのである。まったく新しい発
見が、いくつも掲載されている。それ
は、けっしてマスコミではとりあげられ
ないが、だからこそかえって重要なこと
が、もれなくすくいあげられて、ガ
リ版やタイプ印刷の紙面に書きこまれて
いるからである。手づくりの運動である。
そこで、これらのミニコミを誌面の許
すかぎり紹介することにした。じっくり
と読んでみると、また違った角度から、
一九七〇年代に向かって、日本の各地で
あるかを、知ることができるだろう。

(編集部 A)

▽「月刊浪人」2号傘はり中
連絡先 東京都代々木郵便局私書箱42
号。月刊浪人 2号を準備中だ。定価
1冊100円。送料25円。

▽「弾圧を見たら受けたら救対へ！」

暴力を見たら受けたら警察へ！ とい
うその筋のキャラクチ・フレーズを逆手に

連絡先 福岡市箱崎帝大前町4組23
26の1 石崎昭哲気付。1部カバン
15円以上。送料15円。月刊。

▽「朝日真聞」現わる

新潟自主上映の会では、会のメンバ

安保ファンサイへ・人間の渦巻を！

雨か血潮かバンガサ・ゲリラ

取つて地道な救援活動を続けているのが

福岡べ平連救対。彼らの機関紙「警察を

我々の手に！」（ガリ版4頁）は、今年

の1月30日に創刊された。そのなかか

ら、コラム「救対辞典」を紹介してみよ

う。

▽「月刊浪人」2号傘はり中
去年新宿西口のフォーラーク集会で、番金
をさして歩きまわり一躍名をあげたバン
ガサ・ゲリラたちは、機関誌「月刊浪
人」1号を夏に出したきり、姿をかくし
たかと思われていたが、ここにふたたび
登場。まず、彼らの健在をしめすビラ（カ
ルメン・マキの姿絵入り）を紹介する。

ル

「かつたるいのか つらいのか

それともやつぱり 馬鹿なのか
泣かぬ 笑わぬ カルメン・マキ

と ひとに呼ばれて はや六月

そんなわたしも 惚れました

斬った賭ったの 男の世界

雨か血潮か バンガサ・ゲリラ！

みんな読んでる「月刊・浪人」、み
んな買ってる「月刊・浪人」、僕ら
のメディア「月刊・浪人」

「救対辞典」

・警察=法を守って（？）人を守ら
ないもの。

・逮捕する=異常なふるまいありと
いう理由で、罪に問われた

ものを正式に留置する。

・公務執行妨害=デモに出ている市
民、労働者、学生を弾圧す

るとき、機動隊や私服の士

気が低下しないよう、彼ら

が自信をもって暴力をふる

えるよう制定された罪名。

通信 警察を我々の手に！

に一枚ずつガリ版の原紙を配り、それに勝手に自分の日頃考えていることや訴えを書いてもらい、集めて1冊の小冊子をつくりあげた。原紙を配ったところが新しいアイディアだ。その小冊子から1頁を紹介しよう。

「朝日真聞」というのがある。わざわざ「類似悪質品にご注意下さい」と断わり書きがしてある。

朝日真聞

高校生の政治活動を奨励 文部省
校外デモ参加を推進――

文部省は高校生の政治活動と政治教育のあり方について基準をまとめた。政治目的を持つ学校外のデモ、集会への参加を奨励するというのがその大筋だ。また政治問題を教育の中で扱う場合は、多くの側面を教え（特に体制が何を望んでいるかをはっきり示し）教師の個人的意見の「おしつけ」については干渉しないとしている。文部省はこの基準を月中旬に都道府県教育委員会に通達する方針で「初の教育現場に即した基準」だと、各界の賞賛をあびている。

福岡ベ平連は、いつもていねいな美しいビラを作っている。「一九七〇年は何の年?」というビラの文章は、わかりやすく読むひとを考えさせる。（活版）

アンボとはなんだ
なんだとはなんだ
このビラはいったいなんだ
ひろば！

あら、ほくらみんなのものだ
それは集まり、歌い、交歓し

一九七〇年は何の年?
EXPO '70?
ベートーヴェン生誕二〇〇年?
イヌの年?

このビラは去年の8月23日、東京は、日比谷野外音楽堂で開かれたベ平連集会へ広場・フォーラム・権利／を呼びかけたもの。まず、初号の大きな活字が「なんだ」と飛びこんできて、つい読んでしまう。読んだあとで「なんだ」と集会にかけるか、ゴミ箱に捨てるか、それが問題なのだ。

あなたの参加で動く盛岡ベ平連

さて、高校生も運動が活発になるにしたがって、ミニコミが量質ともに高度成長。1つの高校に定期的な紙誌の4つや

5つは必ずある。まずはハレンチ・デモの、ハレンチビラから御紹介。

あなたが参加で動く盛岡ベ平連、といふ呼びこみ文句で運動を続いている盛岡では、市内の喫茶店「コロンビア」（このコーヒーは美味だそうです）に、連絡ノートが置いてあり、さまざまなひとが、さまざまなことを書きこむ。このノートをもとにして作ったのが「ベ平連通報（盛岡）」。その中からひとこと。

△ハレンチ・ヤングのビラ

11・15 佐藤訪米阻止
ハレンチ・デモを！

佐藤訪米阻止へ高校生の渦巻を

横ダンマーク・プラカード・ワッペン・ゼッケン・ウンショウ・ハタ・ビラ・ビラバクダン・ポスター・ハチマキ・肉弾・美声・ドラ声・肉体美・ステッカー・バッヂ・ヌード・ギター・歌・花・無etc そして君の意志すべての手段をもって阻止しよう！
ベ平連は花で武装する！

▽あなたはどちらの側を選ぶか？

連絡先：新潟市南浜通り1の362高橋方

△このビラはなんだ?
なんだ……?
広場とはなんだ
フォークソングとはなんだ
自由とはなんだ
ベ平連とはなんだ
機動隊とはなんだ

KMORIO
MORIO
通報

（連絡ノートより）

校当局の答えは「生徒会は組合ではない。話し合う必要はない」その上、「校則その他に不満があるならば、学校をやめろ」と、つけ加える。

これが教師といえるでしょか。これが真理追求の場であると誰がいえるでしょうか。（後略）

第三樂章（戦闘的意識化）
アパシヨナート行為と認識の一体化。

ソダンテ）解放を意識化せよ。
弁証法としての第一樂章への必然的
移行。

第四樂章（歓喜としての苦難）ア

各地で「週刊アンボ」ローカル版

東京の週刊アンボ社が発行している「週刊アンボ」は、週刊と名乗ってはいるが、実は隔週刊。そこで、日本各地で、ホントに毎週発行している、ほんもの「週刊アンボ」が現われた（福岡ベ

平連、その他）。全国的に見ると、一体何冊の「週刊アンボ」が発行されているのだろうか。

連絡先：愛媛県松山中央郵便局私書箱132号
松山ベ平連氣付

「朝日ジャーナル」など、もうおかしくつて読めない。これからは「明日ドーナル」の時代だ。久しく発刊を待たれていた南大阪ベ平連（なんだいべ）の報道・解説・評論誌「明日ドーナル」が、いよいよ近日発刊までこぎつけた。現在創刊号を目指して準備に大忙。定価未定。

▽「反戦市民」松山ベ平連
伊予は道後の湯の町にも、機関誌「反戦市民」が誕生。松山ベ平連法律教室

シリーズ「道交法って何だ？」は、大変実用的な記事である。創刊の知らせを次のように送ってきた。

「朝日ジャーナル」など、もうおかしくつて読めない。これからは「明日ドーナル」の時代だ。久しく発刊を待たれていた南大阪ベ平連（なんだいべ）の報道・解説・評論誌「明日ドーナル」が、いよいよ近日発刊までこぎつけた。現在創刊号を目指して準備に大忙。定価未定。

連絡先：大阪市阿倍野区松崎町2の5
31、近海荘67号、南大阪ベ平連。

▽「元祖「週刊アンボ」（神戸）
「週刊アンボ」（こうべ）は、去年の10月4日が創刊だから、一番歴史が古い。

タブロイド版・4頁・ガリ版刷りの週刊誌は、印刷美麗、中味濃厚。新譜紹介のページまであり、じっくりと読ませる。



▽学校に自由はない

目黒高校生徒有志連合
生徒会をわれわれの手に！

学校に自由はない。何を出版・掲示するにも、常に検閲がつきまとつていて。われわれ生徒の集合体である生徒会は、学校当局の都合が悪いと、生徒会役員が呼び出され彈圧されている。これは梧林祭が一方的に延期されたことで明らかだと思う。生徒会が話し合いを要求すると、学

▽アレグロ・マントロッポ

学校に自由はない、それでは学校に自らの空間を創り出したとき、高校生は何を考えるか。パリケードの中で拾ったラクガキを一つ（去年9月30日、青山高校の封鎖中の教室の黒板から）。

パリケードという純粋なあまりにも純粋な「設定された場」においてはじめて疎外されたところの自己を客観視することが可能となる。疎外——はく奪された意識——今まさに自己は創られつつある。

第一樂章（落ち着いて——モダント）疎外の認識・マルクスの四つの労働疎外→H・ルフェーブルの現代

——はく奪された意識——今まさに自己は創られつつある。

反戦市民 松山ベ平連

象化（情況の設定）日常生活批判。

松山ベ平連では機関誌「反戦市民」を作りました。いわゆる反戦運動についても、素人ばかりの者が苦心して原稿を書いて約四百部作製。「週刊アンボ」のローカル版といったところです。毎週木曜、定期ティーチ

楽器の持込み禁止!

御影高校反文化祭

10月5日御影高校で、学校側の文化祭に對して、主体的な文化祭を追求する反文化祭が企画された。

当日、ペ平連のフォーク・モグラが参加すると、「凶器と樂器の持込み不可」といった掲示が出されたり、機動隊の車一台と制服警官が学校の前に配置され、20数人の教師が門をかためている。

ペ平連の仲間の一人が中庭で歌おうとすると、教師数人が実力で彼を追いだした。しかし、フォーク集会は、百名の抗議集会で続けられたのであった。

▽たとえ五人のデモでも

静岡地区・ペ平
連連絡セタン一
通信

連絡先①神戸市灘区六甲台神戸大学学生会館204
生会館204
神戸アンボ社。バックナ
ンバー有り、1部35円(送料含む)。

五人のデモ
12月定例デモ

12月7日の日曜日、ペ平連の定例デモの日であった。デモった人数はわずか5人だった。4人が旗と横断幕を持ち、残った1人がハンドマイクで話す。

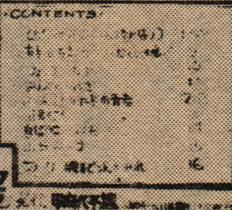
旗だけが歩いている感じで、きっと奇妙な感じがしただろう。私服も何かニコニコしているような感じでむしょうに腹が立った。しかし、5人のデモに参加して一番感じたことは「デモしての実感」が感じられた。何か言葉で言い表わせない「少強かった。70年安保が怪物のように存在する限り、黙っていることは許されないとと思う。たとえ一人のデモであっても。

激動の70年代
断固闘うぞ!

連絡先②静岡市池田756の5
葵荘Bの1
岡村周喜気付。

はりせり

ぼくたちは拒否する。
召集され一公団住宅化され一卒業資格化され一登録され一教育され一警棒で殴られ一追跡操作され一健忘がス化され一書類化され
るとも。



△アンボ大学開校

関西ペ平連
通信

安保をつぶすための

「アンボ大学」入学のしおり

安保は広範な反戦・反安保の闘い

を展開する私たちの前にドッカリ腰をすえている。安保をつぶすためにには、より地域に根ざした行動が必要だろう。1月からアンボ大学を設立する。

ミニコミニこそ力をもつのだ

ここに浜松ペ平連が作った、掛川市民へのアピールがある。ガリ版刷りの一枚のビラだ。じっと、この手作りのビラを

見つめていると、まだ会ったことはないが、浜松ペ平連のメンバーのひとりひとりの顔や、鉄筆をにぎった手がホーフツとしてくる。そんな感じのビラだ。

ガリ版刷りのビラには、活版にはない味わいがあるものだ。作るひとの汗や呼吸が読者にじかに伝わってくる。この広い空の下の、どこかの片隅で起つた、小さいが、しかし決して見のがすことのできないニュースを伝えてくれる。

▽未熟って何だろうか?

掛川市民のみなさん! (43頁へ)

立する。

△カリキュラム

2月11日

豊中市民会館

「産業軍事化」「日本の軍事力」「基本撤去闘争」について。

●求人広告

▽ガリキラー(ガリをきるひと)

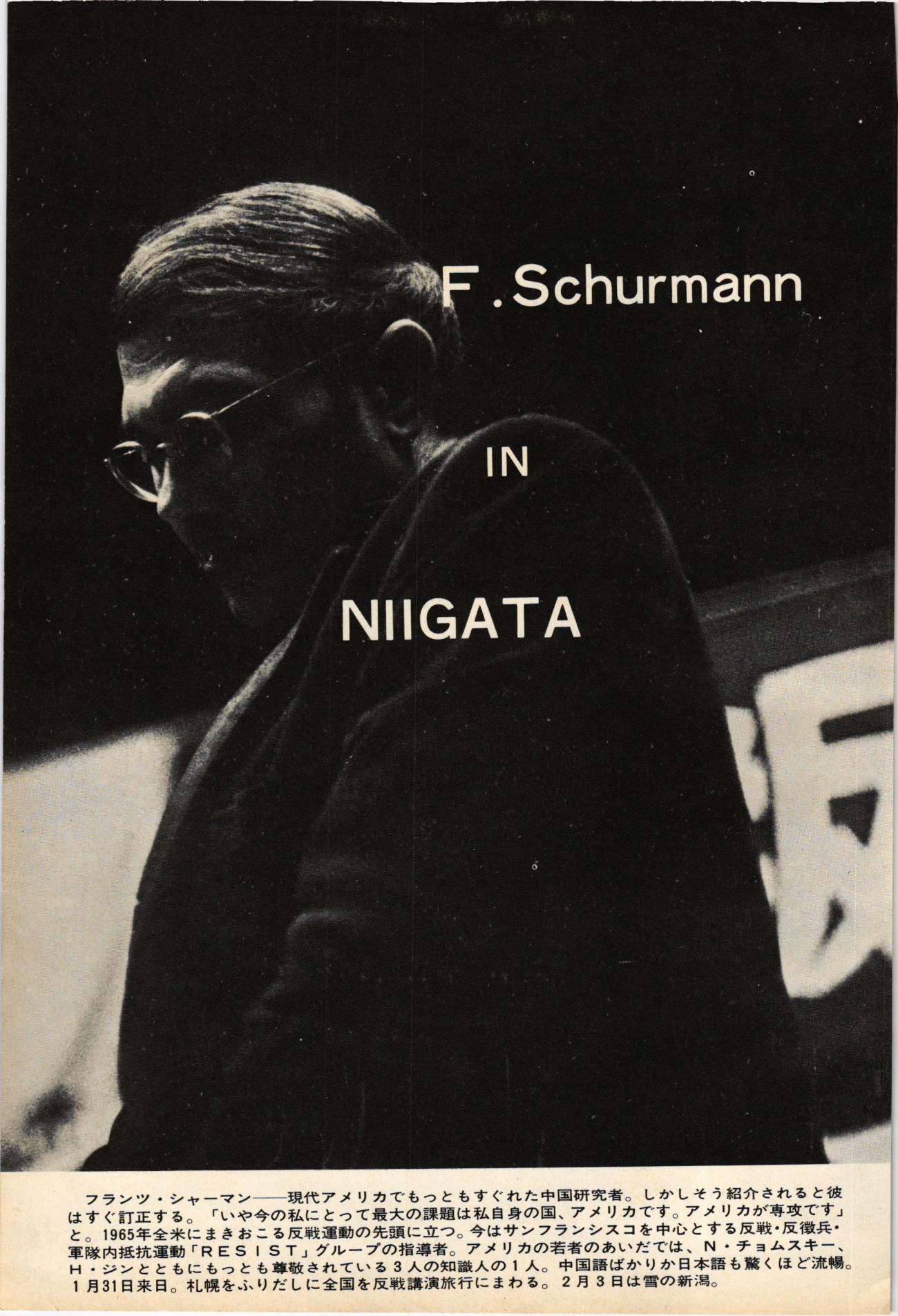
▽スリラー(印刷技師)

▽ボスラー(ボスターをはる人)

▽特技のない人(手に職がつけられます)。

面談即決・乞來事務所

連絡先③大阪市北区葉村町1芝山ビル
2F
関西ペ平連氣付。



F. Schurmann

IN

NIIGATA

フランツ・シャーマン——現代アメリカでもっともすぐれた中国研究者。しかしそう紹介されると彼はすぐ訂正する。「いや今の私にとって最大の課題は私自身の国、アメリカです。アメリカが専攻です」と。1965年全米にまきおこる反戦運動の先頭に立つ。今はサンフランシスコを中心とする反戦・反徴兵・軍隊内抵抗運動「RESIST」グループの指導者。アメリカの若者のあいだでは、N・チョムスキーやH・ジンとともにいつもも尊敬されている3人の知識人の1人。中国語ばかりか日本語も驚くほど流暢。1月31日来日。札幌をふりだしに全国を反戦講演旅行にまわる。2月3日は雪の新潟。



新潟市公会堂は1500人の参加者
で満員。配られたべ平連や反戦青
年委のピラにもいちいち眼を通す
(右左とも新潟集会の会場で)。



この集会では、元航空自衛隊三曹小西誠氏も出席、反人民的自衛隊の解体を訴える。小西氏の行動と訴えは今、全国に大きな反響をまきおこし、「第2・第3の小西を！行動委員会」は、地元新潟をはじめ、仙台、東京、浜松、大阪、徳島……など各地に生まれている。集会では、小西氏の行動を支持し、そのよびかけに答えようとする人びとが、すべて「特別弁護人——民衆弁護人」となることが提案された。シャーマン氏、小西氏につづいて立ったもののべ・ながおき氏や小田実氏のその訴えに、シャーマン氏は通訳もまじえず聞き入り、深くうなづいていた。

なお、この集会では、福岡の前田俊彦氏も講演するという多彩な顔ぶれ。





「第2・第3の小西を！新潟行動委員会」は、全国の反自衛隊闘争の先頭を切る。昨年12月27日、新発田市の自衛隊基地前へ進む小西氏支援の行動委主催デモ。



集会の翌朝早くシャーマン氏は雪の新潟市内を散歩する。今日はこれから東京を経て名古屋の集会に向かう。小西氏が福岡までの集会すべてに同行することになって、シャーマン氏は「ウレシイデスネ」と日本語でいう。



考え方、叫び声を上げよう

(掛川西高では、ほんとうはどんなことが起こっているのでしょうか)

「ことのおこり」

この六月伊東市で行なわれたアスパック会議。この会議に反対するため全国から多くの労働者、市民、学生が伊東市に集ったが、西高の生徒たちも反対行動に参加した。これら

の日本や世界の暗い未来と、不安を敏感にかぎつけて（なにしろ、はつきり言えば、佐藤の栄作どんの考

えていることは、戦前の大東亜共栄圏と同じなんですかね）。ついでに言えば、伊東には、小・中・高の先生たちもたくさん反対集会に出かけた。しかしに、しかしに「アスパック反対行動に参加した」という理由で、高校生に処分が下された。

退学処分七名／無期謹慎三名！

(会社で言えば、クビ、無期停職)

(校長や教育委員会の言いわけ)

——高校生は未熟でアール、政治的教養をつむのはおおいにけつこう。しかし、行動はいけないのでアール。

おえらい衆のいうことのもつともらしい、しかし、ねじれているわけ

1 人間は果物とちがって未熟なんではない。自分たちが人間であるとおもつたとき、人間は人間である

中卒で就職した、高校生と同年代の少年たちはどうなんだ？「未熟」だといつて社会的に保護され、優遇されているか？ 一人前

以上にあつかわれているではないか、（金の卵ともてはやされ、ピストルをぶつ放したくなるような安月給でこきつかわれ、一人ぼっちにされているではないか？

か、（金の卵ともてはやされ、ピストルをぶつ放したくなるような安月給でこきつかわれ、一人ぼ

っちにされているではないか？

しみず・ベ平連ニュース

オレは見たんだ！

8月31日掛西不当処分撤回集会とデモが行なわれた。翌日の新聞は、彼らを暴力集団として報じた。

「掛川市民の心配現実に、大あれの

学生デモ、ゲバ棒手に突進」(毎日)

「またもゲバ学生」(静岡) これだけを見れば、その場にいないものな

ら誰もが彼らを単なる暴力集団だと

思ってしまう。そのため機動隊が出動したのだと思ってしまう。

かつてのオレでは、そう思ってしま

うだろう。だが今は違う。オレは見たんだ！

女性の上半身を裸にしてジュラルミンのタテの下に引きずりこんだの

▽オレはハッキリと確信したんだ

最後に「しみず・ベ平連ニュース」

(第2号) を紹介しよう。ガリ版刷りで、ワラ半紙一枚の新聞だ。去年の8月31日掛西不当処分撤回の集会とデモに参加した一市民が、その感想を記録している。ミニコミの大切さを充分考えさせる文章である。



を、一人のデモ参加者に対して数人の機動隊員が何も抵抗しない者をいや抵抗できなかつた者をなぐるケルの暴行を加えたのを、隊列の中にいるデモ参加者を無理矢理引き抜いて暴行を加えたのを、機動隊によ

り分断されたデモ隊20数名が掛西高校門前でフォークを歌っていた時、それを見ていた市民約50名を機動隊が強制排除したのを、オレは見たんだ。

新聞記事やテレビのニュースとは全々違うものをオレは見た。そして聞いた。そしてオレははつきりと確信した。警察・機動隊つまり国家権力は、当然の権利を要求している者を不当に弾圧する以外の何ものでもない。新聞は事実なんか伝えやしない。テレビもそつだ。支配者どもの機関紙にすぎないんだ。(Y・I)

ここに紹介したのは、編集部に送つてきただミニコミの、ほんの一部だ。紙面の都合で抜き書きしかできなかつたけど、これからも機会あるごとに紹介したい。お互いに交換してみるのもいい、長野の資料交換センターを使うのは一つの手だ。『週刊アンボ』第三号・市民運動入門、参照。それから、ピラや新聞を出すときは、連絡先や発行日付を入れた方がいいだろう。作つたらぜひ送つてほしい。

■闘う労働者の座談会

■労働運動は これでいいの

特集 2

4

社会党の敗北、そして労働運動の経済主義化、官僚主義化。

動脈硬化をきたしたその原因は労働組合自身にある。

—労働運動内部からの赤裸々な告白。

編集部 ■ 今日、ここにお集まりいただい

たみなさんは、それぞれの産別労組において、戦後ずっと運動を続けてこられたのですから、その体験を通して、これからも七〇年代闘争をいかに闘うかということを中心にお話し下さい。

高物価・高賃金・生産性の向上・投資の上昇といった動向のなかで、企業の体質は漸次の変化をしている。その一方において、労働運動は、経済主義的・官僚主義的動脈硬化をきたしている。脱却のための方法があるのかどうか。そして七〇年安保闘争をどのように闘っていくのか。そのなかで、反戦青年委員会とのかかわりあるいはどうするのか、といった点について、みなさんの体験からの御意

おもなテーマである七〇年闘争と見をどうぞ。
うことでいえば、総評全体のなかで、七〇年闘争とはということについて、完全に意志統一されているとはいえない。
意志統一どころか、七〇年闘争とは、と

大評議委員会という、大会につぐ会がひ

—サマーミロの原因



総評というのは、発足以来、そういう

う体質をかかえてきたのだが、いまや、いろいろな欠陥をもちすぎて、いままでは隠しあおせてきたものが、職場の労働者にばれてしまった。それが、いまの運動の停滞につながっているよう思いましたね。

すね。

B ■ 労働組合が一種の権力機構になつてしまつてゐる。とくにうちの場合、労使の二重帰属意識がつよい。そういう状態のなかで、むこう側は労働組合を、自分の対置物としてしかうけとらないんです。そうなつてみると、「組合の役員と

いうやつは、うまいことしてんじゃない
か」とか、「おれたちをおだててなにか
させて、自分たちだけいいことしてやる」
というようなムードが、かなりある。そ
こでそういった気持ちが、社会党の敗北
にたいする「ザマーミ怨」いう言葉に
なってはね返ってくると思うのですが。

E ■ 社会党一本やりを、押しつけてきた
ことにたいする反撥ということもあつた
と思いますね。

じつにもしないような議論がなされて
る。上二郎がそのよかど、六月二日、

F ■ それからもうひとつ。社会党に期待を裏切られたという、社会党支持層から批判もあるし、社会党を悪くしているのは、組合幹部じゃないか、ということもあるんじゃないですか。

A ■ 公明党、民社党から共産党まであって、それが期せずして社会党一本化で、「ザマーミロ」という点では統一戦線をくむ。(笑い)

E ■ 反戦の労働者は、社会党の敗北ではなくにもいってこないですね。

F ■ 去年の夏、反博の会場にある労組の幹部があらわれて、十一月闘争についてかたったのだが、その時、「否定すべきものは、いまの労働組合そのものだ」といって、ハッパをかけた。そこまではよかっただが、問題はそういう幹部が、本来それにささえられていくべき層からすら、じつはみはなされていたのではないと思う。その辺が、いま説明されていよう、さまざま「ザマーミロ」という声になつてはねかえってきたのだと解釈していますがね。



B ■ 組合幹部のことですが、彼らは「左」とか「右」を問わずに、信頼感をもちえない状況がありますよ。それが逆に、労働者の分断をまねいているし、不信感の原因にもなっている気がする。

“かれ”の役割り

A ■ 総評の去年の方針のなかで「人間性回復」ということがうたわれていたわけですが、それに対して、雑誌「エコノミスト」が「総評は、まるで被害者づらをして、労働者一般を代表する形で、『人間性回復』などといっているが、総評自身が、じつはその加害者のひとりなのでないか。」と批判したわけですよ。大変、痛烈な批判だなと思って読んだんですが、確かにその通りなんです。組合自身、労働者に対する加害者として存在している側面がありますよ。その辺の自己批判に裏打ちされていいかぎり、幹部がいくら信頼してくれといつても、労働者は信頼のしようがない。いってること

はまともにみえても、まともにみえることがなぜ労働者のなかに入つていかないのかということの原因をつかまないとダメですね。

E ■ さっきの反博にきた幹部ですが、全電通においては、彼の役割りがまだ終わっていないと思う。というのは、彼は地方にいる「反戦」の気持ちのよりどころとして存在していると思うんですよ。「彼がいるので、われわれはほかの単産にくらべ、しめだしをくわされることが少なくてすむ。勇気をもってやろう。」というのだが、いざやろうというときになると、目の前にいる中堅幹部が押えつけてくる。そこで職場での活動ができずに、街頭に出てゆくことになつてしまふという、関係がある。何年もつかわからぬが、そういう意味で、「彼」の役割りは終わつていい感じがします。

A ■ ばくの感じでは、彼が、労働組合中央幹部のなかのただひとりの造反派じゃないかな。さきほどの総評の拡大評議委員会で、太田元議長が「今年の総評の春闘方針は、社会党シヨックでじめじめしきぎている。運動方針はアジテーションだ。もっとアジレ、アジれば大衆はたちあがる。」といったのにたいし、「かれが「いま古い古い人が、なにかいわれたようだが……」と、かみついていた。運動方針はアジだなどというものの考え方をしてきたから、いま労働者は労働組合を信用しなくなつてきていた。

方針はあくまでも組合の本音でなければならぬ。」といったわけです。そうしたことについて幹部は、中央の段階では、ばくの知るかぎり、彼ひとりですね。これは「彼」が偉いということだけではなくて、労働運動のなかに原点復帰運動として存在していると思うんですよ。「彼がいるので、われわれはほかの単産にくらべ、しめだしをくわされることが少なくてすむ。勇気をもってやろう。」というのだが、いざやろうというときになると、目の前にいる中堅幹部が押えつけてくる。そこで職場での活動ができずに、街頭に出てゆくことになつてしまふという、関係がある。何年もつかわからぬが、そういう意味で、「彼」の役割りは終わつていい感じがします。

E ■ そうですね、「彼」はまた「会社側につく労働者も二割か三割はいるだろう」という太田氏の発言にたいして「もともと、そんな人はいるし、労働者というものは皆悩んでいる。それらを全部つづみこんでいくものが、本当の労働運動ではないか。」と切り返したわけですよ。その辺は重要な問題だと思うんですけどね。しかし、そんな人も、職場の労働者からみれば、雲の上の上の人でしかないという関係しか、いまはないのではないんじやないですか。「彼」がこのことを、いくら考へてもそういうふうにしかならないことに問題があるみたいですがね。

F ■ それはやはり、労働組合の機構がそういう形になつてしまつたことの結果だと思います。われわれがそこを埋めなければならぬんだが、それほど力量をもつていい。ぼくはある意味で、かれに批判的なんだが、いまは彼を利用し、そのなかでやつてこようという気持ちはわけです。地方の「反戦」の組合員もおそらくそうじゃないかな。うちの場

合、むこう側に先行して、企業から独立した組合をつくるということで、役員の企業離籍をやっているんですがね。ところがそれをみると、企業離籍をした連中の相互扶助のような労働運動になってしまった。そうした労働運動のひとつよりもどころとして、本当は敵対すべき相手について、なにかを獲得する——。それが組合員の支持を得ることだと思つて、いる変てこな発想方法から、むこう側につながってしまう。したがって、ホソうと思う者にたいしては、むこう側と組んで、そいつを浮かせれば、ホせるわけだ。ところが運動のなかで、そういうことがあからさまにならない状態がある。その辺が、この低迷をどうぶち破るかという問い合わせの糸口となっている気がします。

会社好みの労働運動

D 労働運動とはなにか。それから、そのなかにいる幹部というものは、いったいなんのために、運動に参加しているのか。商売でやっているのか。それとも、まさしく運動でやっているのかといふことに関係してくる。

B この間、「週刊朝日」でみたのですが、「社長ごみの全国民労懇」という見出しで、全国の主要大企業の労働組合の委員長の一種の戦線統一というおまけまでついた懇談会を、皮肉にとらえてい

た。それに「ジョニクロ組合」などといふことばも出ていたが、右傾化したり、反動化したりしている組合の状況をみてるとほんとに「商売でやっているのか」とでもいいたくなる面があるんですよ。執行委員を二年もやれば、外国ゆきができるし、組合三役などになれば、年に二、三回官費で国際交流でかける。職場の労働者の不信感はあたりまえですよ。

A ■ 生産性労組懇談会という、戦線統一の動きで、最近新聞がにぎわっているようですが、あれは、いわば企業のパートナーとしての組合というものが、いまひとつ流れになってきているのではないでしょうかね。これが、効果ある組合づくりというような、企業と組合に二重忠誠をもたせる労使関係をつくっている。

F ■ 企業のワク内で、‘会社ごのみ’の組合運動をするという考え方ですね。だがあんまり露骨にそれに専念していると、組合の体面というか、組合から選出された幹部自身の体面がたもてない場合がある。したがって体質的には、社長ごのみ’の企業パートナーとしての組合になりつつあるにもかかわらず、やはり組合の体面を維持しなければならないから、そのための政策として、運動、たとえば春闘があるわけですよ。この二面性は最近の職場では徹底していて、合理化

B ■職場の労働者は、若い者も年寄りも、いまの大勢をしめている組合路線は、經濟主義とか組合主義とかいう、耳ざわりのよい路線が求められており、総評もそれにだいぶゆさぶられている。高度成長はまだ続くかもしれないが、經濟主義には限界がきており、組合主義にも限界がきている。生産性本部のやつかな、「今年の春闘は、十五パー・セントぐらいで」と、もう解答を用意しているということだ。五ヶタまでいくかどうかわからないが、与えられた春闘というのか、もう解答が用意されているわけだ。出すものは出すが、そこにはギブ・アンド・ティクルなるかわからぬ。」たまたま役員選挙があって、企業側公認の候補が、対立候補員も考へた。『反戦に分会をまかせていてはどうなるかわからない』たまたま役員選挙が勝つてしまつた。ところで、またそ

で、出した以上に取りかえすという形だ。経済的な面でも、量的な面でも、組合は経済主義だとか、組合主義だとかで、闘っているんだといつてはいるが、ほんらのみるところでは、闘って取るというより、与えられた範囲内で、恰好だけつけて取るという限界がでている。

B ■ そういう状況の中で、指導部の体面を保つというか、地位を保持していくといふか、恰好をつけたための春闘、ごまかしの春闘といおうか、いまの労働運動をみると、非常にはっきりと、インチキな状況になってきているのを痛感するわけですよ。ただ、同じ指導部層にも、雲の上にいて、資本とゆき着している層と、つねに下部の大衆と接触している層とに違いはある。同じ右傾化した幹部の流れのなかでも、大衆と接触する職場の幹部は、大衆の不満を直接聞いて、それに応えていかなければならぬ。

会社好みの労働運動

労働運動とはなにか。それから、そのなかにいる幹部というものは、いったいなんのために、運動に参加しているのか。商売でやっているのか。それとも、まさしく運動でやっているのかといふことに関係してくる。

■企業のワク内で、会社このみの組合運動をするという考え方ですね。だがんまり露骨にそれに専念していると、組合の体面というか、組合から選出された幹部自身の体面がたもてない場合がある。したがって体質的には、社長ごのみの企業パートナーとしての組合になりつつあるにもかかわらず、やはり組合の体面を維持しなければならないから、そのための政策として、運動、たとえば春闘があるわけですよ。この二面性は最近の職場では徹底していて、合理化

F ■ ぼくのところの分会は、東京のすぐ近くで、反戦が指導権を握っていた。ところがこのため、企業側からジャンジャン攻撃がかかる。それで組合員も考えた。「反戦に分会をまかせていてはどうなるかわからない。」たまたま役員選挙がある勝つてしまつた。ところで、またそこ

インチキな労働運動と反青委

反青委 で組合員は考えた。「おれたちは御用組合になつたのじゃないか。」それでよくよく投票を調べてみると、一票あつたのがある。で、選挙をやり直したら、こんどは、反戦が勝つてしまつた。(笑い。異議ナシの声)

おかれているわけだ。

B ■ 職場の労働者は、若い者も年寄りも、いまの組合幹部の本質をみとおしているわけですよ。だからこそ、彼らについて不信が生まれるし、「ザマーミロ」ということにもなってくるわけです。

C ■ 今の大勢をしめている組合路線は、経済主義とか組合主義とかいう、耳ざわりのよい路線が求められており、総評もそれにだいぶゆさぶられている。高度成長はまだ続くかもしれないが、経済主義には限界がきており、組合主義にも限界がきている。生産性本部のやつかな、「今年の春闘は、十五ペーセントぐらいで」と、もう解答を用意しているということだ。五ヶタまでいくかどうかわからないが、与えられた春闘というのか、もう解答が用意されているわけだ。出すものは出すが、そこにはギブ・アンド・テイクで、出した以上に取りかえすという形合は経済主義だと、組合主義だととかで、闘っているんだといっているが、ぼくらのみるところでは、闘って取るというより、与えられた範囲内で、恰好だけつけて取るという限界がでている。

本とゆき着したりするものであつてはならないという考え方をし、そう指導してきた幹部自身のものの考え方のなかにありますそれを問題にしたい。さきほどいつたように、今年は五ヶタ春闘だ。「五ヶタ獲得すれば、労働組合も信頼を回復するだろう。」という考え方があるが、たとえ五ヶタがまるまる取れたにせよ、それは組合が戦い取つたものではなく、資本の側に支出余力があつたからにすぎない。そんな状況で獲得したところで、資本主義体制をゆるやかにするものにはならない。むしろ体制の安全弁としての機能しか果たしえない。そういう意味で、いまの労働運動はインチキなわけです。

右よりの労働運動がインチキなだけでなく、左といわれてゐる幹部の進めいく労働運動でさえインチキだということが、労働者にそれこそ見通されている。だから、大部分の労働者に「組合なんて……。」という不信感がでてくるわけですか。

そのなかで、「こういう形の労働運動は間違っている。労働運動はかくあるべきだ。」といい始めているのが、反戦青年委員会なわけです。ところが、左といわれ

る労組の幹部ですら、自分たちのしていることは正しいと思っているものだから、反戦からつきあげられても、反戦がなぜ自分たちの方針に反対するのか、のみこめない。客観的にみた、自分たちの今までの役割りがなんであつたかといふ、自己検証がないものだから、また個人的には善意でやっているものだから、資本の安全弁でしかなかつたといふ、運動についての反省……。

勢に転じるかということを、いまの指導者は全然考えていない。だから適当なところで、ごまかしているというわけだ。つまり、自分達の今までの経験だけに頼って処理しようとしているから。

E おたくの反戦は、青年部二万名で全世界の三分の一強だが、結束は堅く、独自に東京大会をひらくような力量をもつてゐる。それがいまでは、職場のなかで中堅幹部の活動家に育つてきているので組員との結びつきも、わりあいうまく

はじめから「労働者に、今、何ができるか。」という次元で運動を考えればいいのだが「総評がこうだから。」「社会党がこうだから。」「今の労働運動一般がこうだから……。」という、いかたしかできない。自分達を本来させていなければならぬ職場とは、違った次元で、運動というものを考えてしまう。これはうちだけのことではなく、総体としていえることだろうが――。

質的变化を迫られている状況なのに、それに気づかず、不信感をもたれていく幹部がほとんどです。今の労働運動で

運動はインチキなわけです。
右よりの労働運動がインチキなだけで
なく、左といわれてゐる幹部の進めてい
く労働運動でさえインチキだということ
が、労働者にそれこそ見通されている。
だから、大部分の労働者に「組合なんて
……。」という不信感がでてくるわけで
す。

――うちでは、去年の十月に助士闘争の総括をやったわけだが、そこで執行部は反戦からものすごい突きあげをくった。それで執行部は「自己批判します。」と はつきりいって、大会はそれで集約されたわけです。それが、具体的にどうあらわれてくるかというと、指導方針の誤りを認めただけで、自己否定という問題など具体的には、まったく出てこない。助士闘争が終わったいま、うちでは完全に守勢に立たされている。いつ、どうやってか

大衆団交的に二百名が、三役とやりあつるんですが。五・三〇のときは、そなほどまでやつて、しかも展望まで含めてすべてを討論したにもかかわらず、更び、十・三一、十一、一では同じ轍を踏んでる。それには、「そういうグループはあっても、組織全体としてはそういう力量がないんだ」また、「総評にせよ、社会党にせよ、動力車労組を包んでかいいきるだけの力量がない。動労の効走になり、壊滅するんだ。」といわねをする。そして「今聞うことは、誤だ。」ということでおまかしてしまつ。それが職場では、ものすごく不満なわけですね。「自分たちは、実際にストライキをする力をもつてゐるし、実際に、自ら参加という形でストができるのに、指部はそれをさせないではないか。」といふに。

B ただね、期待できるのは、幹部の新陈代谢がそろそろはじまりかかっていることだね。

E そう、それに今の幹部が後継者を養成しなかったことは、唯一の業績だった。(一同笑い。「ヘタに、今の幹部の体质が続いたまんないよ」の声)

C 一般情勢というか、外部の情勢のほうが、早く進んでしまって、主体的な幹部なり組合なりの運動がすぐ遅れていて、しかも無自覚で、手練手管だけは、事欠かないほど経験をつんでやってきている。そういうわけだから、マスコミで問題となっているような産業政策・労資懇談会・長期賃金政策などが、当然のこととして、あまり組合内部で問題にならない。なにもかも、状況に押されてしまって、変な方向にむかって

はじめから「労働者に、今、何ができるか。」という次元で運動を考えればいいのだが、「総評がこうだから。」「社会がこうだから。」「今の労働運動一般がこうだから。」という、いかたしかできない。自分達を本来ささえていなければならぬ職場とは、違った次元で、運動というものを考えてしまう。これはうちだけのことではなく、総体としていえることだろうが――。

質的变化を迫られている状況なのに、それに気づかず、不信感をもたれていく幹部がほとんどです。今の労働運動では。

B ただね、期待できるのは、幹部の新陳代謝がそろそろはじまりかかっていることだね。

E そう、それに今幹部が後継者を養成しなかったことは、唯一の業績だった。二同笑い。「へたに、今の幹部の体質が続いちゃたまんないよ」の声

C 一般情勢というか、外部の情勢のほうが、早く進んでしまって、主体的な幹部なり組合なりの運動がすぐ遅れていて、しかも無自覚で、手練手管だけは、事欠かないほど経験をつんでやってきてる。そういうわけだから、マスコミレベルで問題となっているような産業政策などが、流れてしまって、変な方向にむかって

当然のこととして、あまり組合内部で問題にならない。なにもかも、状況に押し

いる。

B ■ そして、そういうことに批判的な活動の方もどうしたらいいのか、そういう状況をつきぬけていく展望と政策とそれにもとづいた行動形態を、今はもうばら模索している段階であって、まだ一つの力になりえていない、そういった情況なのではないでしょうか。一応、良心的な層も、原子力を利用した製鉄というようなことに資本の側が、とりくんんでいる時代に、心情主義・経験主義に頼って、太田さんに代表されるようなアジェンションの運動に終わっている。

だのといって、官公労中心の運動を行なってきたというわけです。ところが、その民間労組も、社会保障問題のように、政治的に解決しなければならない問題をかかえており、政治的あるいは経済的闘争をぬきにした組合運動というのは、で

幹部もいっしょに歩け！

F ■ いま、世をあげて情報化時代とさわがれていますけどね、その情報社会をさ

さえる技術が、労務管理に非常に多く使われているわけです。ですから、官公労における合理化も、民間における合理化

も、合理化をささえる価値としては一体あるわけですよ。労働者の悩みといふのは、合理化による、操業時間短縮とか、生産性の向上そして高賃金と、非常に、今までの労働運動は官公労中心である。これからは、民間中心の労働運動にしろ

といっていますが……。

A ■ そういう、亀裂はでてきてます。総評が、今まで官公労中心でやってきたというのは、たとえば、すぐなんでも国会闘争に結びつけるとか、政治的改良闘争——これは、国際労働運動でいう、政治的変革のための、権力をめざした政治闘争ではないんですけど——政治的・経

F ■ 全軍労の問題について、ちょっと。内情暴露的になるんですけど。総評は、全軍労が、第一波ストに突入したあと、はじめて、幹事会を開いて、全軍労のスト支援をどうするかを話しあったのですが、その中で去年の二・四のとき現地にいて、スト回避に動いたといわれる幹部が、こういう発言をしたのです。

「今度また、総評がストに介入して、新聞

にたたかれてはかなわないから、今度の全軍労闘争の收拾は、全部現地に一任する。」というのですね。私は、それを聞いて、ほんとになきなりましたね。

これは七〇年闘争へのかかわりかたにも

関係があるわけですが、そのような発言をする人物は、一体全軍労の闘争をどう

きるはずがないのです。だから、やはり企業内で労使がチンマリ話しあって仲良くなっているという傾向を、別の言葉でおきかえたものしか思えませんね。

だのです。なんの行動もともなわない評議委員会、単産の大会、総評の大会は、たしかに真剣な議論はしているけれど、なかなかやっていますね。そういう状況では、組合に対する信頼を取り戻すことは、できないのでしょうか。もの取りだけではないですか

民間単産と官公労の亀裂

編集部 ■ 総評の民間単産会議が、総評へ

の提言、というのを発表したなかで、いままでの労働運動は官公労中心である。これからは、民間中心の労働運動にしろ

といっていますが……。

E ■ 要するに、企業側の合理化の価値とか立場というのは、人間のためにではなく、資本の論理——いかに安く作り、そしてもうけるか——ことであるのにたいして、労働者のほうは、そのおこぼれと

見ているのか。だからあとは、総評は金を集めてやればいいんだ、みたいなことになるわけですよ。まったく無自覚と言ふか……。

E ■ 総評の発足以来の体質じゃないですか。たとえば、あの三池闘争の時だって

そうだった。あの時、労働者の戦う意志を押えたのはやっぱり幹部だった。「ホッパーで血が流れたら大変だ」という幹部の意識は変わらない。

A ■ 言いすぎかも知れないが、今の社会党にしろ、総評にしろ、民同にしろ、一つの解体状況が非常に進行していく、そのなかで右往左往しているので、ペ平連みたいに、大衆のなかに入つて行動するという切実感もないんですね。大変だ、大変だといつてゐるけど、さてどうするかと、いう段になると、たとえば、全軍労の上原委員長が、涙ながらに、きりぎりのところに追いつめられて、問題を処理しようと、しているような、あるいは、労働者が、ピケを守るためにヘルメットをかぶつて、棒をもつて、体を張つてぎりぎり



のところで闘争している、そういう切実感がない。本土の運動にも、戦後二十年代まではたしかにあったけど、最近の太平ムードとか昭和元禄とやらのなかでは、幹部も組合も、四ヶタとか五ヶタだとか体裁のいいことだけを論議している。

資本の側も、極限に挑戦するという勞務管理を徹底して進めている。そんななかで、労働者は、一人一人おいつめられて、自分なりの道を選んでいる。一番遅れているのは、幹部と組合です。繁榮にあぐらをかいて、するどい現状分析がないから「デモをやろう」といつても、だれも行こうかという気にさえならない。

中国の文化大革命でやつた下放運動とかいうのをやるべきですよ。幹部が、資本と組合の双方に恰好つけるような状況を打破するには、幹部が現場に入つて、いって、今のきびしい労働・合理化のなかで働いて、ことの本質をつかんで、再出発すればもうすこしなんとかなるんでしょうが、そうでないから、全軍労の闘争とむすびつけて闘つたわけです。その中で、「二万円で沖縄を売り渡すな」というスローガンをかかけたんです。つまり、人事院勧告実施の賃上げ闘争のなかに、沖縄の問題をとじこめるなというこ

争についても観念的にはわかっているが、本質的に理解した連帯の行動はとりえない。

「人間」という視点

E ■ 単純ないいいたをしますと、資本が繁榮しているのは事実なわけです。いまやっている経済闘争だけでは、分け前といふか、繁榮をわかちあつてはいるだけです。したがつて、組合全体が体制内化していくのは必然的なわけですよ。実際の現場では、資本の側は、意識まで丸抱えでやろうとしているわけです。そこで、それに気がついた部分が反戦の労働者になつていくんだろうと思うのです。うちの場合でも、意識ごとからめとられていくことに協力して、やはり手を汚してゐるわけです。

D ■ 去年の十一・十三闘争で、多くの組合ではこれを賃上げ闘争と考えていたみたのですが、日教組としては、沖縄奪還闘争とむすびつけて闘つたわけです。そ

ういう、これは書記がついた言葉であつて、末端で具體化されないんですね。賃上げだけでなくして、人間疎外というようなことを、これからテーマにする必要を感じます。

■ 読者懸賞応募者へのお詫び
創刊号で募集した懸賞賞品は多数よせられていましたが、編集部弱体のあまり、選考事務が停滞しています。できるだけ近い号で選考結果を発表したいと思つていていますのでご諒承ください。

のキッカケになるような気がするんです。そして、この闘争を進めてゆくためには、「自分達は加害者ではなかつたのか」というところまでいかなければならぬと確信しています。

A ■ わたしも、いまの意見に賛成だ。いまの、労働運動停滞の原因のひとつとして、「人間」という視点がなかつたことがあげられるのではないかと思います。戦後

の飢餓賃金といつて、とにかく食うんだということで、運動をやつてきた。今

の組合や幹部は、だから運動は、そういうものだと思いつこんでいるんですね。私はもっと、人間に目をむけるというか、集団の中の個を考える必要があると思

ますね。

去年あたり、総評も「人間性の回復」とか言つたんですが、これは書記がついた言葉であつて、末端で具體化されないんですね。賃上げだけでなくして、人間疎外というようなことを、これから

核兵器拡散防止条約の ねらい

No. 8 連載

アライ・スクエア・ディ・エクス・ディ・エクス

日本政府は二月三日から四日にかけて、ワシントン、モスクワ、ロンドンの三首都で核兵器拡散防止条約に調印した。政府は「調印と批准とは別」との態度のようだが、国会で一応の論議を経て、結局は批准されることは間違いないようである。条約は日本が批准するか否かに関係なく、三月初めごろに発効する見通しである。

条約の第九条第三項前半には、条約の批准書の寄託国と指定された国（注・米英ソ三国を指す）及びこの条約の署名国である他の四十国が批准し、かつ、その批准書を寄託した後に効力を生ずる、と定められており、三月上旬に、米英ソ三国の他に、四十数カ国が批准書の寄託を終えることは確実とみられるからである。

日本政府は、核兵器の拡散が全人類に惨害をもたらす核戦争の危険を著しく増大させるから、それを防ぐものだと広く説明している。核兵器国に対しても、その核兵器の管理権を他のものに引渡したり、非核兵器国が核兵器を作ったり、持ったりするよう援助しないことを約束させ、一方、非核兵器国が核兵器の管理権を譲受けたり、核兵器を製造したり、持ったり、あるいは、そのための援助を求めたりしないよう義務づけている。そのため、非核保有国が平和利用の原子力を核兵器に転用しないよう保障措置（査察）を講じることになつてい

る。

条約の名称は「核兵器拡散防止」あるいは「核兵器不拡散」と聞こえはいい。しかし、条文から明らかなように、核兵器国が、その核兵器を世界のどこにでも配備する自由は、いさかとも損われていない。核兵器の引き金を他人に触れさせなければいいだけだ。また、核兵器国が、その国とその平和利用の原子力を核兵器に転用することも、全く野放しにされている。つまり、条文中で核兵器の核軍縮努力をその国とその平和利用の原子力を核兵器に転用することも、全く野放しにされている。

条約の第九条第三項前半には、条約の批准書の寄託国と指定された国（注・米英ソ三国を指す）及びこの条約の署名国である他の四十国が批准し、かつ、その批准書を寄託した後に効力を生ずる、と定められており、三月上旬に、米英ソ三国の他に、四十数カ国が批准書の寄託を終えることは確実とみられるからである。

このことは、米英ソに次ぐ先進国で原子力産業が広範に実用化時代にはいるとみられている。七〇年代以降にますます大きな

この条約は、核兵器の拡散が全人類に惨害をもたらす核戦争の危険を著しく増大させるから、それを防ぐものだと広く説明している。核兵器国に対しても、その核兵器の管理権を他のものに引渡したり、非核兵器国が核兵器を作ったり、持ったりするよう援助しないことを約束させ、一方、非核兵器国が核兵器の管理権を譲受けたり、核兵器を製造したり、持ったり、あるいは、そのための援助を求めたりしないよう義務づけている。そのため、非核保有国が平和利用の原子力を核兵器に転用しないよう保障措置（査察）を講じることになつてい

る。

条約の名称は「核兵器拡散防止」あるいは「核兵器不拡散」と聞こえはいい。しかし、条文から明らかなように、核兵器国が、その核兵器を世界のどこにでも配備する自由は、いさかとも損われていない。核兵器の引き金を他人に触れさせなければいいだけだ。また、核兵器国が、その国とその平和利用の原子力を核兵器に転用することも、全く野放しにされている。

条約の第九条第三項前半には、条約の批准書の寄託国と指定された国（注・米英ソ三国を指す）及びこの条約の署名国である他の四十国が批准し、かつ、その批准書を寄託した後に効力を生ずる、と定められており、三月上旬に、米英ソ三国の他に、四十数カ国が批准書の寄託を終えることは確実とみられるからである。

このことは、米英ソに次ぐ先進国で原子力産業が広範に実用化時代にはいるとみられている。七〇年代以降にますます大きな

この条約は、核兵器の拡散がない、という理屈なのである。

さらに、条約の第九条第一項は「この条約は、署名のためすべての国に開放される」とし、

「この条約の適用上、核兵器国とは、一九六七年一月一日前に核兵器又は他の核爆発装置を製造し、かつ爆発させた国をい

う」（第九条第三項後半）と定

めているが、核兵器国五カ国のうち、中国とフランスは、この条約を無視しており、調印もし

ていなことは周知の通りであ

る。米英ソ三国は、条約作成

ス、特に中国が、この条約に加わることは見通していた。

むしろ、中国が加わらないこと

に、この条約の存在価値を認め

ている、というべきであろう。

米国とソ連は、中国が核大国化して両国とのギャップをせば

めないうちに、他の国々に核兵

器を持たせないようにし、同時に、米ソ体制下に組入れること

をもねらっているわけである。

西独や日本が、この条約に調印したことに対して、米ソ両国は、早晚批准することを前提にして歓迎したのは、米ソに次ぐ

大国である二国が、米ソ体制のワクからみ出さないことを表明したからである。

核兵器国が現在以上にふえた

「新しいステッカー」発売中



1枚—10円
15枚—100円
千葉県登戸町3の221
中島弘一

ゴルゴダの丘

そう

純白のウェディングドレス

お前も加害者

詰襟をたてたかけを

裳裾から消すことはできない

とりかわした愛を石のようにだいて

あのゴルゴダの丘を

今はお前が行け

血をのんだ百年の近代を

炉に焚く執行者のつららの腕に

たじろぐな

忘却の抒情を共有する

白いはたを

空せまく男はたてる

鎌を切る野草のしげみにも

逃走の小径はない

しとねに残した陶酔を他人にゆずり

かがめた腰に反撃をたばね

滑車のよう登るしかない

わきかえる球面に

二人は一人

擬制は

花束

墓にこぼれておちる

母はなく

母は男の弱点 たまらない

水爆をさしこんで涙をとめる無慈悲を

訴える島
語りつたえようとする努力に

背をむけて

お前は加害者

よせあつた唇の美しさに

首をかけよ

風穴のあいた服に石をつめこんで

若者は

どこででも死ぬ

肩にめりこんだ國のくびき

タイムカードの保証する日常を

確保して 金ももたずに

デモはどこへ行く

情緒ののろしは花火のよう

夜だけでもいい

秩序をまもるものは秩序を裁け

愛をだくものは愛を裁け

反抗するものは反抗を裁け

他人をふりむかず

コンクリートのなかの焦土をゲリラのよう

大陸の
けたはずれの機能と効率がここにはない

朝でさえおずおずとやつてくる

あかつきの処刑の埋れが吹きわたる風

長槍の交叉するゴルゴダの丘を

今はお前が行け

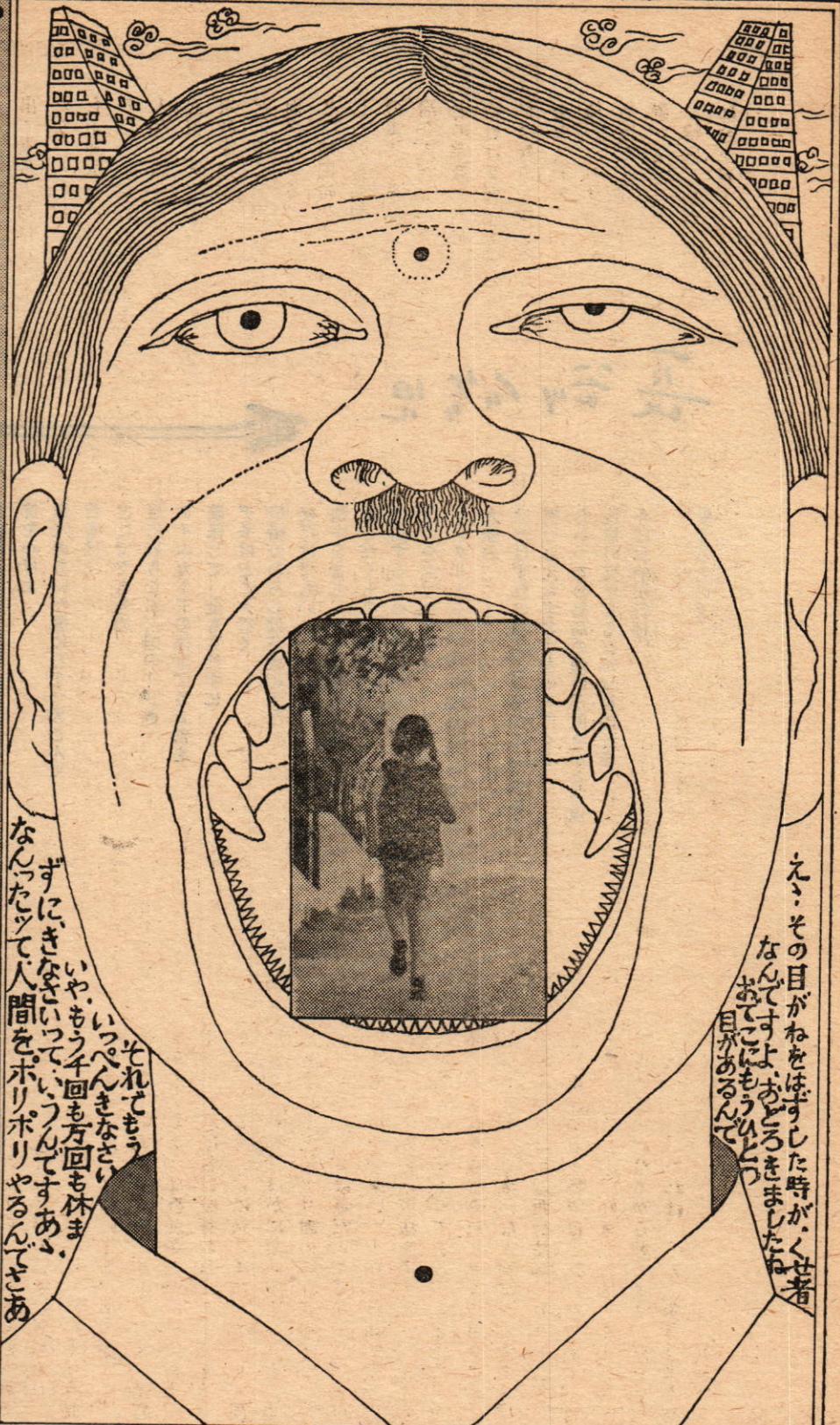
愛するものよ

死後修業

好きになるとどうことほの日記

栗津潔・画
深次七郎

それでもう
いつへんきなさい
いや、もう千回も方回も休ま
なんうたつて人間を、
ボリボリやるんでござ
まずに、きをいつて、いふんてすあ、



え、その目がねをはずした時が、くせ者
なんですよ、おどろきましたね
おでこにもうひとつ
目があるんですね

私には嫌いな人物は多いが好きな人物はほとんどわざかしかない。とくに日本歴史に出て来る人物はほとんど嫌いだ。まず、武将だが、これは、ナポレオンでもヒットラーでも土地欲と、権力欲で戦争をやったようなものだから武将とは土地の奪い合い喧嘩の商売人だと思っている。次に政治家だが、これも武将と同じようなものだと思っている。次に宗教家だが、これがまたとんでもない人たちだと思う。宗教家はまず自説を拡げながら建物をたてる。つまり儲かる商売のようである。戦国時代の一向宗など戦争と政治に介入したのも信仰と儲けがついて廻っていたからのようにある。現代でも新興宗教だと、政治介入だとか言われているようだが、それはどの宗教でも同じだと思う。どんな宗教でも始めは新興宗教のはずではないだろうか。私が宗教家が嫌いなのは儲けが上手なので建物をたてたり、時の権力家にとり入って権力を持つたりするからだ。そして武将だと、宗教家だとを歴史は偉人というような立場に置いてしまうからではないだろうか。

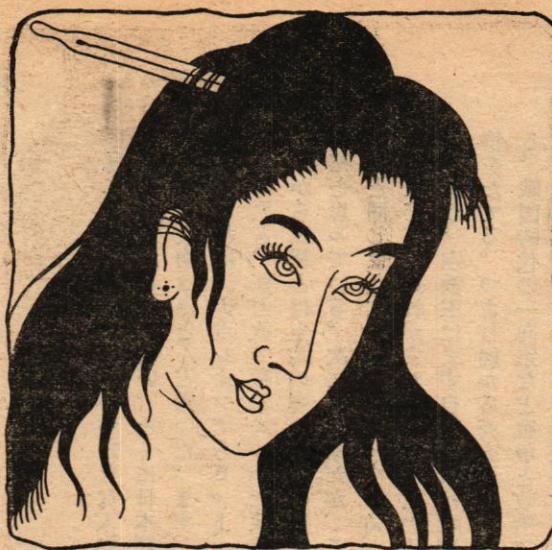
特に、私がよく感じるのは芸術家にも妙に金儲けの上手なのがいて、それらは商人の

ような儲け方法ではなく、威張つていて金を持つて来させるようなシステムで儲けるからである。これを私は「持つてこい偉人」と呼んでいる。例を茶道にとってみるとその方法が上手にできているのがわかる。おそらく、千利休が、そんなシステムに仕度をしたのだと思われるが、例えは、あなたが茶道を習うとしよう。行為をするには習わなければならぬからである。独学とか、本では習えない仕組になつていて。茶道は10年習いに行つても、本當には上手にはならないそうである。何故だろう。茶道は踊りの種類だから本當のわずかな身振りで、三味線の節で習えば1週間ぐらいで覚えることが出来るはずである。

ところが、茶道を習いに行くと、先生が、まず覚えられては困るという教えかたをしていられるのをおおかたの女性は気がつかないようである。1週間に1回で、1回しかやらない。だから次の週に行くときはほとんど忘れていい。本当にわずかな身振りだが、もし、覚えそうになる生徒があると先生は教えるのを止めてしまう。「今日は、お茶を立てる側ではなく、客になつたほうをやりましょう」そういうことになつて、そつちとませこぜになつ

て、無理にわからなくしてしまうのである。わずかの踊りの身振りなのだから、どうせ毎日習いに行くのだから、20回も30回も教えたらしいのである。3カ年ぐらいではまだ身振りの順序も覚えられない生徒があるそうである。先生は威張つていて叱りつけるような、馬鹿にするような教えかただそうである。中途で止めれば悪口を言われるそうである。一度入学するとへビに見込まれたカエルと同じだそうである。ほかに名をもらうとか、場所へ出されるとかで月謝のほかに金をださせる。中元だ、お歳暮だとか威張つていて「持つて来い持つて来い」という仕組になつていて。こんなうまい方法を考えた人、している人が偉人なのだろう。花を生ける、琴、三味線も威張られて金を出さされる。とにかく日本人で嫌いな人物ばかりである。歴史の人物では私は西行法師が好きだけである。現存する人物ではO氏だけである。言うこと、やること、好きになるとその人物や発声まで好きになるから妙である。好きになるということ、それは、その人物は芸術作品だと私は思う。

(おわり)





の青春を返せ！

安保条約の発効した直後、人民広場は血で塗られた。
18年つづけられたメーデー裁判は何を意味するのか

■被告席の黒枠の遺影

「判決をまたずに、十六人の被告がなくなられた。裁判所は、立場上、直接哀悼の意を表することはできなかつたが、そのつど人を介して弔意を伝えてきた。

いまこの法廷に、遺影を持ってきておられる。諸君の気持はわかるが、法廷では認められない。一方所にまとめて、安置しておいてもらえないだろうか。」

被告席は、傍聴席と同様、木のベンチに人がぎっしりとつまり、立って歩くこともままならなかつた。遺影をおさめた額は、被告たちの手から手へと渡り、最前列に集まり、白いフロシキに包まれ、これも満員の弁護団席の机の上に重ねられた。

法廷への遺影の持ちこみは、判決日の法廷の「運営」について、関係者との間で最後まで争点になつてゐた。裁判所は、（むろんのこと検事側も、法廷の「秩序維持」のために、遺影の持ちこみを禁

Kは、朝鮮人だった。失恋し、相手の女性を刺し、出刃ぼうちうで自殺した、と、当時の新聞は伝えている。その真偽をわたしは知らない。

告団とは、そういう「団体」であった。

野村正太郎、被告人は無罪、「S、被告人は無罪」、……浜口裁判長は、六十歳をいくつか過ぎ、裁判が始まつたころより髪が薄くなり、「無罪」を「ムザーリ」といくらか舌つたるく発音しながら、朗読をつづけた。被告は、立つたり坐つたりするスペースの余裕がない、ベンチに坐つたまま判決を聞いた。何人目かに、「懲役六月、執行猶予一年」の有罪が出、無罪と有罪の判決がまじりあって続き、四十何人目かに「罰金

止する、と通告してきた。被告団・弁護団は、持ちこみ禁止だけは絶対に認められない、と強く主張した。前日に折り合ひがついた。持ちこみは認め、言い渡しのときは片づける。

取りきめどおり、ことは進行した。わたしは被告席で、取りきめに従つて、遺影のひとつを受けとり、また前列に渡した。

Kの失恋の理由が、メーデー被告であることによるかどうか、確定はできなない。が、その恋人も朝鮮人であり、Kははじめた当時の状況からして、Kの恋愛の前途に暗いカゲがさしたことはあるえよう。

原因はどうあれKは死に、死んでから十数年の年月がたち、そして写真のなかのKはきれいな歯なみをみせて微笑し、いつまでも若かった。生きていればきようは三十五歳。そして、わたしをふくめ被告たちは、事件から一七年九ヵ月のきょう、すでに中年から老年の男女になつていた。

判決の言い渡しは、主文の朗読から始まつた。

■恣意的判決への怒り

野村正太郎、被告人は無罪、「S

、被告人は無罪」、……浜口裁判長

は、六十歳をいくつか過ぎ、裁判が始まつたころより髪が薄くなり、「無罪」を

「ムザーリ」といくらか舌つたるく発音

しながら、朗読をつづけた。被告は、立つたり坐つたりするスペースの余裕がない、ベンチに坐つたまま判決を聞いた。

何人目かに、「懲役六月、執行猶予一

年」の有罪が出、無罪と有罪の判決がま

じりあって続き、四十何人目かに「罰金

失われた18年

二千五百円」と裁判長が言つた。

被告席のかすかなざわめきのなかに、「あつ」と小さな叫びが聞きとれた。そのとき、この日の判決が「騒乱罪成立」を内容とすることを、わたしたち被告は知つたのだ。

刑法第一〇六条(騒じょうの罪)の三項に、「付和隨行」について規定があり、罰金二千五百円を科せられる、となつてゐる。その前に部分的に出た「有罪判決」が、別件の「公務執行妨害」や「傷害」によるものかもしれない、という感じをもたせたのに対し、たった二千五百円とはいゝ、それはこれから読みあげられるであろう判決の性格をはつきり示すものだった。

わたしの番が来、裁判長が「マサーア」といったが、そのときわたしのなかに、あららしい感じはなにもつかばなかつた。騒乱罪の部分的適用、それによる有罪と無罪の、ほとんど恣意的な染め分け、という判決全体の論理構造が、わたしの頭のなかに、くろぐろとした梓をつくっていた。

裁判長が、「事実の認定」から判決理由の要旨を読みすすむにつれて、法廷は騒然となつた。被告団は、事前に、「どんな判決が出ようとも、判決は最後まで整整然と聞く」ことを申しあわせていたのだが、わたしたちは、これまで十八年の

公判のなかでも幾度とは見せなかつた大声の抗議を、裁判官にむかつて投げつけずにはいられなかつた。

判決のなかで、裁判長はメーデー事件をふたつの段階に分け、二重橋前警官隊とデモ隊の第一回目の衝突を警官の「違法」な実力行使が発端になつたもの

として「騒乱不成立」を、そのあと、人民広場のなかでの第二回の衝突を、おなじく警官隊の実力行使を発端とみとめながらも、こちらは「適法」だったとして「騒乱の発生、成立」をみとめた。

「一がなければ二がない」と、無罪判決をうけた被告の丸山昇は、二日後の

「赤旗」に書いた。裁判官が、十七年九月といううながいながい公判の結果、「違法」と言いきつた(判決文の表

現はあまり歯ざれのよいものではない。

が)武装警官隊の実力行使がなければ、メーデー事件は存在しなかつた。政府が使用を禁止した人民広場に行進したデモ隊は、広場にはいるというその日の唯一無二の目的をはたして、やがて解散しただろう。

警棒による無警告、無差別の殴打、催涙ガス、ピストルの発射という警官の挑発によってデモ隊に多数の負傷者が出て、それにありあわせのプラカードや旗竿で抵抗したのが、メーデー事件のはじまりだった。そのようにして警官隊に蹴ちらんなどと聞くことも、判決は最後まで整整然と聞くことを申しあわせていたのだが、わたしたちは、これまで十八年のたたび警官隊の、第一回目にもまして強力な実力行使が加えられた。「このとき騒乱が成立した」と判決はいうのだ。そこのあと憤激したデモ隊によって米軍の自動車や警察の白バイが燃やされた。

■、無罪、で消し去れぬ十八年

あわせて、デモ隊があのメーデーの日人民広場にはいることが、集会やデモ行進の自由という憲法上の基本的な人権のあらわれであることも論証した、つむりでいた。

わたしたちは、事実をくまなく明らかにしたつもりでいた。が、本来はひとつものである事実が、事実を見る目によってはしままで着色されうること、その底にイデオロギーというものが横たわっていることを、この判決の日にしたか思い知らされたのだ。

裁判官のイデオロギーはなんだったか。それは、「人民は愚マイなものであり、大勢が集まると、群衆心理といふものにかられて、集団として乱暴ロウゼキを働くものだ」という人民観・大衆運動観にほかなりない。だから、あれだけの「さわぎ」があつた以上、「そのコトのよってきたたるゆえんは別として、民衆のなにに犯罪者がいなければならぬへ、違法」な実力行使による警官隊の犯罪は、ピストルの乱射による殺人をふくめて、長い裁判のあいだに、都合よく「時効」になっている。

長い裁判のあいだ、あの事件の加害者は加害者でありつづけ、被害者は依然として被害者でありつづけた。わたしは事件当時、十九歳の学生であり、被告ではなかつた。十九歳から三十七歳までの十八年間にについて、書くべきことをわ

しは山ほどもつていて、「無罪」という事務的なひとことで消し去ることのできない重いとしつきについて、わたしはいつか書くだろう。

わたしひとりの年月ではない。わたしは「被告」でなくなる日をむなしく待ちつづけ、数年前に死んだ父について、年老いて、十七年前わたしが獄中にいたころの心労をくり返し何度も話しやめない母について、わたしの妻とその家族たちについて、いまはわたしが被告であることをまだ知らずに成長しつつある子どもについて、かれが父親のことを探るところをまだ知らう日について。

それだけではない。被告のまま死んだKについて、幾人かの死んだ被告について、有罪と無罪の被告たちについて、家族たちについて、この十七年あまり、わたしの周囲について、被告としてのわたしになにがしかの関係をもちつづけている

数多くの人たちについて、そしておそらく、裁判官や検事たちについても、わたしは書くだろう。

が、いま、わたしにはそれを書くことができない。いまの生活を変えることなしに、書くことによる危険に身をさらす

ことが、わたしにはできない。げんにわたしは、このメモを発表するとき、本名をすることをあえてしないでいる。

それに、わたしは、被害者の地位にだけ甘えて、めんめんと被害を数えたてることを、いまはやりたくない。一九五〇年の加害者が、一九六〇年も、一九七〇年のいまも、いつまでも加害者でありつづけるような体制をこそ、告発し変革することが、まずわたしのペンの仕事でなければならないはずだ。

■通俗判決を告発する

その立場から、わたしはまず、メーデー事件一審判決の底にある思想をとりあげておきたい。

一見、判決は「大岡裁き」のようにみえる。警官の「違法」を半分だけ認め、つまり被告の半分を無罪にして、あと半分は検事の顔を立てて「騒乱成立」、「有罪」にし、長すぎる裁判にたいする批判への言いわけとしては、有罪論告に執行猶予をつける。ケンカ両成敗、というつもりで裁判官はいるかもしれない。

が、そういう俗物的な考え方、そもそも邪悪だといわねばならない。判決の論理、とくに「騒乱成立」の部分の論理は、「警察官が民衆になぐりかかってきても、おとなしくなぐられていた。抵抗すれば犯罪になる」ということだ。悪しきものに手むかうな。右の頬をうたれたら、左の頬をも向けよ。新聞報道にもあつたように、検察側や警察が判決に安どの色をかくさなかつたのも、当然のことだ。

判決は、検察官とほとんど同じ用語と同じ論理を、ほんの少し時間をすらして、事件の後半にそつくりあてはめたにすぎないのである。

折衷主義が、被告の半分を無罪に、半分を有罪にした。当日のデモ隊の構成から、無罪の部分に学生=いまは知識人が比較的多く(大学助教授の丸山昇、パリ在住の彫刻家大谷文男、たちがそれだ)有罪の部分に自由労働者や在日朝鮮人が

多くかたよつてゐる。裁判官のサジ加減は、ここまでくると、階級的、民族的偏見の色あいさえおびてゐる。いまはもうけつして若くも元気旺盛でもない被告たちが、判決の日、無罪の者も有罪の者もほとんど紹立ちで、裁判官に怒声をあげたのは、こうした偏見が判決をつらぬく思想であることを、ほとんどハダで感じとつたからであった。

事実のもつ重みに対し、判決はけつしてまじめに対処していない。たとえば、メーデー事件の第一の犠牲者である近藤巨士（当時法政大の学生）について、警官になぐられて倒れている学友を助けおこそうとしている途中、警官に後頭部をなぐられて頭がイ骨陥没骨折の重傷をうけ、それが数日後の死をもたらした「事実」を認定している。第二の犠牲者、高橋正夫（当時、東京都庁の職員）については、すでに（裁判官によれば）「騒乱」が成立したあと、警察官の発射した拳銃弾によつて、背後から心臓を貫通する銃創をうけ、即死した、と「事実」の経過をのべてゐる。

だれが負うべきなのか。二人の生命が失

われた、という事実について、判決はけつしてそれ以上の責任追及をしようとはしない。

被告のまま死んだ十六人に対して、判決の前に、ひそかに「哀悼」の意を示しながらも、判決文のなかでは「長期の裁判によって被告の人権が侵害され、憲法第三十七条の「公開の法廷で公正かつ迅速な裁判を受ける権利」を侵害したとは考えない」と言いえる、その論理というか非論理と、同じ足場に立つ判断だ。

とくに高橋正夫の死に関しては、拳銃発射を「警察職員の正当な職務執行」の範囲に含めている。（同じ一月二十八日、高橋正夫の両親が提起した賠償請求の民事訴訟が、東京地裁の民事部で、勝訴の判決をえた。こちらは、刑のほうとはちがつて、警察官の職務執行の行きすぎを認め、賠償を命じてゐる）

■被告団は決して解散しない

「メーデー事件被告団」のことを、後に記しておかねばならない。被告団は、判決の夜、総会を開いた。百四十八人の被告が集まつた。そこで申しあわせた第一のことは、「有罪の者も、無罪の者も、今までとおなじように、被告団の組織のなかにとどまり、一緒にやってゆこう」ということだつた。

数万をかぞえたあの日の人民広場での

メーデー裁判官の主觀のなかでの「大岡裁き」は、たとえば人間が死ぬ、殺される、といった事実に対して、けつして正面から立ちむかおうとはしていらない。その精神はいかげんであり、その精神は腐っている。そして、その腐臭は、じつは、日本の裁判制度が、権力機構から独立しておらず、むしろそれに従属していること、裁判官の思想が、この判決のはしばしからわたしが抽出したように、根ぶかい人間ベック視につらぬかれた、俗物的であると同時に特權的、階級的なものであるところに、その発生の根源をもつ、とわたしは考える。言いかえれば、日本の裁判制度の腐敗を、そのまま反映したものにすぎない。

わたしたち被告は、しかし、そういう裁判制度に手足をからめられている。有罪になつた被告たちは、裁判制度の論理に従つて、上級審に控訴せざるをえないし、高裁の段階で、「騒乱罪」の抹殺のためにたたかうことになる。ふたたび、

長く、苦しいたたかいではある。



マスコミの上から、もうほど
んど姿を消してしまったかに見
える「金嬉老事件」は、何を意
味しているのか。「金嬉老事件」
は、過去の出来事ではない。
くり返し現在に意味を問いか
けてくる問題としてある。

「田村孟」あの豊饒さです。
(朝鮮研究七四号)
いうか……。

金嬉老が、寸又峠にたてこも
つたのは、六八年の二月二〇日
である。以来もう二年の月日が
たつ。
山荘にきずいた彼のバリケー
ドは、四日目に破れた。静岡市
郊外の拘置所の壁のむこうに、
いま彼はいる。△監禁▽された
彼の、そしてまた△監禁▽され
たわれわれの、日常的な時間か
らみれば、寸又峠の四日間は、
幻影のなかで一瞬なりたつた祭
りのごときものであろう。

金嬉老が、寸又峠の四
日間とは何であつたか、という
問いは、しかし私たちのまえに
のこされている。その問い合わせ
らしだすのは、私たちの日常性
のかくされたふかみであり、だ
から寸又峠の四日間は、私たち
にとって、いまだ過去の出来事
ではないのかね

■出きあいの言葉
「金嬉老か。あいつは氣狂い
ではないのかね」

ある刑事がいった。
「なにさ、殺人犯のくせに！」
バス会社につとめる女の子が
いった。

ながら、そこで提起されたもん
回をむかえた。公判にかかわり
事物には、いつも名まえがは

きりぎりの姿が、山荘に居あ
りついていて、その名まえであ
り、といっているのではありませ
ん。ただ、あのエネルギーと
いうか……。

なにが・その後・どうなつたか(6)

「金嬉老事件」その後



■金嬉老は金嬉老か

すでに彼、金嬉老じん
が、なんとも名づけようのない
存在である。彼は七つの名をも
ち、だれも(彼自身も)、どれ
がほんとうの名であるかを、知
らない。人定の段階で、まず裁
判はアボリアにぶつかった。さ
ばかれているのが、そもそも何
ものであるのか、と弁護団はせ

だいをさらにふかめるために、
公判対策委員会が組織されて
いる。今月の二十一日(土)に
は、集会△金嬉老事件から二
年▽をひらいて、今までに浮き
ぼりにされた問題点と、これか
らの運動のすすめ方を、洗いざ
らい討論する予定である。

公判闘争のなかすでに提起
されているおびただしい問題
を、この場所にかきつくすこと
は、いずれにしても不可能な
だから。

だ。できあいの名まえは、事物
をかくすばかりだ。寸又峠は、
ダム工事に集まつてくる、季節
労働者の吹きだまりの村であ
る。ある夜、そこに一人の男が
やってくる。死ぬまえに俺はや
つらと対決したいと、その男は
いう。俺の心を、ズタズタにし
た、あの警察のやつらと。男
は、朝鮮人である自分の身の上
をかたり、それゆえに受けた屈
辱をかたり、どうしても許せな
い一人の刑事の名を口にする。
死とひきかえに、自分の誇りを
とりもどそうとする一人の男の

実を△該当▽させ、あとは相応
の刑をきめるのが△裁判▽の定
石であろう。名づけることによ
る事実の陰蔽は、しかし法曹に
固有のことではあるまい。金嬉
老公判にたいする異議申立て
は、法の秩序の言葉の呪縛から、
事物をときはなつための日常的
なたたかいの、その一つの集約

めながら、しかし何か彼と其感
するものが人々のあいだに流れ
とらえはじめる。不安にはりつ
ちは、出来事から目をふさぐの
だ。できあいの名まえは、事物
をかくすばかりだ。寸又峠は、
ダム工事に集まつてくる、季節
労働者の吹きだまりの村であ
る。ある夜、そこに一人の男が
やってくる。死ぬまえに俺はや
つらと対決したいと、その男は
いう。俺の心を、ズタズタにし
た、あの警察のやつらと。男
は、朝鮮人である自分の身の上
をかたり、それゆえに受けた屈
辱をかたり、どうしても許せな
い一人の刑事の名を口にする。
死とひきかえに、自分の誇りを
とりもどそうとする一人の男の

りついていて、その名まえであ
みあげた秩序のなかに、私たち
は生きている。私たちは、金嬉
老を△殺人犯▽とよぶ。そ

せた人々の心を、しだいに深く
するものが人々のあいだに流れ
とらえはじめる。不安にはりつ
て、それはある濃密な空気と
なって人々を結ぶのだ。マスコ
ミは、居あわせた十三人を△人
質▽とよんだ。山荘になりたつ
た、このコンミューングまがいの
空間は、法的言語によつて△監
禁▽と名づけられ、金嬉老の行
為は、いま、さばきに付せられ
ている。できあいの言葉に、事

まり、検事も、また裁判官も、そして弁護人じしんも、その間に十全にこたえる術を知らないのだ。そこにいる彼は、朝鮮人クオンヒローであろうか。日本人岡安宏であろうか。それとも、起訴状にしてされた、金岡安宏こと金嬉老であろうか。そんな名をつけたおぼえはない、母親はいう。「金嬉老といふ名まえで日本国家は彼を呼ぶわけだけれども、金嬉老と呼ばれた当人は、日本の法の枠内におさまりきれない存在だ。どんな名称でも彼の存在をとらえることはできない。国家がそれにピッタリした名称をつくりだせないような、一種の怪物になっちゃっている。そのことが非常に重要だ。あいつはこういう人間だ、あいつのやったことは、こういうことだ、と簡単に規定できない。この状態を徹底的に追及してみる、という意味で、ぼくは今日の弁護団のやり方に非常に賛成だ」（六八年十月二日公判報告会での一出席者の発言）

日本国家によって名前を奪われた一人の外国人として、彼は今、日本国家の法廷にたつてゐる。検事は彼を金嬉老とよぶ。キンキローとは、しかし日本社会が彼に「与えた」日本名で、金嬉老の名において彼をかねてみれば、その名によって自分を証しだてるところができない、隸者の符牒などがない。だから、彼の本籍もまた、独立国としての朝鮮ではない。起訴状に記載された責任が影をおとしている。

民衆弁護人名

「いちど敵の手におちてしまつた以上、その敵の手でおこなわれる△裁判▽で、どれだけの鬭いが、できるというのか。法廷でたたかえられたかうほど、彼のたたかいの本質は、寸又峠とは別なものに変質していくのを、私たちは受けたきだし、それを否定しうるほどの確信は、私にはない。しかし、金嬉老との関係においては、私たちはむしろ△敵▽の一人である故に、日本国家の法廷は、私たちがおかれている日々の現実にほかなりない。そこを支配する論理は、私たちの△常識▽に、あまりにも親しい。その△常識▽が彼のさばきに適用されるとき、私たちが、そのなかで思考し、認識し、平然とさばき、あるいはたたかう、そうした日常的な世界の、一つの儀式化された姿

にほかならない。法廷は、のりこえるべき対象として、私たちを、とりかこんでいる。法廷は、それがまさに権力による欺瞞の場であるがゆえに、私たちがそこでたたかうべき状況そのものであるのだ。

公判は、いま二〇回をむかえた。仮に裁判が、型のとおり、惰性的にすすめられれば、事件の根源にあるものを追究するという弁護団の当初の意図は、まったくの幻想におわる。そうはさせまい。そうはさせない布石として、弁護団は、まず裁判のありかたを問うた。対決点は二つあった。一つは、特別弁護人の採用であり、もう一つは、いかなる立証計画のもとで審理をすすめるか、という問題である。ただし、私たちは、特別弁護人といふ言葉をいわずに民衆弁護人といふ。弁護が職業としておこなわれている現状こそが、むしろ△特別▽なのだ。法曹一体といふ言式を、この裁判ではうち破る。われ、裁判官、検事、弁護士が、同じ穴のムジナとして△裁判▽の進行に協力しあうという法曹の「専門家」だけでは手にえぬ、ある深さとひろがりをもつ裁判であることを、裁判所

は詠めさせることは争いではない。つまりは裁判の性格にかかるわる争いで、あつた。単純に一刑事案件として審理をすすめるつもりであつた裁判所は、頑固にこれを拒否、弁護人の退席などで何度も暗礁に乗りあげながら、昨年七月、約一年がかりで金達寿、岡村昭彦、佐藤勝己の三人が、ようやく民衆弁護人として認められるにいたつた。法曹の枠のなかにのめりこみやすい弁護活動を、たえず自己批判する思想的な契機として、このたたかいはこれからもつづしていくだろう。

（東京・渋谷区千駄ヶ谷五一一五
一九 T e L 三四一四三二六）
からほぼ毎月、ニュースが発行
されている。いま出ているのは
第十三号。どの号も百円。その
他、三一書房から「金嬉老の法
廷陳述」が今、発売中。よろ

安保 フンサイへ・人間の渇養を！

盛田書店

反権力の思想と行動

鶴見良行著

B6 美装 / ¥680

新しいインテナシヨナリズムの立場からとらえたアメリカ新左翼の動向と支配体制の分析、日本の反戦市民運動の渦中で刻々の運動の要請に応じて書かれた思想的論文と運動論、そして市民社会の日常的ななかに鋭いメスをふるった時論など、運動の現場から行動を通じて形成された、著者の反権力と反戦の思想的成果のすべてが、この一巻に収められている。待望久しい最初の評論集！

この本にはさまざまな問題がみごとに書き込まれていて、そしてその書き込まれ方がじつに面白い。鶴見さんはべ平連の運動の積極的な推進者だが、この本は運動の中から生まれて来たもつともすばらしい思想のいとまみの一つだ、と私は思う。

小田一実

歴史としての スター・リン時代

菊地昌典著

¥860

マルクス主義の 哲学と人間

竹内良知著

¥870

科学と哲学

花崎泰平著

¥980

ナシヨナリズム論

津田道夫著

¥950

マルクス経済学

全2冊

■資本論 帝国主義論 現代資本主義

岩田 弘著 上900 / 下950

国家論の復権

■政治構造としてのスター・リニズムの解明

津田道夫著

¥880

現代革命論への模索

■新左翼革命論の構築のために

B6 美装 / 3月下旬刊

エンゲルス論

■その思想形成過程

廣松 渉著

¥1200

表現主義論争

ルカーチ ブロッホ ゼーガース
池田浩士編訳

¥1300

反戦市民運動

■べ平連とともに

B6 美装 / 4月下旬刊

サルトル哲学序説

竹内芳郎著

¥980

文化と革命

竹内芳郎著

¥820

社会倫理思想史

■ホーリーからサルトルまで

¥700

現代民主主義教育論

横田三郎著

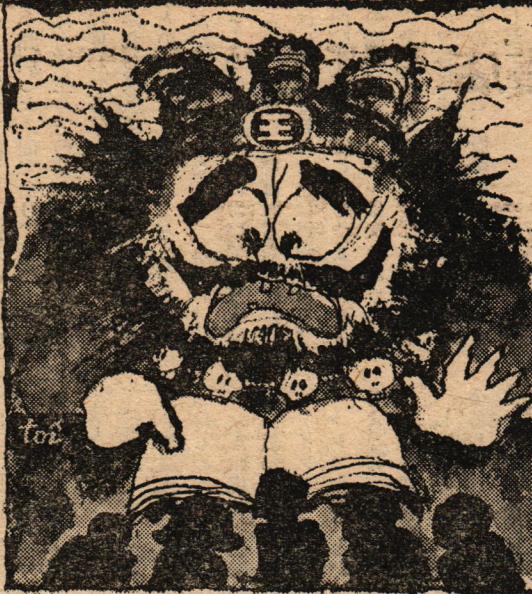
¥900

五年間にわたるべ平連運動の歴史は、六〇年型市民運動から七〇年代の新しい反戦主体が生まれて転換期を身をもつて示した。べ平連の事務局長としてこの歴史を運動と共に歩んだ著者の、行動者としての証言がここに凝縮されている。

山本晴義著

¥700

まことによつて くるつくる



春は名のみの風の寒さや、
谷のウグイス歌は想えど、時
にあらずと声もたてず。

※一九七〇年一月
ノ東京ハ
異常乾燥
デアルタメ、乾き切ッテ死ン
デシマウ人間モアルラシク、
東京砂漠、ノ死者ハ著シ
ク多ク、焼場ハ繁昌シタ。乾

イタ人体ハ燃エルノモ早ク、火
葬ガマノ回転率ハ、運ビコマレ
ル死体数ノ割ニハ、隠亡ガビッ
クリスルホド早カッタ。乾燥ニ
ヨル病死、自然死ノ他ニ、異常
デアツタ。人体ノ大方ハ水分
意味デ、T・S・エリオットサ
ンノ書ク「四月はいちばん無情
な月」ノ無情ハ、ワガ日本國ノ
ナ死ガ目立ッタ月デアリ、ソノ

スルコトガ、七〇年代ノ生存競
争デアリ、ソレニ敗レタト考エ
テ自殺シタナドトハ、トテモ考
エラレナイケレド、モシ、ホン
ノ少シデモソウダントシタラ、ヤ
ハリ、げばげばなんせんすこま
つた人トシカイイヨウガナイ
ソウニナイト思ッタラ、らじか
る二大学教育ヲ考エタ結果、受

代檜山ハコソナ形デ進ゾディル
ノカモシレヌ。「おじいちゃん
ハ、台所デ上半身黒コゲニナッ
テ死ンデイルノヲ実ノオッ母サ
ンニ発見サレタ。コレモのいろ
一ゼギミダッタソウデアルガ、
居間カラ「別レルカ死ヌカトイ
ワレテ死ヲ選ブ」トイウ内容ノ
ギュキ、ヤレ二月トナツタラ、
コレマタ残忍ナ月。一族六人殺
ス管ヲ引キ出し、ガスノ炎デ衣
服ニ火ヲツケ自殺ヲハカッタモ
ノ。E子サンハ、マダ三十七歳、
シソウダトイ。ソンナニあめ
命ハグントノビテイルカラ、
りかノマネバカリスルコトナイ

世コースに乗ッテイタノニ、何
ヲ好キコノンデカ、中途退学シ
タッテナおじさまモイッパイイ
ル。M君ハスゴクリありすとダ
ンテクソクラエダッタノダ。背ノフ
シタノカモシレナイ。一九七〇
年代ノ生存競争ヲ、東大入試ニ
カケタノガカラ、変革ノ可能性
ナントクソクラエダッタノダ。背ノフ
シトバカリ東大生ガ騒イダッ
テ、何モ変リハシナイト思イコ
ンデシマツタノダ。思考ガ飛躍
セズ、窓ガラだいびんぐシチャ
ッタノハ、まことにモッテ、く
るうえる。

※主婦の場合……会社員Tサン

ノ妻E子サン

ハ、台所デ上半身黒コゲニナッ

テ死ンデイルノヲ実ノオッ母サ

ンニ発見サレタ。コレモのいろ

一ゼギミダッタソウデアルガ、
居間カラ「別レルカ死ヌカトイ
ワレテ死ヲ選ブ」トイウ内容ノ
ギュキ、ヤレ二月トナツタラ、
コレマタ残忍ナ月。一族六人殺
ス管ヲ引キ出し、ガスノ炎デ衣
服ニ火ヲツケ自殺ヲハカッタモ
ノ。E子サンハ、マダ三十七歳、
シソウダトイ。ソンナニあめ
命ハグントノビテイルカラ、
りかノマネバカリスルコトナイ

相次ギ、アメリカ型犯罪ガ増加

ガ、つまらぬ夫一匹ニ命ヲアズ

テミレバ、大学ヲ主体的ニ拒否

シタリ、ずっこけチャッタリ、

は人夫といわないので不公平だ

けど)ガゴマントイルノダ。ま

なんとなく受験シナカッタリ、
セツカク優秀ナ成績デ入り、出

ことにモッテ、くるうえる。

※老人の場合……寒イ冷タイク

シタリ、サイ隅田川、

ボート場カラフロシキ包ミヲ背

負ッタ老人ガ飛込ンダ。背ノフ

シキハ、真新シイサラシヲ縫

イ合ワセタモノデ、約二十キロ

ノ墓石ノヨウナこんくりーとヲ

包ンデアッタ。七十歳クライ。

ヒゲヲキレイニソリ、ラクダノ

ドヒラキナオラナイマデモ、現

人ハマスマス増エルノデアル。

ヒゲヲキレイニソリ、ラクダノ

ドヒラキナオラナイマデモ、現

度成長ノ日本ノ老人問題ハナ

ドヒラキナオラナイマデモ、現

ラッセルと日本 市井三郎

1

パートランド・ラッセルがこのほど逝去了した。たまたまぼくは、かれの本をいく冊か邦訳した人間であり、かれのもの考え方や生き方の基本姿勢について、ある程度わかる気がしている。ここでは、かれの反戦運動の態度が、われわれ日本人のそれとくらべて、どこがちがつていたかということを考えてみたい。

日本人のそれとくらべて、どこがちがつていたかということを考えてみたい。スターリンの統治下において、基本的人権（と、西欧側で呼ばれるもの）が、大はばに抑圧されたことは周知である。一九四〇年代の終りころ、つまりスターリンの晩年に、ラッセルは次のような意味の言葉をたしかに公表した。「スター

リーンのソ連によって征服されるくらいなら、そのソ連と、原爆戦争をやる方がまだましだ」と。

この言葉は、いわゆるスターリニズムへの嫌悪をレトリカル（修辞的）に表明

した言葉だったのだが、ジャーナリズムの上では、「ラッセル予防戦争を主張す」などと、さわぎ立てられたものだ。そのようにとられても仕方がない言葉を公表した以上、その種の曲解にかれはムキに

なって弁明しようとはしなかった。当

時の冷戦の雰囲気のなかで、一九五〇年にラッセルにノーベル文学賞などが授与された事実は、ノーベル賞にも「政治的配慮」が入ることを皮肉にも証拠だてた出来事だった、と今では明瞭にいうことができよう。

だがB・ラッセルは、あくまで背骨の強い経験主義者であった。一九五〇年代のはじめに、太平洋上でアメリカが行なった水素爆弾の実験結果を知ると、かれは決然たる行動を開始した。「ラッセル・AINシュタイン声明」とか「パグウオッシュ会議」といった名で知られるように、核兵器廃棄運動を国際的にはじめたのである。

しかもB・ラッセルがこの時期以降に公言した言葉を、ぼくは重視したいのだ。イギリス国民に対して、かれは次のように、いわゆるスターリニズム

よって、たとえソ連に征服されるよう

たのである。

「イギリスが核兵器を廃棄することに、かし人間が、自己の誤まりに気づいたときによる態度によって、その人間の真骨頂が明らかになるのではないか」と。アーヴィングの「解放の闘士であった黒人F・ファンも、いま生きておれば、同様のことばでラッセルに哀悼をささげるだろうと思う」。

イギリスの若い世代は、ラッセルのこの知的誠実性に感心した。ひるがえって日本では、非武装中立の声はラッセルよ

り早く起つていて、核兵器廃棄運動も、ヒロシマ・ナガサキの体験にもとづいて、ラッセルより早く起つたのは確認しておいていい。

だが、日本のいわゆる革新系知識人は、パートランド・ラッセルほどの知的徹底性を示したであろうか。本質洞察とかによって、「社会主義諸国は平和勢力である」と規定し、当の社会主義諸国のかいだに、武力が行使される現実（ハンガリー事件）にろばいしたのではなかつたか。そのとき、なお何らかのリクツによって「社会主義国」相互の武力行使を正当化した人々も、十数年後のチャーチコ事件にさいしては、多く態度を改めざるをえなかつたのではないか。

人間は神ではない。だから誤まりは、もちろん避けることはできないのだ。しかし人間が、自己の誤まりに気づいたときによる態度によって、その人間の真骨頂が明らかになるのではないか」と。

ことはいわゞもがな。そのように生死をはねのけることができるのだから」と。

かけて闘っている人間が、この地上にまだいく千萬もいることを知つていなが

ら、何であれ戦争なんかは、ゴメンだ、といふに近い論理（と心情）だけで、事に処しうるのであるう。

2

厭戦心情をもすく上げて反戦運動へ集結する、といわれるような主張に反対しているのではない。本気で普遍的な反戦をとなえるのであれば、自國が軍事的征服にさらされたときにも、戦争よりは征服されることをえらぶ、という徹底

た論理的帰結を公言する用意があるのか、という基本姿勢を問うのである。ラッセルの死にさいして、ラッセルに美言を呈することはやさしい。だがラッセルの生きかた——百歳近い老年にいたるまで、かれが貫徹した生きかた——がわれわれに深いところで問いかけてくるものを、各自の内奥でかみしめることこそが、かれの死に対するもつとも人間的な弔らいであろう。



高校生のひろば

あなたがたが処分闘争を貫徹されることを希みます。自分はなにもしないくせにと思うでしよう？ 私もそう思います。理解してくれとはいいません、ただ許してほしい（往復書簡より）

都立立川高校の生徒たちにとつて一九七〇年の夜明けは、悪夢とともに始まった。十二月三十一日、四名の退学処分（大晦日の深夜、処分通告の呼び出し電話）。二十四名「無期停学」（桐嶋一確約書）処分。

右に引用したのは、ノンボリ、生徒から、退学処分を受けた一人、古川杏子さんへ宛てた手紙の一節だ。次ページに、その全文と、古川さんから彼女へ宛てた返事を掲載した。

去年の10・21から11・25までの立川高校闘争の経過は、「週刊

アンポ」第四号。高校生のひろば、を読んでいただきたい。その後、生徒会長が辞職した。

（どの高校でも、生徒有志が質問状なり要求なりを出したとき、学校側は「非合法団体だから」という理由で取り合わない。そ

のホンネは——立川高校では生徒会での大衆的な支持があったにもかかわらず、「執行部は一部の生徒の代弁者になっている」

という理由でつき離された）さらに中央委員会は議長をリコールし、自ら解体を決議した。そして収拾策としての会長選挙は大衆的な阻止行動で一日延期され、結局全校生徒の四分の一そこの投票率で強行された。

学校当局は最後の切り札として処分を持ち出したのだ。しかし、冬休み明けの一月八日から再び闘いは始まった。連日の校門前ビラまき、それを阻止しようとする教師たち、私服刑事たち。（腕をねじる、地面や壁にたたきつける——ヘルメットは必需品——なぐる、ける、服を破る）ことはもとより、門の内側にはテレビカメラがすえられ



古川さん、お元気ですか——こんな空々しいことは書きたくはないけれど、悲しいかな私にはこの際、他に適切な言葉が思い浮かばないのです。それに實際お元気かどうか心配なのです。今週の月曜日から一度もあなたの方の姿をみないし、他の人たちも門前でみかけないようだから。あんずちゃん——あなたはこう呼ばれてだれからも親しまれていた。今だって、あなたのことを話すとき白々しくも古川さんという人は滅多にいません。私は貴女と直接、あまりおつきあいしたこと�이ありませんが、でも一、二年同じクラスで時々お話しをしましたね。私にどうてあなたはしつかりしていく、その考え方には、とてもついてゆけないような気がしていました。仲よくお話しもした代りに、ずいぶん貧弱で（私がですよ）力量の不均衡な論争もしました。私はそのたびに、自分の不勉強を自覚させられましたが。

されるべき運動についての何半だったからです。(私がその見解ももちあわさない人が思つた人の多くは後の民青の方にさえなりました)また、二十一日以降のバリケードストライキにも反対でした。主旨がよくわからなかつたし「解放バリ」という閉鎖状態の矛盾を感じからです。でも、二十四日リの中からやつてきたあなたに一寸お話しをして、私は少くとも貴の方の主張のごく皮相な面を理解できたと思いました。そして、それまでもつていただけの中の矛盾、今までの秩序を肯定すべきだという義務感と、全ての抑圧を排撃すべきだという権利意識の萌芽を整理し、家族や教師や目上の組織全てに対する義務を廃する方向にすすむと、いう決心をすることができますた。あのところから私は、今までの教師に対する「できない」樟葉先生「のわくを脱しようと試みはじめましたので、双方に急に反抗的になつたとみられたらしく、教師からは生れてはじめていやらしい皮肉を浴びせられ、家でも父にやんわりと、社会主義のお

真実の無意味さ



そらしさについて説教されましたが。でも、自分で考えて自分で決意した生き方だと思うと、そんな大人のイヤミなどは平氣でしました。大杉栄にひかれ社会主義をもっと勉強する必要があると痛感したのも、そのころです。でも、私は結局そこまででした。私は何も行動することができなかつた。それどころか前にせまる受験におののき、授業再開の現実の必要性と、真実の無意味さのジレンマに悩むばかりで、厳然たる現実の前には私の決心も怪しくなるのでした。そんな私にも警察官導入とロッ

に顔を出したりすることを余儀なくされたのです。
私があの闘争の中でたとえ何らかの行動を起こしたとしてもそれが余程のことではない限り、処分の対象にはなり得なかつたでしょ。私の経験がきれいなところからです。それにしてもあの処分！
私はお正月の七日間を暗い、憤った気持ですごしました。元旦に新聞で処分を知った気持はなんともいえません。処分そのもののへの怒りと不安とが、私にお正月気分も感じさせず、勉強に手をつけさせませんでした。
そして八日の門前の闘争と教師の冷い眼差、私はそこにはじめて、教師の本当の姿、仮面をはいた赤裸な姿をみたような気がしました。それなのにあなたの方の闘争に対して、なんの態度も示さず、単に教師から顔をそむけてとおることが精一杯の抗議であるとの辛さ。私は今まで、信じたい信じたいと念じてきた教師とあなた方のあの闘争に何度、口惜しさ、情なさの涙を流したかしません。
毎日を、受験勉強に汲々としている今、私は完全なる敗北者以外の何者でもありません。大學に入つても闘争は私から縁どらるものであるよ。

のいくじのなさが今からおしゃれられるのです。
でも、私のように自分ではなにもできないおくびょうものであります。あなたがたがた自分たちの闘争にしてゆきたくても声なき声援を送っているものも多いのです。私はあなたがたが処分闘争を貫徹されることを希望します。自分はなにもしないくせに、と思うでしょう？私もそう思います。理解してくれとはいません！ただ許してほしい。この体制が私のような人間を多く育成していくことを考えて。
友人のMさん二人がこんなことをいいました。「何らの前提もなく、相手の人格や思想に対する認識もなしにお元気で、などというは無責任で、おかしい」「敵に対してその健康を祈るのはおかしい。教師がバリの中の人の『健康を慮つて、説得する』というのを欺瞞である」と人たちと同じ立場から私は貴女に心から言います。
「健康に気をつけて」と、
「健康に気をつけて、決して敗北者とならず、挫折せずに闘かってゆかれる」ことを祈っています」と。

手紙、ほんとうにあります。
う。夜眠れないことを除いて、
たいそう元気でいます。

十月には、おなじにまじめました。明るい微笑と躍動する肢体と詫いの意志が重なりあって「生活をつくり、進歩と増殖と蓄積の巨大な貧しさでぬり固められたの日常性の蔓延る、そのシルクスクリーンを、べったり闇に塗りつぶすんだ！」と駆けだしたのに、あなたの手紙読んだら、まるで、権力を睨みつけつつも、踏みにじる側と踏みにじられる側との、相互了承性があるようであ、あたしたち、九十日たつても、やるせないほど脆弱いのだと思った。

七十年に入つて、少年係から公安へ、私服二名から十六名へ制服二十名から六十名へといく官憲による立川警備体制の強化の中、更に高揚する緊張関係の創出において（それも「生徒会」などという、居直りの安住地帯を破壊した地平で――そなたはまた、一切の何々主義者の大衆操作の場をも奪いとる、自立の拠点でもある）どこまでやれるか、という信じられないような賭けとして、処分闘争は始ましたのでした。そして、立高悪

闘争は、根源的な混亂情況の創造を、最も厳しい弾圧化で実現する、極めて、ラディカルな性質を、あなたにもみせつけたにちがいない。魂の痙攣で闘争があるのでない限り、この賭けは、「絶対処分させない」ところから復び永久律動の輪を広げてゆくでしょうし、あたしたちみんな極左冒險主義者で挑発者で犯罪者で、最後まで憎まれ役でありたい。とはいっても市民社会秩序での遠近法で区切られた時間感覚の渦中では、「革命的前衛」が「展望」を語る時さえ、それらの威厳に溢れた言葉

仙に住む魔者は、一方で「今はその時でない」とへ今日の賭けに全額はたくことにおびえ、一方では、「耐えてゆく」思想性と綱領の獲得に溺れてゆく、こうして現在を明日に売りわたす時、全生活の中で失なわれる、とりかえのつかないものは何か。類型は、権力の側の終身刑の鉄則だ。生かさず殺さずうまくやってきた奴ら、「明日という字は明るい日と書くのね」という残酷このうえない歌に「俺たちに明日はない」と叩きつける、そんなこと第3世界でしかできないというのも実はデマなものだ。

は な い



が止まらなかつた。でも、云々の覺悟がなければ闘えない、とか、云々の立場でなければ闘えない筈だ、とか、「語る言語がない（ある）」の一切合財、いつだって抑圧者の側の「闘かわせない」論理でしかなかつたじゃないか。あたしたち、市民社会の甘い汁を吸つてゐるどの瞬間からだつてニタッと笑つて、ひとり立ちあがつてゆく。

凍つてついた路上で、軍手をはめた番犬たちと、あたしたちの乱れた境界に、「通りがかりの者ですけれど」とかウソつて侵入してきて、したり顔で「先生の言うことお聞きなさい」「静かに勉強しなさい」など、その乱暴な言葉は「なんですか」とか、ヘドのでのるような御託さつくざつく並べたて、あたしたちの引き裂かれた衣服は視ないことにしていた母親たちなた方が間違つてゐる。あたしたちの一人が「平和なんて欺瞞だ」と叫んだ時、ズラッと並んで一齊に、ウキキキと狂信的な大古噴をつくるだけの量になるだろう。ともかく、「生活」の大陰に隠れようとしたつて誰れも

あたしたち、敵とか味方とか、隠れられる生活なんか持つてやしないのに、持ったことにして、いる自己操作で街は一杯だ。状況においての一回性ぬきで規定するのやめよう。語つて、いる肉体が忘れ去られれば、言葉は現実感覚でのワン・クッシュになり下がる。沈黙がじっと危機的様相をおびて立ちすくんでいるのなら、あたしたち、再び街で出会うことによって、これららの言葉は、かき消されなければならぬ。あなたの、そしてあたしの肉体のつき刺さった「闘えない」部分の咎の痛みは、じゅくじゅくとあたしたちを苦しめるだろうけれど、いまのところ痛みを全身にひろげて、いく以外、まともに他人の顔みて生きてゆく方法はないようと思えます。

69

安保フンサイへ・人間の渦巻を！

肖像権とは、私たちがどんな人もどんな状態にあるときでも持っている人格的性の権利である。

写真を撮らせない権利

いただけない撮影

デモ行進をするさい、報道機関や、アマチュア、それに私服の警察官がさかんにデモ参加者の写真をとる。

デモをするのは、誰かに何かを訴えたいと思うからこそするのだから写真をとられることは望むところであるが、警察官の撮影だけはいただけない。

いっさいあれば適法なのだろうか。

そこで肖像権というものから考えてみよう。肖像権というのをいいたい何だろうか。

カメラとという写す技術のないところでは、自己の姿が映像として自己から分離することはないはずだし、写すことによって定着化した映像も、出版・TVなどの公表の技術のなかたところでは、肖像権というものを考へる必要もなかつたはず。

とすれば肖像権とは、技術に

■ 警察官に肖像権はあるか

意に反した公表はされないと一定の信頼があるから、さしあうとしてデモしているのでは問題はない。

が、問題は警察官によって写されるときのことだ。

デモ参加者は警察に見てもらうとしてデモしているのではない。つまり信頼関係がない以上、警察官がデモ参加者を暗黙の承諾を得て写しているのだという理由はたたない。

デモが適法であるかぎり、警察官が撮影する何の権限もないわけである。

もし写すなら、肖像権の侵害であり、違法である。だから写されることを拒否できるばかりか、写された人は、写したフィルムを引渡せと要求することもしたがってどんな人も、どんな状態にあるときでも持っている権利であるといえる。

デモ行進中でも、肖像権そのものは参加者一人一人が持つており、したがって写す人が誰であれ、写されることを拒否することはもちろん、いったん写されたものであっても、写されたものは参加者一人一人が持つており、したがって写す人が誰であれ、写されることを拒否することは不可能である。

しかし実は、この場合、肖像権を侵害したということを、かれこれ法律的に争う必要はない。

社会党とともに公明党もまたいまや、深刻な反省と党体質改善論議に明けくれている。

深刻な反省、というのは、信仰者集団的言動についてであり、党体質改善とは、創価学会が自身の信する価値への真向うからの批判に対して、文字通りの拒絶反応を示し、反攻に立ちあがるのはあたりまえである。もともと、このさいでも言論圧迫が許されることはありえない。

しかし、公明党が特定の信仰集団への批判・攻撃に對して拒絶反応したり、反攻したら公党としての資格を疑われてもしかたなかろう。

藤原弘達氏の創価学会批判書の出版に、公明党が圧力をかけ、さらにはその効果を上げるべく、公明党にとって「敵」であるはずの自民党幹部まで動かし

デモ規制の警察官に、そのとき、肖像権を主張できないのである。なぜなら、彼らが国家機関の

手足として公務を執行しているのである以上、個人としての権利である肖像権行使できるはずがないのである。(弁護士)

公明党よ、ます

疑われた公党の資格

たというものである。

教義問答から、党体質改善は不可能。特定の信仰集団の代表者への誤別は大政治行動を起こすことだ

信仰というのは、絶対的価値をみずから信ずるものに見出さなければ成立しない。だから創価学会が自身の信する価値への真向うからの批判に対して、文

字通りの拒絶反応を示し、反攻に立ちあがるのはあたりまえである。もともと、このさいでも言論圧迫が許されることはありえない。

しかし、公明党が特定の信仰集団への批判・攻撃に對して拒絶反応したり、反攻したら公党としての資格を疑われてもしかたなかろう。

公明党が、こんどの「出版妨害」事件で、言論の自由を犯したのではないかという疑惑とともに、公党としての立場も疑わ

れたのもこの点にある。

教義問答は不毛

ささかちがう。 いうまでもなく公明党の政黨としての成りたちは他党とはい

創価学会という特殊な信仰団体の会長の「お声がかり」で誕生し、その主要メンバーの全部、全体の九割が創価学会員で占められている。「公明党は創価学会の政治部門」というのが、彼らの規定だった。だから今回の創価学会批判書の出版について、公明党がまさに政治的に「対処」したのは、それが選挙期間中であったといふ以上に、当然の筋道であったのだ。

出版妨害、言論圧迫の事実について答えないまでも、公明党がこのような事態をひき起す大本の党と学会の密着に、まずりくみはじめたことはよいことだ。

しかし、現状の「党体質改善」論議は、どうも文字通りの教義論争に終始しているフシがある。「教義問答から、改革の道を見出すことは、新党を作ることよりもむづかしい」と、ある人が社会党的再建論争を評したのが、このことはよりいって、公明党にあてはまるだろう。

じられた票が何を望んでいるかを知り、日米安保解消であれ、日中復交であれ、汚職追及であ

動をおこすべきであろう。そのなかでこそ、ほんとうの市民の党として成長できるのだ。

い必要なのは、多くの仲間を集めることである。その場合さまざまな仲間をいかに集めるかが、一つの課題となる。

かくツブしたんだ。」などと語
らせれば、「それだけのことを
やってきた先生が、いまは何を
しているのですか」と切のこづ

アンボ教育

反戦派高校生に なる方法

ファンレターを書き不
良派にも友人をもち教
師に彼の学生時代を語
らせてみよう……

議論好きの仲間、スポーツ派の仲間、音楽派の仲間など、多様な層から「仲間」を集められた——極端にいえば、ガリ勉派に一人、不良派に一人、強力派に一人、

うはっきりした△造反派△に反戦派△に成長している自分を発見するだろ。

そうしたら街へも出よう。怒濤の(?)デモンストレーションが、キミを待っている。

もしもあなたが、
(造反技類)

だから今回の創価学会批判書の出版について、公明党がまさに政治的に“対処”したのは、それが選挙期間中であったといふ以上に、当然の筋道であったのだ。

出版妨害、言論圧迫の事実について答えないまでも、公明党がこのような事態をひき起す本の党と学会の密着に、ますと

りくみはじめたことはよいことだ。

しかし、現状の“党体質改善”論議は、どうも文字通りの

教義論争に終始しているフジがある。「教義問答から、改革の道を進むことは、新党七年

道を見出すことは、新党を作ることよりもむづかしい」と、ある人が社会党の再建論争を評した。

が、このことはよりいっそうハ
明党にあてはまるだろう。
ではどうするか。公明党に扱

アラン・ポー教育

反戦派高校生になる方法

まず手紙を書こう

高校生のキミに、はじめて話してみたいことがある。

本格的な△反戦高校生▽になるためには、どうしたらいいかということがある。

実際的な日常生活をふりかえてみたとき、いろいろな面でくなるだろう。

自分が孤立しており、自分の考え方なり、行動を、いかに反戦につなげるか、まったくわからなくななるだろう。

そこで、どうしたらいいか。まず、新聞、本、雑誌、テレビで感動した人がいたら、つまり筆者や語り手に、とにかく手紙を書いてみよう。

たなんなる感想でもよい。質問

や討論をしかける形にまで自分の考えを煮つめて書けば、なおいいだろう。

一人でも返事があれば、キミはもう孤立してはいない。

(小田実は忙しいだろうな、だからかならず返事がくるとは、かぎらない。でも遠慮はいらないんだよ)

住所がわからなければ、雑誌社や出版社に往復ハガキか何かで問合せればいい。出版社気付で手紙を出す手もあるが、忙しい会社が多いから返事が届かない公算の方が大きいだろう。

次に、学校で「仲間」を作つていいこう。これはなかなか困難かもしれないが——やらなければならぬことである。そのさ

れ、公害追放あれ、汚職追及あれ、日中復交あれ、街頭に出て先頭に立つて、大行

動をおこすべきであろう。そのなかでこそ、ほんとうの市民の党として成長できるのだ。

(市民B)

い必要なのは、多くの仲間を集めることである。その場合は、さまざまな仲間をいかに集めるかが、その集団を成功させるか否かの決め手になると思う。

議論好きの仲間、スポーツ派の仲間、音楽派の仲間など、多様な層から「仲間」を集められた——極端にいえば、ガリ勉強派に一人、不良派に一人、強力派に一人、弱小派に一人、仲間ができたならば、それでもう戦闘体制はできたのだ。

キミ自身についていえば、理屈で説明する相手と、直観や情感で説得する相手を持つことで、キミ自身がまったく反対の型の人間に対したときでも恐れず率直に自己の意見を伝達できる、いわば真の力ある△反戦派／に鍛えられる一つの布石となるのだ。

かくツブしたんだ。」などと語らせれば、「それだけのことをやってきた先生が、いまは何をしているんですか」と切りこむ。うはっきりした△造反派△反戦派△に成長している自分を発見するだろ。う。そうしたら街へも出よう。怒濤の(?)デモンストレーションが、キミを待っている。

(造反技師C)

もしもあなたが、

自衛隊員なら、聞かせてください。『週刊アンボ』の感想を、自衛隊の生活を、それからあなたのこと。

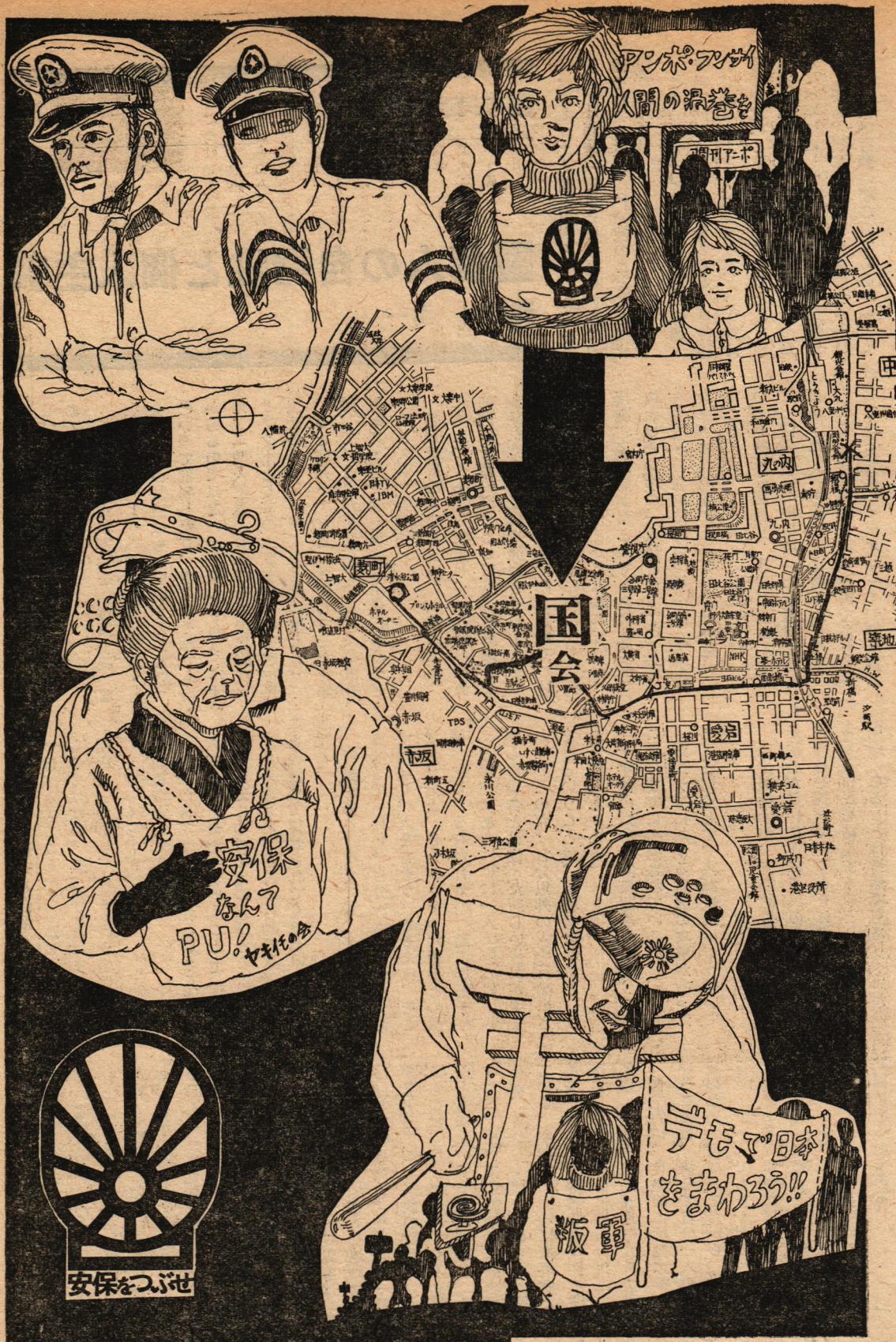
小西誠元三曹を知っているでしょう。彼が隊内でまいたビラ、「アンチ安保」には、「誰が自衛隊の敵で誰が味方なのか」という根本的な問題についての訴えがありました。

あなたはどう考えていますか?

あなた自身は、どう感じているのです?

手紙を書いて下さい。秘密は守ります。それでも心配な方は、匿名なりなんなりで。

『週刊アンボ』編集部投稿係



■市民運動入門

■個人の自発性と個人主義

■吉川 勇一

こに一定の世界観・社会観を求めてはないのであるし、あるはずがないのである。

それなのに市民運動を「市民主義」などと規定し、「積極的な世界観・社会観をその基礎にもつてゐえない」といって批判したり、さらにそれでも何かあるのではないかと探しまたたず

え、「個人主義（およびその現代的ヴァリアントとしての主我主義）こそが市民主義のイデオロギーの基礎に横たわっていると言える」などと断定してそれを非難している人が相変わらずいる。（半田秀男論文・芝田進午編著「現代日本のラディカルズム」所収）

市民運動を「市民主義」「個人主義」にもとづくものと規定し、「人間の社会的闘争を階級闘争として見、階級闘争を創造的な——歴史を発展させる——ものとして見る見方への道は閉ざされて」いる（同書225ページ）というにいたっては現実の運動とまったくかけはなれている。反対市民運動がたどってきた軌跡をみてみればその中の一人ひとりにとって、主導的・自発的に現実の社会に存するこのことはイデオロギーとしての個人主義ではないし、またもちろん、自分勝手、他人のことは一切知らずという無責任な態度のことでもない。ありとあらゆる機会にいつたり書いたりしているのだが、ペ平連にしても、いわゆる市民運動にしても、異なる思想や立場をもつてひととの共同の行動の場なのであるからそ

を参加者に前提として要求したり、あるいは注入することをあらかじめ意図するものではない。こんなことはまったく不明のことであり、今さらいうのは恥ずかしくなるくらいだ。

組織者としての責任

個人の自主性、自発性ということが個人主義や自分勝手ということではない以上、運動の中で他の人びとの関係が当然考慮され、自分の行動の選択がそれとの関連で律せられてくるということである。

行動がある。集会でも、デモでも、ビラまきでもいい。自分一人だけでゆくのではなく、人をさそう。さそば、そこでは自分と、自分がさそった相手との関係が生じ、それが自分の行動に影響を与えるはずである。単に一人で個人的に参加した場合は違った新しい状況が生まれているのだ。自分以外の人を行動にさせようということは、組織者になるということだともいえる。

十年前の六〇年安保闘争の中で、このことはすでに指摘されている。

市民デモに対する右翼の攻撃があつたことはと関連して、荒瀬豊氏はこう書いている。

「抗議行動が、直接的暴力にさらされ

ざましい。しかし権力のがわからぬ無制限の反撃が予測されるときには、抗議行動の成員は戦闘にたえられぬ人に危険がおぶることを、最初から避けていなければならぬ。市民の行動を組織し、ひろげ、ふかめようとするものには、つねにきびしい状況判断が要求される。鶴見和

子は、この一ヶ月のあいだ「声なき声の会」のある父親がとった行動を紹介している。彼は、六月四日までのデモのときには、子どもをつれて抗議に参加していた。しかし、六月十一日以降は、局面の緊張を考慮して子どもを連れないのでデモに行っている（「子どもとアンボ」「作文と教育」八月号）この父親の行動をささえているものは、自分が連れてくる立場にある子どもにたいする責任である。そこにはすでに、すべての組織者に要求される義務が、きびしく問いつめられ、実行されている。参加者が同時に指導者としての義務を感じ、指導者なき集団にやがて到達する芽が、ここにはあつた。（日高六郎編「一九六〇年五月一九日」岩波新書）

自主的に、自発的に行動に参加するということは、決して自分一人の個人的満足のためではないのだから、他の人びとを誘つて一人でも多くその行動に加わるよう求めるのは当然であつて、そしてそのことは「組織者としての義務」の自觉にみちびくのであり、それが、前回に書いたような「6・15方式」を成立させる

20世紀の谷間から

作詞・ビタミンC
作曲・たに なをと



20世紀の谷間から歌詞

にじゅつせいきの たにまから ゆたしーはさけぶ
 つなをあろして つなをあろしてーおくーれー
 うえからみてるひとは いるーけれど だれもーいとさえ
 あろしてくれない よう たにまから たにまから

1. 20世紀の谷間から 私は叫ぶ

綱をあろして エ 綱をあろしておくれ エ
 上から見てる人はいるけれど
 誰も糸さえあろしてくれない
 。

2. 20世紀の谷間から 私は叫ぶ

腹へった オニギリなど落しておくれ エ
 上から見てる人はいるけれど
 誰もパンクズさえほってはくれない

3. 20世紀の谷間から 私は叫ぶ

ヨーシわかった 今やっとわかった
 人をあてにはするものか
 私が自分で登ってみせよう
 谷間から 谷間から

© Copyright 1970 by 「20世紀の谷間」社 OSAKA

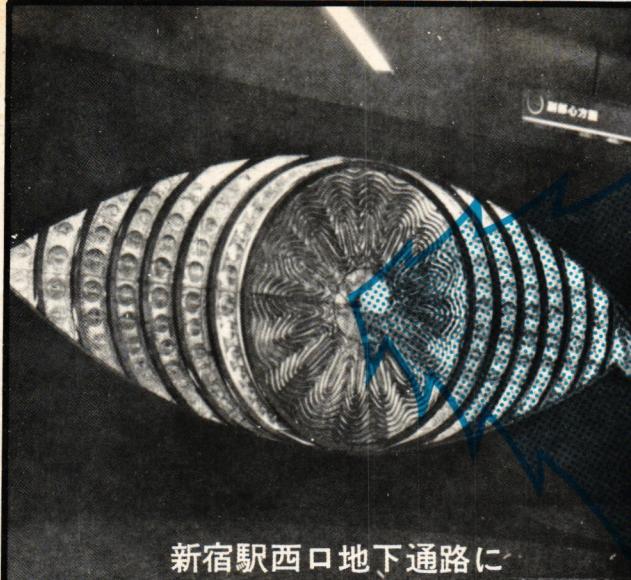
★ 週刊アンボ4号～7号までにこのページにのったフォークのテープを東京フォークゲリラが作りました 問い合せ→アンボ社“うた”係（往復ハガキで）

★ 各地フォーク集団を紹介します
 「20世紀の谷間」社
 兵庫県川西市笠部島田170
 坂本 洋 気付
 「やるぞどこまで」工房
 埼玉県浦和市文藏1672
 東 気付
 「福岡フォーク戦線・トステロブ」
 博多郵便局私書箱12号
 「東京フォークゲリラ」
 東京都世田谷区玉川等々力町3の74

フォーク集会 '70第1弾

—西口広場裁判へ向けて—

2月28日(土)PM6／池袋・豊島公会堂
 中川五郎(予定)・たになをと・小黒弘ほか
 スライド／西口フォーク集会「終りから始まる」
 東京フォークゲリラ「20世紀の谷間」社 共催



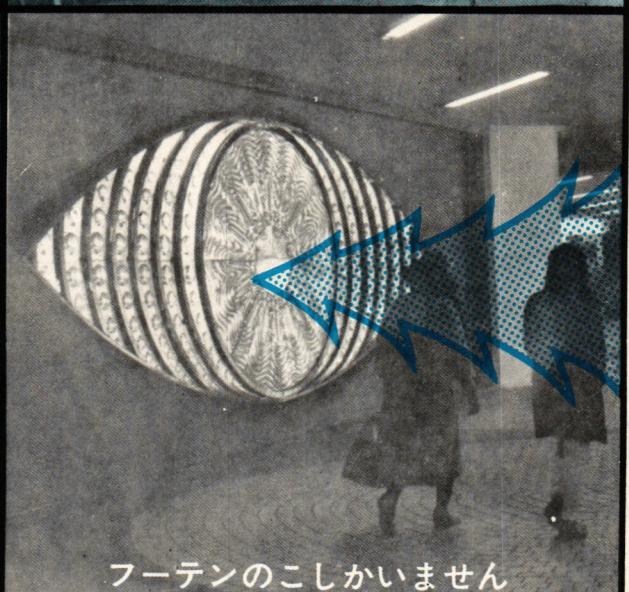
新宿駅西口地下通路に



お上の目？が表われて



今はもう



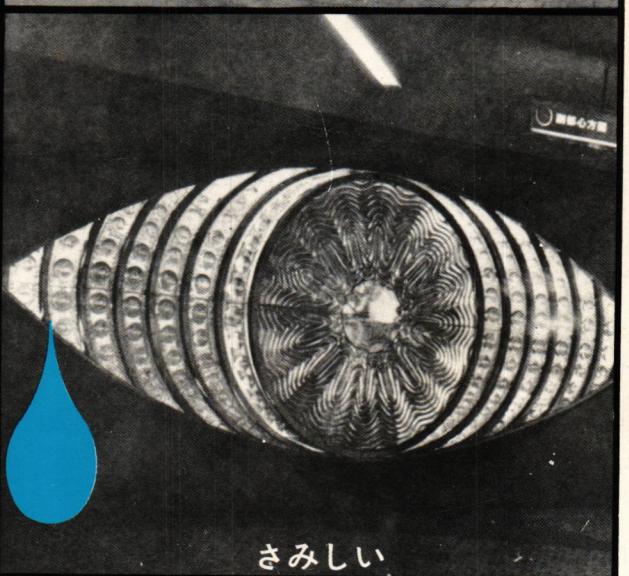
フーテンのこしかいません



雑誌コード 5064

週刊アンポ

第8号（昭和45年2月23日発行）編集 発行人 小田実
発行所(有)週刊アンポ社 東京都新宿区神楽坂6-44
電話 03-267-2471代 振替 東京 4286



さみしい